
Crystal Legend 7_2 ~トルマリンの胎動~

Crystal

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

C r y s t a l L e g e n d 7 | 2 トルマリンの胎動

【Nコード】

N 8 8 4 2 D

【作者名】

C r y s t a l

【あらすじ】

ある日、魔石に憑かれることで人が魔獣へと変化してしまう奇妙な事件が発生する。魔獣化事件を解決しようとする異世界の少女たち…。正義に目覚めた魔獣と、伝説の宝石騎士トルマリン復活を目論む魔族の影がちらついていた。

第1話 魔獣化のうわさ(前書き)

2002/11/09～2003/03/18 連載作品

初期作品なので、かなり読みづらいです。

「もしかして怪談？」「超獣神グランゾル」「なんちゃらプラネット」等、全ての作品の大本は、この「Crystal Legend」シリーズとなります。

同一作者小説紹介

C r y s t a l L e g e n d シリーズ 「Crystal Legend 7|2 トルマリンの胎動」、「Crystal Legend 7|3 はじまりの時代」、「Crystal Legend 7|4 もしかして怪談？」

超獣神グランゾル シリーズ 「超獣神グランゾル」、「鳳凰編」

なんちゃらプラネット シリーズ 「なんちゃらプラネット」

美咲ちゃん シリーズ 「もしかして怪談？」

4コマ劇場 シリーズ 「桜のひみつ」、「ラズベリル ショ

ート劇場」

第1話 魔獣化のうわさ

深夜…。鬱蒼とした森の中を、三人の少女がライトを手に進んでいた。

無言で辺りを見回す少女たち。このような時間帯、森にいたこと自体奇妙なことだが、それ以上に不思議なのは彼女たちの出で立ちであった。

少女たちは、身体の一部を覆う簡易な鎧を身に付け、腰に剣を携えている。まるで、これから何かと戦うような姿なのだ。

「ねえ、本当にいるのかな？」

最後方を歩いていた少女が呟く。彼女の名前は優子。この春、光風高等学校に入学したばかりの高校一年生である。

「たしかに、いるとするなら暗闇が多いこんな森の中だと思うけど……っと」

優子は樹の根に蹴躓いた。

「よっと。優子…、大丈夫？」

二年前、この世界にやって来た精霊族の少女セリアが、倒れそうになった優子を支える。

「樹の根がかなり出ているから気を付けてね」

セリアは、夜目が利くのか、ライトの明かりに頼ることなく辺りを見回した。

「セリア、ありがとう」

優子は、セリアの肩につかまりながら体勢を立て直す。

月明かりさえ届かぬ森の中、視界はライトの明かりに照らされている箇所のみである。セリアたちが一緒にいてくれるから平気なのだが、もし優子一人でこんな森に入れたら気が狂ってしまうかもしれない。そんな雰囲気漂っていた。

「ちよっと休憩する？」

先頭を歩いていた妖精族の少女アリスが、優子を心配して問いか

ける。

森の中に入って、かれこれ四時間は経過している。その間三人は歩きづめであり、旅慣れているアリスやセリアならともかく、普通に生活していた優子にはかなりキツイ状態であった。

「助かるよ……」

優子は、大きいため息をつき、近くの樹に寄りかかって座り込んだ。

そんな姿を見て、セリアはくすつと微笑む。そして、鞆からミネラルウォーターのボトルを取り出し優子に手渡した。受取った優子は、蓋を開けて二口ほど含んだ。

「それにしても…、まったく手掛り無しだね」

アリスが独り言のように呟く。

「あたしたちに気づいて身を潜めているのか、情報自体がデマなのか…」

アリスは、視線をセリアに向けて、意見を求めた。

セリアは、目を瞑って考え込む。

「ここは、光風町からかなり離れている。もしこの地区で魔獣化が起こったとするなら、光風町の魔獣が現われたと考えるより、新たな魔石が撒かれたと考えるべきでしょうね」

セリアの言葉に、アリスも同意した。

今年の四月ごろ、アリスたちが暮らす光風町に異形の怪物が現われた。

光風町には、精霊界へと繋がるゲートこだまの樹がある。そのため、最初は他の世界から魔物が入り込んで来たと思われていた。しかし、アリスたちが怪物を倒すと、その身体は人間の女性となった。アリスたちは、戸惑いつつも女性を介抱する。辛うじて生きていた女性の身体には、魔力を放つ黒い石が憑いていた。

普通の病院では対処できないと判断したアリスは、女性をある特殊な施設に預けることにした。三年前に存在が知られるようになった

た異世界を研究するための施設である。

アリスたちは女性の意識が戻るのを待つて事情を聞こうとしたが、石が放つ魔力の影響が一向に目覚めようとしなかった。そして、石を調べていた研究員から、驚くべき内容を聞かされることになる。

石からは触手のようなものが伸び、女性の神経と繋がることで身体のすべてを支配している。この石を取り除くことは、現代の医学では不可能である…と。

途方に暮れるアリスたちを嘲笑うように、光風町では別の怪物が出現した。怪物は次々と人を襲い始め、事件は世間に知られてしまう。怪物に襲われると、同じような石が憑けられ、その人も怪物に変化してしまうのだ。

異形の怪物を魔獣、魔力を放つ石を魔石…。いつしかこの事件は、魔獣化事件と呼ばれるようになり、光風町の住人を恐怖で震えさせることになった。

研究所の調査により、魔石は人間の魔力や大気中の魔力を蓄えることで魔獣化を起こすことがわかった。そのことから、魔石に精霊力を照射し、魔力を中和する治療法が考え出される。

魔石こそ取り除くことは出来ないが、定期的に治療を受けることで再び魔獣化することが防げ、普通に生活することが出来るようになったのだ。

だが、いつ魔獣化するかわからない魔石憑きは、人々から忌み嫌われ差別の対象となっていた。そのため、魔石憑きであると知られるのを恐れ、治療を受けない者も現われる。

もちろん、魔力を中和しないと、いずれ魔獣化してしまう。光風町では、そんな悪循環のようなことが繰り返されていた…。

「でも、興味本意で光風町に来て魔石に憑かれちゃった…ってことも考えられるよね」

優子は、立ち上がってお尻に付いた土を払い、手にしたライトで辺りを照らしてみた。魔獣は闇を好んで潜む。噂通り魔獣がいると

するなら、こういった森の奥と思われるのだ。

何気なく上の方を照らすと、風によって葉々が不気味にざわめいている。身震いを感じてライトを下に向けると、その途中で何かに光が反射した。それに気づいた優子は、その辺りを重点的に照らしてみる。すると、樹の枝に真っ白な毛並みの巨大な獣が隠れていた。完全に気配を消し、まるでアリスたちを見張っているようである。光を当てられた白い獣は、低い唸り声を上げた。

「あの光竜は！」

アリスは大声で叫んでいた。

巨大な獣は、魔獣ではなく精霊界で聖獣とされる光竜の幼体であった。成体ともなれば五階建てのビルほどの大きさとなるが、その光竜の大きさは馬か牛ぐらいである。きれいなマリンブルーの瞳を持ち、顔は洋犬のようであり羊のようでもある。そして、頭から後方に向けて黒い二本の角が伸び、背中には立派な翼があつた。

アリスたちは、その光竜を何度も目撃していた。しかも光竜は、アリスたちが魔獣と戦っている最中に現われ、共に戦ったり邪魔をして逃がすこともあつたのだ。そんな光竜が魔獣出現の噂があるこの地にいるのは単に偶然だと思えない。

「あいつ、ぜったい何か知ってる！」

アリスは風を纏って宙に浮き上がり、剣を抜いて光竜に斬りかかった。

光竜は、牙を剥き出しに唸り声を上げて枝から枝へ跳び移る。素早い動きにアリスは一瞬その姿を見失うが、光竜が放つわずかな精霊力を感じて真後ろに火炎球を放った。

辺りを真っ赤に染めて火炎球は樹の幹に着弾する。光竜は地面へと身を投げ出し、それを追ってアリスも着地した。

向かい合う光竜とアリス。そのピリピリした空気は、真っ暗で二人を捉えきれない優子にも伝わっていた。

「あなた…、言葉がわかるんでしょ」

アリスが光竜に問いかける。

竜族の中でもずば抜けた知能を持つ光竜は言葉を喋ることができ。さらに、人型へと変化することもできるはずだ。

ゆっくりと後退る光竜…。戦う意思は無いようだが、アリスの事情は違っていた。光竜を捕まえ、魔獣化事件について知っていることを吐かせようと考えていたのだ。

「答える気は無いようね…」

アリスは、剣を構えて実力行使に出た。

一瞬で間を詰めアリスが剣を下段から振り上げると、光竜は頭を仰け反るように刃を交わす。すぐさまアリスは身体を回転させて光竜の首筋に回し蹴りを喰らわせる。光竜はその衝撃に吹き飛ばされるが、それほどダメージは無いようでゆっくりと起き上がった。

光竜は牙を剥き出しにアリスを睨む。すると、光竜の前足にある変化が起こった。青白い光が延び、まるで宝石のように輝く鋭い爪が現われたのだ。

それを見たアリスはくすつと微笑む。

「光竜の精霊力を刃とする、クリソベリルの爪…だね」

アリスは、構わず光竜に向かって突っ込んだ。

アリスの剣とクリソベリルの爪が重なる。その瞬間、大きな金属音が聞こえ、アリスの剣は粉々に砕け散った。

「きゃっ！」

今度は、アリスが吹き飛ばされる。

樹の幹に身体を叩きつけられ噎せ返るアリス…。セリアに支えられて身体を起こすが、光竜は既に姿を消した後だった。

砕けた剣を見て、アリスは憎々しそうに呟く。

「今度は、あたしもクリソベリルで戦ってやる…」

アリスは、悔しさに舌打ちをした。

第2話 樹神の少女

夜が明けて魔獣詮索を終えたアリスたちは、森の奥にある樹神神社に来ていた。なんと彼女たちは、そこで朝食を御馳走になろうとしていたのだ。

「まったく、久しぶりに会いに来たと思えば」

朝食を運んできた少女が呆れるように呟く。彼女の名前は飛鳥、優子とは幼馴染みの親友である。飛鳥は、四年前のある事情で、金緑石の叔父宅へ引っ越して来ていた。

「はい、お茶…」

飛鳥はむすつとした顔でお茶を差し出す。

「ありがとう」

その対応に優子は笑顔を返した。よほど親しい間柄でなくては、ここまで世話になれないだろう。

「で、いまをときめく人気アイドルグループが、いったい何をやってたのかな」

飛鳥は、向かいの席に座って、優子をじっと見つめる。優子は、お茶を啜りながら、上目遣いで惚けた。人間族優子、妖精族アリス、精霊族セリア。彼女たちは、アイドルグループSPINE^{スピネル}Lを結成して活動している。

一年前のデビュー時こそ珍しさで騒がれていたが、その歌唱力や演技力に加え好感度も上々で、現在ではトップアイドルとなっていた。

毎日どこかの番組に必ず出演しているほどの人気なのだが、二週間前に執り行われた魔王討伐三周年記念イベントを最後にその活動を停止していた。各マスコミは当然のように理由を求め、今朝の二コースでも大々的に騒がれていた。

「ちよーっと、急ぎで片付けないといけない用事があった」

優子は、助けを求めるようにセリアを見つめる。だが、セリアは

飛鳥と初対面であるため、苦笑するだけであつた。

まさか、『ご近所に魔獣が現れました』』 などと言えるはずもない。実際に現れたのは光竜だったが、その登場は魔獣の存在を十分に予感させるものである。パニックを起こさないためにも、事は極秘裏に進めなければならぬのだ。

「まあいいわ…」

飛鳥は、諦めたようにため息をつき、につこりと笑顔を見せた。

「金緑石にいる間は、家に泊まっていきなよ」

飛鳥も優子との再会を喜んでいるようである。

「じゃあ、お言葉に甘えて…」

それを聞き、優子は畳に横たわつた。

「つて、寝るのかい…」

食べたすぐに寝ると牛になるぞ…と言いたかつたが、よほど疲れていたのか、優子は間もなく眠りに落ちた。飛鳥は、押入れからタオルケットを取り出し優子に被せた。

しばらく優子のかわいい寝顔を観察していたが、アリスとセリアがじつと見ているのに気づいて苦笑する。

「え…つと…二人は寝ないの？」

優子の様子からみて、アリスたちも寝てないようである。飛鳥は、照れ隠しにそう問いかけた。

「あたしたちは眠らなくても平気だよ」

アリスが微笑み返す。異世界の住人であるアリスたちは、基本的に睡眠をとる必要がないのだ。

「そんなことより。飛鳥、この辺りに魔獣が現れたって噂…聞いたことある？」

アリスは飛鳥を見つめた。

ずばりな質問に、セリアは啞然とした。これでは優子が気を使つてごまかした意味がまったくなくなる。

「アリスのばか…」

セリアは、頭を押さえて呟いた。

「なるほど、そんな噂が…」

頭の回転が速い飛鳥には、今の質問ですべてが理解できた。

「でも、金緑石に魔獣なんて初耳だよ。デマなんじゃないの？」

飛鳥は、腕を組んで考え込む。

魔獣化事件は、なぜか光風町でのみ発生している。事件が光風町から放射状に広がるのならわかるが、遠く離れた金緑石で突然発生するのは無理があるように思えたのだ。

平然と会話を交わすアリスと飛鳥。じつは、二人とも初対面ではなかった。

今から四年ほど前、飛鳥はこだまの樹の影響で精霊界へ迷い込んだことがあった。

当時は異世界の存在など知られておらず、魔物が徘徊する精霊界に突然ほおり込まれた飛鳥は、パニックとなって脅えるしかなかった。そして、数体の魔物に囲まれたとき、その危機を救ってくれたのがアリスと優子の双子の兄シヨウであった。

飛鳥の幼馴染でもあるシヨウは、驚いたことに五歳のころから人間界と精霊界を行き来しており、魔物や魔族と戦っている勇者だという。

人間界へ戻ってきた飛鳥だったが、その後も精霊界へ転移するところが多くなり、シヨウの助言もあってこの金緑石に引っ越してきたわけだ。

「そ、そうなんだ…」

そんな事情を聞いて、セリアは安堵した。

アリスの正体を知っているのであれば話は早い。SPINEELが魔獣と戦っていたとしても、不思議に思わないであろう。しかし、そこである疑問が頭に浮ぶ。優子は、なぜアリスの正体を知っている飛鳥にも、誤魔化そうとしたのか…。

その答えはいたって簡単。優子は、二人が顔見知りだということを、まったく知らなかったのだ。

そんな様子を、遠くから覗いている瞳があつた。

森の中でも一際大きな樹の枝に隠れているのは、白い毛並みでマリンブルーの瞳を持つ小さな動物……。頭に小さな角があり、背中には控え目な翼がある。この奇妙な動物は、見た目こそ仔犬のようだが、昨晚アリスと戦ったあの光竜であつた。

光竜は、アリスたちの姿を見ながら、大きなあくびをする。

「まったく、いつまで見張っていればいいんですかね」

光竜は流暢に言葉を操る。そして、目を平らにして、ふて寝するようにつつ伏せた。

彼の名前はアクアマリン。生まれてから五年目の、まだ若い光竜である。

光竜は二千年に一度一つの卵を産み、卵が孵るまで七百年を要する。アクアも、卵の状態で七百年以上過ごしてきたため、五歳ではあるが高い知性と戦闘力を誇っていた。

アクアが金緑石に來た目的は二つある。一つは、アリスたちと同じ魔獣出現の噂を確かめるため。もう一つは、金緑石に住む少女、飛鳥の護衛であつた。

詳しい内容は聞かされていないが、飛鳥は何者かに狙われているようなのだ。

「それにしても……。まさか、アリスさまに攻撃されるとは」

アクアは昨晚の出来事を思い出す。

偶然、優子に発見されたことにより、アリスとの戦闘が始まつた。もちろんアクアに敵意は無く、なんとか回避しようとしたのだが結果は知つての通りである。

アリスの動きは予想以上に鈍く、アクアが本気を出せば一瞬で勝敗が付いただろう。シヨウと共に精霊界最強とされたアウインの勇者アリス。噂ほど凄い勇者ではないのかもしれない。

そんなことを考えていると、樹神社で動きがあつた。学園の制服を着た飛鳥が住居から出てきたのだ。

「さてと……」

アクアはゆつくりと起き上がり巨樹の幹を駆けるように地面へ降り立ち、林道を往く飛鳥の後を少し離れて追うことにした。

樹神社を囲む森を抜けると山道に出る。山道をしばらく下ると金緑石地区の住宅街が見えてきて、その中心に幼等部から大学部までの総合学園私立白鳳学園があった。

飛鳥は、この学園へ初等部のときに転入してきて、今年の春から高等部に進学している。予期せぬ原因で転校する羽目になり当初は戸惑っていたが、今では多くの友人もできて楽しく学園生活を送っていた。

「おはよう」

飛鳥が席に着くと、数名の親しい友人が集まってくる。飛鳥たちは、ホームルームまでの時間を、たわいもない話で盛り上がった。今、最大の話題といえば、活動を停止しているSPINEELのことである。

太平洋に浮上したラル大陸で執り行われた魔王討伐三周年記念イベントの後、一切姿を見せなくなった彼女たち……。一部では、メンバーの死亡説まで出ていた。

というのも、記念イベント開催中、ラル大陸では何らかの事件が起こったらしく、中継放送が途切れていたのだ。

突発的な事故や精霊界を良く思っていない人間族のテロ行為とも噂されたが、人々を一番恐怖させたのが魔王復活の噂であった。

ラル大陸は三年前に大魔王ザーヴァと精霊神の五精霊が戦った地であり、記念イベントはその最終決戦の地で行なわれていたからだ。イベントの最中に何が起こったのかは、アリスたちにしかわからない。しかし、噂されているようなメンバー死亡説はデマであることが今朝の出来事で確認された。

（じつはSPINEELの優子と親友で、しかも家に来ているなんて……。口が裂けても言えないよね）

飛鳥は、友人たちの話を聞きながら、そんなことを考えていた。

そのとき、クラス担任がやって来て、おしゃべりが一時中断される。そして、いつもと変わらぬ日常が始まるうとしていた。

第3話 忍び寄る魔族の影

学校が終わり、飛鳥は商店街で買い物をしていた。

今日は優子たちが来ているため、叔父以外の夕食も飛鳥が用意しなくてはならない。大量の食材を買い込み、商店を一通り回ったころには十七時が過ぎようとしていた。

帰路を急ぐ飛鳥だったが、買い込んだ荷物が重くて思うようにペースが上がらない。

「ふう……。誰か迎えに来てくれないかな」

飛鳥は袋を地面に置き、痛くなった手を左右に振る。これから山道が続く、森を抜ければ神社への長い石段を登らなくてはいけない。それには、さすがの飛鳥もうんざりである。

「つて……。いつまでもこうしているわけにいかないか」

飛鳥は気を取り直して両手に荷物をぶら下げる。

住宅地を外れ、ゆっくりと山道へ入っていった。

森に入ってしまったところ、飛鳥は奇妙なことに気づいた。いつものまにか辺りが深夜のように暗く、静まり返っているのだ。季節は六月下旬……。暗くなるにはまだ早すぎる時間である。

この異様な事態に、飛鳥は危機感を覚えた。四年前、精霊界に迷い込んだときのような恐怖が湧き上がってくる。

「こ、これって？」

飛鳥は、荷物の重さも忘れて必死に走った。しかし、どれだけ走っても道は闇に包まれ先が見えてこない。まるで、同じところをぐるぐると走っているような、そんな錯覚に陥る。

そのとき、ズシンズシンと巨大な何かが地面を揺らす振動が伝わってきた。

飛鳥は、えも言えぬ息苦しさを感じて立ち止まる。それが何なのかわからない。ただ、何かが近づいてくるのがはつきりと感じられ

た。

「があがああ！」

闇から浮かび上がるようにそれは現われた。身長が約三メートル、猿のような顔をしており体毛の代わりに爬虫類のような鱗がびっしりと生えている。そんな巨大な怪物が、飛鳥を捕らえようと手を伸ばしてきたのだ。

「いやー！ー！ー！」

飛鳥は、荷物を投げ捨て、迫ってくる怪物から逃げ出す。だが、歩幅の違いから簡単に追いつかれ、行く手を遮られてしまった。

怪物の瞳は異様に赤く、牙をむき出しに唸り声を上げている。飛鳥は腰が抜けたように座り込んでしまう。

すると、怪物の後ろから一人の男性が現われる。長身長髪の整った顔立ちの男で、飛鳥を見つめながら怪物の前に立った。

「樹神飛鳥さんですね」

男は飛鳥を敬うように一礼する。

「私はガーティス。あなたを迎えに来た魔族です」

ガーティスと名乗った魔族は、不気味に微笑んだ。

「ま…魔族！」

その言葉を聞いた飛鳥は愕然とした。

魔族とは、魔界に住み魔力を自在に操ることができる種族のことを指す。

人間族は精霊族より魔族に近い種族だ。しかし、魔族の戦闘能力は人間族の比ではなく、全種族中最強といわれる天空族にも引けを取らない。

そんな魔族を前に、飛鳥は恐怖で身体が震え、逃げることにすら思いつかなかった。

最初に異変を感じたのはアリスだった。

樹神社の住居を飛び出し、林道の途中に広がる黒い霧を見つけ、アリスは風を纏い、上空からドーム状に広がる霧の中へ突入す

る。その瞬間、まるで電撃を浴びせられたように、身体が押し戻されてしまった。

「いったい何なのよ、この霧は！」

アリスは、痺れる身体を押さえながら地面に降り立つ。この中で何かが起こっているのは間違いない。

少し遅れて、セリアと優子が到着する。セリアは、意識を集中させて霧に手を翳した。

「これは…、魔力の霧！」

セリアが信じられないといった声を上げた。

「わたしたちじゃこの霧には入れない。光属性じゃないと、入った瞬間魔力に喰われる！」

セリアは慌ててアリスに忠告する。そのことは、今回の出来事に魔族が絡んでいることを意味していた。

魔力を操る者が精霊力を苦手とするように、アリスたちも魔力を苦手としている。どうやらこの霧は魔力の粒子が集まって出来たもののようで、相反する精霊力を持つアリスは、弾かれたように身体が押し戻されてしまったのだ。

もちろん、アリスなら強引に入り込むことも可能であろう。しかし、それはアリスにとって自殺行為と同じである。

「ちょっと…待って…」

優子は、近くに散らばる買い物袋と学生鞆を見つけた。

「これ…飛鳥のだ。この中にいるの飛鳥だ！」

優子は、一気に血の気が引くのを感じた。

セリアが魔力の霧に入ろうとした優子を掴まえる。

「って、何考えてるのよ！ あなた死ぬ気？」

たとえ人間族であっても、これほど高密度な魔力に触れれば、只では済まないだろう。止めるセリアも必死であった。

「飛鳥、飛鳥——！」

優子の悲痛な叫びが虚しく響く。

どうすることも出来ないアリスは、苦虫を噛み潰したように顔を

しかめる。すると、アリスたちの脇を小さな白毛の動物が通り過ぎた。

魔力の霧に頭を押し付けている動物は、仔犬の姿をした光竜アクアマリンである。

精霊力と魔力が激しく反発し合い、皮膚が裂けて鮮血が飛び散る。そんなことに構わず、アクアは強引に魔力の霧へ進入していった。

「おや…、何かが入ってきたようですね」

飛鳥に触れようとしていたガーティスは、その気配を感じて後方へと身体を引く。

途端に、白い塊がガーティスと飛鳥の間に飛び込んできた。純白の毛並みを所々赤く染めたアクアである。

「がるるう！」

アクアは、威嚇するように、唸り声を上げた。

「がつががぁー！ー！ー！」

大きく吼えると、その場から光が溢れ出し、魔力の霧を打ち消すように広がった。

光はアクアを中心にどんどん大きくなり、魔力の霧を中和してゆく。猿のような怪物は、その光に脅えたのか、闇へと姿を消してしまった。

「な、なんなの？」

飛鳥はそんな様子を、ただ呆然と眺めていた。そのとき、闇の霧が晴れた場所から、アリスが飛び込んできた。

アリスはガーティスの姿を確認し、虚空から聖剣クリソベリルを取り出す。

「魔族が、彼女に何の用？」

静かに問いかけながら、ガーティスとの間合いをはかった。

「やれやれ、今日のところは引いたほうが良さそうですね…」

ガーティスは、手を顎に当ててため息をつく。すでに魔力の霧は消え去り、優子とセリアも駆けつけていた。

「これだけの護衛が付いているとは、やはり間違いなさそうです。」

飛鳥さん、またお会いしましょう…」

ガーティスの姿は、最初からそこに無かったかのように掻き消えた。

「飛鳥……！」

優子が飛鳥に抱きつく。その身体は、飛鳥以上に震えていた。

飛鳥は優子を抱きしめ、魔族ガーティスのいた場所に目を向けた。
(あの魔族…、わたしを迎えに来たって…)

ガーティスのそんな言葉が頭から離れない。飛鳥は、何かとつもなく悪いことが起こりそうな予感がした。

「ところで…」

アリスは、そそくさと場から離れようとしていたアクアマリンの頭を鷲掴みする。そのまま持ち上げて、顔を付き合わせた。

「あんた、昨日の光竜ね」

その言葉に、優子とセリアがびっくりする。アリスは、見た目がまったく違うアクアの正体を、完全に見抜いていた。

アクアは、なんとかアリスと視線を合わせないように惚ける。だがそれは、自分がただの仔犬でないことを認めているようなものであった。

「アリス…、本当なの？」

優子は、いまだ信じられない様子で仔犬型のアクアを見つめる。

このかわいい仔犬が、昨日の光竜だとはとても思えないのだ。しかし、仔犬が魔力の霧を消滅させたのも、紛れもない事実である。

「ただの犬に、こんな角や翼があると思う？」

アリスは、アクアの頭を見せたり、小さな翼を広げたりして説明する。

アクアは文句も言わずに耐えていた。どうあっても、正体を明かさないうつりのようである。

「まあ、この光竜への拷問は後にして、家に帰りましょうか…」
アリスがにやついた顔で呟く。

「つて、拷問ですか！」

そんなセリフに、アクアは思わず叫んでしまった。

「あ……」

集中する視線に、大汗をかくアクア……。叫んでしまった以上、ごまかしは利かないだろう。

頂垂れたアクアは、これからの質問攻めを覚悟するのだった。

第4話 SPINELの新メンバー

翌日、早めに登校した飛鳥は、机の上に項垂れながら昨日の出来事を思い出していた。

あの爬虫類のような獣人は、おそらくアリスたちが捜していた魔獣であろう。魔獣を見たのは初めてだったが、あれが人間の変化したものであるなど、とても信じられなかった。

これまで魔獣は、光風町とその周辺にしか現われなかった。それは、光風町にあるこだまの樹の影響とされていた。しかし、昨日の一件から魔族が魔石を持ち込み、事件を起こしている可能性が一気に高まった。

魔獣化事件に魔族が関わっていることは、確証こそ無かったものの以前から囁かれていたことである。アリスなど、事件が起こり始めた時期に人間界へやって来た魔族フォースを疑い、何度も戦いを挑んでいたそうだ。結局、フォースにうまく誤魔化され、今でも真実はわからないらしいのだが…。

もしもガーティスと名乗った魔族が魔石を持ち込んだとするなら、その目的は飛鳥を捜し出すことなのかもしれない。飛鳥の実家は光風町にあり、今は金緑石に住んでいる。

まるで、魔獣化事件が飛鳥を追って起こっているような気さえしてくるのだ。

そんな不安を感じながら飛鳥は頭を抱えて悩み込む。そのとき、教室にざわめきが起った。飛鳥が顔を上げると、クラスメイトたちがテレビに注目しているようであった。

飛鳥のクラスでは、いつもホームルームまでの間、朝のニュース番組を流している。

SPINELが週一に出演していた番組で、彼女たちが姿を消した今でも、なんとなく付けておくことが多かった。

（SPINELの話題でも取り上げられたのかな？）

レギュラー出演者が行方不明になって二週間。その番組では、SPINELのことなら些細な情報でも流していた。

しかし、どうやらSPINELの話題ではなさそうである。飛鳥がテレビを見ると、金緑石に謎の黒い霧が！の文字が画面一杯に映っていた。

「うげっ！」

飛鳥は奇妙な声を上げる。どうやら、昨日の出来事が誰かに目撃され、テレビ局に情報が伝わってしまったようだ。

「あそこって飛鳥の…、神社前の森だよな」

呆然としている飛鳥を見て、友人の一人は確かめるように呟いた。レポーターは、事件を解説しながら林道を歩く。そして、テレビには魔力の霧によって円状に枯れた樹々が映される。不自然な光景にレポーターの大袈裟な解説が加わり、クラス中が固唾を飲んで見入っていた。

既にホームルームが始まっている時間だったが、地元での不思議な事件に担任教師も注目している。壁越しにざわめきが起きていることから考えると、他のクラスでもニュースを流しているようだ。どんどん林道を進むレポーターは、長い石段を駆け上って、ついに樹神社の境内へと入って行った。

「おはようございま〜す」

レポーターは、マイクを片手に住居の引き戸を開く。

「はあ〜いっ」

かわいらしい声が聞こえ、住居の奥から一人の少女が現れる。その少女を見て、レポーター…いや、中継を見ているすべての人が驚きの声を上げた。

「って、優子ちゃん？」

あまりのことに、レポーターの口が塞がらない。

「あれ、吉田さん？ どうしてここに…」

優子も吉田の登場にびっくりする。

「えっ、吉田さんが来たの？」

会話が聞こえたのか、セリアがひよっこり顔を出す。

「あ、ほんとだ〜。吉田さんおはよう♪」

アリスが駆けつけ、元気に挨拶をした。

吉田は呆然とした。まさかこんなところに姿を隠していたSPINELがいるとは夢にも思わなかったのだ。

「みんな…無事なの？ いったい二週間もどうしてたのよ！」

もはや吉田の頭には、黒い霧のことなど片隅にも残っていない。

「あ…」

優子は、やっと自分たちがまずい状況にあることに気づく。

「いや…、なんて言ったらいいのか〜」

苦笑しながら考えるが、そうそう都合の良い理由が思い浮かぶはずもない。

飛鳥のクラスでは、ざわめきがどんどん大きくなっていった。飛鳥が樹神神社に居候していることは、ほとんどの者が知っている。その樹神神社に、人気アイドルのSPINELが来ているなんて信じられなかったのだ。

クラス中の突き刺さるような視線から逃れるため、飛鳥は苦し紛れに呟く。

「あ…、SPINELの優子とは、光風町に住んでたころの幼馴染みで…」

しかし、事態は飛鳥の予期せぬ方向へと進むことになる。優子の口から、とんでもない言葉が発せられたのだ。

『じつは、ここに住んでいる飛鳥って娘、SPINELの新メンバーなんです〜♪』

そのセリフを聞いた飛鳥は、机に頭を強打する。

（な…、なんですってー！）

もちろん、そんなこと飛鳥にも初耳であった。飛鳥は、恐る恐る頭を上げ、周りを確認する。すべての者が鳩に豆鉄砲な顔で飛鳥を見ていた。

また、テレビ番組も大騒ぎである。いつのまにかテロップもSP INEL復活、新メンバー発表！と変更されていた。

「ああああ〜」

涙を流し、頭を抱える飛鳥…。

（霧の話はどうなったのよ〜〜〜！）

当然、闇の霧の話など、誰も気にすることはなかった。

その後、飛鳥は魔獣に襲われたことも忘れてしまうほど大変な目に遭った。

クラス中から質問攻めに合い、学園長から呼び出されて問い詰められる。だが、飛鳥自身もわけがわからないため、はつきりとしたことは答えられない。学園側からは、学業を疎かにしない限り、芸能活動を制限しないことが伝えられた。

それからは、学園中に注目される羽目になる。学年が違う生徒たちも飛鳥を見ながらひそひそ話をして、放課後までには有ること無いこと噂話が広まっていた。

そして、学園前を占拠する取材陣である。いち早く飛鳥の姿を捉えようと、テレビ・新聞・雑誌など二十社以上も集まっていた。友人の話では、どうやら裏口にも何人が待ち構えているらしい。

飛鳥は、要らぬ騒ぎを避けるため、隣接する中等部の敷地から抜け出すことにした。

なるべく目立たないように小さくなって歩くが、高等部の制服を着ているため生徒たちに注目されてしまう。しかし、それが噂の飛鳥だということは、ほとんどの者が気づかなかった。

「飛鳥せ〜んぱい」

運動着を来た一人の女の子が飛鳥の背中を押す。ぎょつとした飛鳥だったが、それが中等部のときに所属していた陸上部の後輩だとわかり、ほっと胸を撫で下ろした。

「先輩、有名人ですね〜」

にこにこ顔で飛鳥の反応を窺う後輩…。

「はあ…。どうしてこんなことになっちゃったのかな？」

泣きそうな飛鳥を見て、後輩は突然笑い出した。完全に飛鳥の不幸を楽しんでいるようである。

「…って、笑うな！」

飛鳥は、後輩の首に腕を掛け、ぐいぐいと締め上げた。

しばらくおしゃべりを続けていたが、後輩は何かを思いついたらしくあることを提案する。

「そうだな。先輩、クラブにも顔を出してくださいよ。」

そう言って飛鳥の腕を引っぱった。

後輩の誘いに飛鳥は頷く。おそらく神社前にも報道関係者が待ち構えているはずである。飛鳥は、少しでも長く平常を保っておきたかったのだ。

グラウンドまで行くと、飛鳥の姿に気づいた後輩たちが騒ぎ出す。

周りに集まり、次々と祝福の言葉を送る。また、今年入部した新一年生は、噂の飛鳥に会えたことを喜んでいた。

「あれ？　そういえば、かおりちゃんは？」

飛鳥は、後輩の一人がいないことに気づいた。

かおりは、昨年入部した部員の一人である。目立って陸上競技に強いわけではなかったが、とにかく頑張り屋の子で、部長だった飛鳥はそんなかおりを特にかわいがっていた。

（体調を崩して休んでいるのかな）

飛鳥がそんなふうに考えていると、後輩の一人が泣きそうな声で呟いた。

「かおりちゃん、四日前から行方不明なんです…」

飛鳥はその事実には驚愕した。

詳しく聞くと、かおりは四日前の部活後、帰宅途中に行方がわからなくなったそうだった。家に何の連絡も無く、二日後には家族によって警察へ捜索依頼が届けられた。

後輩たちがそのことを知ったのは、昨日、警察が事情を聞きに来

たときである。学園を休んでいたため、みんなでお見舞いに行こうと打ち合わせをしていた矢先のことであった。

かおりが自ら家を出たとは考えにくく、何かの事件に巻き込まれた可能性がとても高い。後輩たちの中には、すすり泣く者も出てきた。

「大丈夫よ…。かおりちゃんはしっかりした子だから…」

かなり動揺した飛鳥だったが、それを表に出さないように後輩たちを慰める。

悪い予感を振り払うように、飛鳥は頭を左右に振った。

第5話 魔獣化事件発生

飛鳥は、しばらく部活を眺めていたが、後輩たちが各種目の練習に取りかかるうとしたころ帰宅することにした。部活顧問に挨拶し、後輩たちに手を振る。しかし、考え事をしているのか、飛鳥の様子はいつもと違っていた。

暗い表情のまま住宅街の外れに向かう飛鳥…。そこから山道を上り神社へと繋がる森の入り口に出ると、予想通り大勢の報道関係者が待ち構えていた。

取材陣に囲まれた飛鳥だったが、無言のまま森へと入って行く。そんな騒ぎも気にならないほど、飛鳥は塞ぎ込んでいた。

何のコメントも取れなかったことに、報道関係者たちは落胆する。だが、どういうわけか、飛鳥の後を追って森へ入ろうとする者は一人もいなかった。

項垂れながら森を進んでいると、一日中飛鳥を見守っていたであろう仔犬姿のアクアマリンが現われた。

アクアは、飛鳥と平行に歩き顔を見上げる。

「元気を出してください…。行方不明といっても、その方が事件に巻き込まれたとは限りません…」

アクアは、少しでも飛鳥の不安を和らげようと、にっこり微笑んだ。

「アクアちゃん…、ありがとう」

飛鳥は、しゃがみ込んでアクアを抱き上げる。そして、ぎゅゅと抱きしめ頬擦りをした。犬扱いされることを嫌がるアクアだったが、このときばかりは静かに飛鳥の愛撫を受けていた。

「さて…。帰りましょうか」

元気を取り戻した飛鳥は、アクアを抱っこしたまま歩き出した。頭を撫でられてくすぐったそうにしていたアクアは、何かを感じたのかゆっくりと瞳を開く。マリンプルーだった瞳の色は、ルビー

のような赤色とエメラルドのような緑色のオッドアイになっていた。

家に戻った飛鳥は、優子に文句の一つでも言ってやろうと思い居間に飛び込む。

「優子……って、あれ？」

そこに優子の姿は無く、セリアが小説を読みながら寛いでいるだけであった。

「優子とアリスなら、一度光風町に戻ったよ」

二人は、光風町に巨大な狼型魔獣が現われとの情報が入ったため、調査に向かったらしい。

魔石や魔獣の活動する時間帯は夕方から明け方にかけてであるが、今回の事件では昼過ぎの十四時ごろ、三歳ほどの女の子が大勢の前で魔獣になったそうだ。

明らかに今までの魔獣出現パターンと異なり、アリスたちも急いで調査に向かったのだ。

「優子がおめんって謝っていたよ。かわりに、神社の周辺は取材禁止地区にしておいたって」

セリアは、微笑みながら優子の言葉を伝えた。

「そんなこと……できるの？」

飛鳥は、驚きのあまり目を丸くする。だが、そのことで飛鳥の後を追って来なかった取材陣の行動に説明がつく。

これは、プライベートの取材を嫌う優子が言い出したことである。光風町をSPINEEL取材禁止地区に指定し、決まりごとを破つて優子たちを映そうものなら、その放送局・新聞社・雑誌社などに対して、以降の仕事を一切請けないと宣言しているのだ。おそらく、今回も同じことをしたのだろう。

かなりめちゃくちゃな条件に思えるが、それが守られているのはSPINEELの人気によるものである。

「で……セリア……さんは行かなかったの？」

飛鳥は、座布団に腰を下ろす。

「わたしは、あなたの護衛」 『得体の知れない光竜に任せておけない…』 あ、これはアリスのセリフね」

セリアは、むっとしているアクアを見て微笑む。

確かにその通りなのだが、ずばり言われると腹が立つ。もちろん、セリア自身が言っているわけでは無いので怒ることもできない。アクアは、しかたなく不貞寝を決め込んだ。

そんなアクアを見て苦笑する飛鳥だったが、セリアがじっと見つめていることに気づき思わずどぎまぎする。

「えっ…、なに？」

すると、セリアはため息をつき、ゆっくりと喋り始めた。

「飛鳥って、シヨウと知り合いなんだよね…。これはお願いなんだけど、アリスと優子の前では、あまりシヨウの話をしないでくれなかな？」

「それって、どういう…」

理解できない飛鳥に、セリアは信じられない事実を語り始めた。

今から二十五年ほど前のこと…、魔王軍が精霊界へ総攻撃を仕掛けて来た。

各聖界で激しい戦いが繰り広げられたが、精霊神ファロルの封印により、精霊界は魔王が支配する暗黒時代に突入した。

それから十四年後…。当時五歳だったシヨウとアリスは、アウインの勇者として魔王軍を次々と倒し、約六年がかりで精霊界を平和へと導く。

しばらくは平穏な時が続いたが、戦い集結の二年後…今から四年前、精霊界に新たな魔王が現れた。それが、ザーヴァという名の大魔王である。

シヨウとアリスは再び戦いへと赴くが、ザーヴァの力は強大で完全な敗北を経験する。アウインの勇者を倒したザーヴァは、もう一つの目的である人間界侵略を開始した。

ザーヴァは、古代に太平洋へ沈んだラル大陸を浮上させ、そこに

魔王城を築き上げる。それから始まる惨劇は、対象となった人間族の方が詳しいはずだ。

大魔王に対抗すべく、精霊界では新たな精霊神を誕生させることになる。先代の精霊神ファロルの娘で、アリスの親代わりでもあるファリスが精霊神に選ばれた。

精霊神には五人の守護騎士が存在する。五精霊と呼ばれる守護騎士たちは、それぞれ光・風・地・火・水の精霊力を象徴する存在であり、精霊界では精霊神と同じく神とされていた。

五精霊には、精霊界最強のシヨウとアリスも選ばれる。そして、再びザーヴァに挑むべく、他の五精霊と共に人間界へやって来た。

人知を超えた戦いは数日間にも及ぶ。シヨウたちは五精霊化したことでノーマル状態の数十倍は強くなっているはずだったが、ザーヴァの底知れぬ魔力に対抗することができず瀕死状態となる。

五精霊の敗北は、全ての聖界がザーヴァによって支配されてしまうことを意味していた。意を決したシヨウは、アリスや仲間を…そして全聖界を護るため、禁呪とされる自己犠牲精霊術バルムを発動させる。

シヨウは、五精霊の源である五つの精霊水晶を使い、精霊力を最大に高めてザーヴァに突っ込んだ。

強すぎる力同士の干渉は、お互いを中和することはない。反発し暴走を始めた力は、全てを飲み込む闇を生み出す。シヨウは、ザーヴァを道連れに、この世から消滅してしまった…。

「アリスも今でこそ落ち着いてきたけど、一時は生きる気力を無くして死にかけたこともあったの」

セリアは一気に語り、大きく息をついた。

「そんな…、シヨウくんが死…」

飛鳥は、そこまで言っただけ口を押さえる。口にしてしまえば、そのことを認めてしまう気がしたのだ。

シヨウは、優子にとって兄以上の…、アリスにとって半身とも言

える存在である。知らなかったとはいえ二人にシヨウの話題を振ってしまったことに、飛鳥は激しく後悔した。

「…って、わたしもてつきり死んだと思ってたんだけど…」

セリアは、暗い表情を一変させて笑いだす。

「二週間前のイベントでシヨウの気配を感じたから、たぶん生きてるのよ…」

その言葉を聞いて、飛鳥はお膳に頭をぶつけた。

「な、なんなのよそれ…」

飛鳥は、まるで全身の力が抜けたようにうつ伏せとなる。先程までの真面目な話は、いったい何だったのだろうか。

そんな二人のやりとりを、アクアは呆れながら聞いていた。しかし、何かを感じたのか、身体を起こして障子に顔を向ける。その瞳は、右目が赤色、左目が緑色のオッドアイになっていた。

「何か来たようね…」

セリアもそれに気づき、置いてある剣に手を伸ばす。障子を開けて外を窺うと、庭でうずくまる影があった。

セリアが剣を片手に警戒しながら確認する。それは白鳳学園の制服を着た自分たちより一、二歳ほど年下の少女であった。

「かおりちゃん！」

少女を見た飛鳥は、セリアの制止も聞かず庭に飛び出した。

「かおりちゃん、しっかり！」

飛鳥は、倒れている少女を抱き起こす。その少女は、四日前から行方不明となっていた後輩のかおりであった。

かおりは、飛鳥の問いかけにも反応せずぐったりとしている。意識が朦朧としているのか、瞳の焦点は定まっていない。

「飛鳥さん、離れてください！」

アクアが大きく叫ぶ。庭に飛び出し、巨大な光竜の姿となって戦闘態勢を取った。

すると、かおりの身体が激しく脈動しはじめる。そして、左肩の辺りから黒い粒子が勢いよく噴き出した。

「魔獣化！」

セリアは、呆然としている飛鳥をかおりから引き離す。

その間にも、かおりの変化は続いていた。黒い粒子は、それぞれが集まって団子状となり、かおりの身体に次々とへばり付く。身体を飲み込み大きく膨れあがった黒い塊は人型を形成し、昨日現れた巨大な猿の獣人となった。

「かおり…ちゃん…」

仲のよかった後輩が目の前で魔獣化したことに飛鳥は驚愕した。魔獣化したかおりは、真っ赤な瞳で飛鳥だけを睨みつけていた。

第6話 魔獣リウム

飛鳥に狙いを定めた魔獣は、素早い動きで襲いかかろうとする。その瞬間、セリアは長剣を魔獣の右腕へ突き立て、顔面に爆熱の精霊術を放った。

魔獣は、顔を押さえながらセリアを振り落とす。そこに、光竜アクアマリンが飛びかかった。

アクアは、クリソベリルの爪で鱗に覆われた魔獣の胸を引き裂く。魔獣は、悲鳴のような叫び声を上げ後退った。

「かおりちゃん！」

飛鳥は、躊躇いなく攻撃をするセリアたちに驚く。だが、それにはちゃんとした理由があった。魔獣の傷口からは、血液でなく黒い霧状の粒子が噴き出していたのだ。

「あれって……」

それは、魔石から噴き出したものと同じ…、昨日の黒い霧と同じ魔力の粒子であった。

傷口から粒子の噴き出しが治まると、左肩に憑く魔石から同じような粒子が流れ出す。それが傷口を覆い始めると、傷は初めから無かったかのように回復してしまった。

「魔石に憑かれた人間は、魔力の粒子に覆われて眠っている。だから、本体を傷つけない限り、大丈夫なのよ」

セリアは、再び魔獣へ突っ込んでいった。

「魔獣化した人間を元に戻すには、こうやって魔石の魔力残量を減らすしかありません」

飛鳥の横に降り立ったアクアが、魔獣の特性を説明する。

魔獣の中に埋まっている本体を傷つけず攻撃を繰り返し、回復させることで魔力を消費させる。これが、魔獣化した人間を元に戻す、唯一の方法であった。

もちろん、魔石憑きの命を無視すれば一瞬で方が付くだろう。し

かし、そういうわけにもいかない。持久戦を覚悟しても、相手が倒れるのを待つしかないのだ。

一方、光風町に戻ったアリスと優子は、魔獣出現の報告があった小さな公園に来ていた。

数名の警官や研究員が現場を検証しているが野次馬などは一切見当たらない。皆、魔獣に襲われることを恐れて、家に閉じこもっているのだ。

魔獣化事件に関しては報道規制がされており、単独での取材は禁じられている。そのためマスコミ関係者の姿もまったく見られない。アリスたちもニュース番組のレギュラー出演者だが、いまは魔石憑きを保護する立場であった。

彼女たちが魔獣化事件に関わっているのは、なにも異世界の住人だからという理由だけではない。魔獣に対抗できるのは、今の人間界でアリスたちだけなのだ。

魔獣の身体は、強力な魔力によって覆われている。たとえ重火器を乱射したとしても、魔力の防御壁に阻まれ、致命傷を与えることは難しい。

力の強い魔獣ほど防御壁は強固なものとなり、人間族にはかすり傷すらつけることも出来なかった。

これは魔獣だけに限ったことではなく、魔物や魔族、アリスたちにも同じことがいえた。人間界の通常攻撃は一切通用しないのだ。

そういった相手にどのように戦うかというと、アリスたちは武器に己の精霊力を付加させて魔力の防御壁ごと斬り裂いていた。

つまり、異世界の住人たちの戦いとは力同士のぶつけ合いであり、魔獣に対抗できるのは相反する精霊力を操るアリスたちか魔獣以上の魔力を持つ者でしかありえないのだ。

「アリスさん、優子さん。ご苦労さまです」

異世界を研究するための施設ベリル研究所の研究員が声をかけ、一通りの調査内容を伝えた。

「えっ、魔族らしき人影が目撃されているんですか？」

アリスは、その報告に驚きの声を上げる。

「もしかしてあのガー…、名前なんだっけ？」

顔はすぐに浮かぶが、名前を思い出せない。アリスは苦笑しながら優子に問いかけた。

「確か、かゝたす…じゃなかった？」

優子も思い出せないのか、大汗をかきながら頭を捻った。

二人とも魔族の名前を直接聞いたわけではなく、それほど気にしていなかったのだ。ちなみに魔族の名はガーティスである。

「その人影がかゝたすだったとすれば…。今回の魔獣化は、本当に特殊かもしれないね」

アリスが両腕を組んで考え込む。くどいようだが、魔族の名はガーティスである。

「とにかく、わたしたちは町内の警戒にあたります。みなさんは危険ですので避難してください」

優子は、現場検証をしている警官たちに指示を出した。

優子の指示に警官たちも素直に頷く。魔獣の恐ろしさを十分承知し、彼女たちでしか魔獣に対抗できないこと理解しているのだ。

警官や研究員たちは、次々とその場を去って行く。そして、小さな公園にはアリスと優子だけが残された。

「さてと…、魔獣を捜しに行きますか？」

アリスが優子を促す。優子は軽く頷き、にっこり微笑んで歩き始めた。

何も無い空間に、そんな二人の様子が映し出されている。その映像を見つめているのは、魔族かゝたす…いや、ガーティスであった。ここは魔力の霧から繋がる空間で、アリスたちのいる人間界とは別次元になる。一部の高位魔族ともなれば、このように闇から闇へと渡る能力があるのだ。

「くくくつ、まさかあの妖精族が勇者アリスだったとは…」

ガーティスは、にやにやしながらアリスの左手の甲を見つめる。そこには、鳥が翼を広げたような紋様が浮かび上がっていた。

それはアウインの紋章と呼ばれるもので、アリスは生まれつきにその紋章を持っている。紋章を持つシヨウとアリスはアウインの勇者と呼ばれ、その驚異的な強さは魔界中に知れ渡っていた。

「面白い…。伝説の勇者を相手に、この子がどこまで通用するか…」
ガーティスが横を向くと、真っ赤な瞳と額に同じ色の魔石を持つ、漆黒の毛並みをした巨大な魔獣がいた。

狼のような魔獣は、凶暴そうな顔立ちで、映し出されたアリスを見て低い唸り声を上げる。

「まあ待ちなさい…。あなたの出番はもう少し先ですよ」

ガーティスが魔獣の頭を撫でようとすると、途端に殺気が向けられる。ガーティスは、苦笑しながら慌てて手を引つ込めた。

「ど、どうやら飛鳥さんの方は失敗したようですし…、あなたには早く成長してもらわないといけません」

魔獣の殺気を感じながら別の空間に意識を集中すると、金緑石での様子が映し出された。

魔力が底を突いたのか、魔獣の身体は形状を保てなくなって崩れ落ちる。魔力の粒子が散らばり黒い霧が治まると、そこには白鳳学園の制服を着た少女が倒れていた。飛鳥とセリア、そして光竜の姿をしたアクアマリンが少女の下に駆け寄る。

「やはり、あの程度の魔獣では無理なようですね…」

ガーティスは腕を組んで考え込む。そして、唸りながらアリスを睨む狼型の魔獣に目を向け、不気味に微笑んだ。

「しかし、それもここまです。この魔獣…そう、第二形態の魔獣リウムさんが必ずや樹神飛鳥さんを捉えてくれることでしょう」

そう言つて、ガーティスは不意をつき、魔獣リウムの頭を撫でようと手を伸ばした。

さくっ ♪

リウムは、何の躊躇いもなく、ガーティスの手に鋭い牙を衝き立

てる。

「ぬおおー！」

ガーティスは、驚きと激痛に悲鳴を上げる。するとリウムは、ガーティスの手を咥えたまま、思いつきり上下左右に振り回した。

「ちよっ！ リウムさん！」

必死に叫ぶガーティスだが、リウムは止めようとしない。

何を思ったのか、リウムはガーティスの身体を振り上げて一気に足元へ叩き付け始める。何度も何度も叩き付けるうちに、ガーティスはぐったりと動かなくなった…。

魔獣リウムは、咥えていた手を放して、ガーティスの頭から胸の辺りまで口に入れる。そして、食べ物を噛むように、はむはむと…。それに反応したガーティスは、足をじたばたさせる。暴れながらリウムの口に手を引っかけ、強引に身体を引き抜いた。

「や、やめんかー！」

リウムの唾液でべとべとになったガーティスが大声で叫ぶ。リウムはというと、まるで玩具を取り上げられた子どものようにふて腐れる。ガーティスが睨み付けると、それを無視するようにそっぽを向いた。

「こ、こいつ…」

ガーティスは怒りに身体を震わせた。

どうやらリウムは、ガーティスの言う成りに動いていた他の魔獣とかなり違うようであった。

第7話 勇者の気配

飛鳥の部屋に一人の少女が寝かされていた。その少女とは魔獣化していたかおりである。

魔獣となったかおりは、セリアとアクアに倒されそのまま気を失ってしまう。だが、魔石の魔力を消費させて魔獣化を解除したため、身体に外傷はなく意識が戻らないだけであった。

かおりを囲むように飛鳥とセリアが座っている。さらに、見慣れぬ中年の男女がかおりを心配そうに見つめていた。それは、飛鳥の連絡を受けて駆けつけたかおりの両親であった。

「かおり！」

ゆっくりと目覚めたかおりを母親が抱きしめる。涙を流して娘の無事を喜ぶ母親だったが、当のかおりはきよんとしていた。

「お母さん…ここって…。あれ、飛鳥せんぱい…に、SPINELのセリア！」

いきなりのこととでパニックとなるかおり。どうやら、魔獣化していたときの記憶はまったく無いようだ。

「かおりちゃん、身体…なんともない？」

飛鳥は、上半身を起こしたかおりに注目する。かおりの身体に異常は無く、先ほどまで巨大な魔獣だったとはとても信じられなかった。

意味がわからず首を傾げるかおり。

「わたし…学校の帰りに…」

徐々に記憶がはつきりとしてきたのか、かおりの顔はだんだんと青ざめてきた。

部活を終えたかおりは、薄暗くなってきた帰路を早足で急いでいた。

しばらくすると、身体に何かが纏わり付くを感じる。何処にも異変は無く気のせいかと思われたが、かおりが再び歩き始めると左

肩に激痛が走った。

目の前が真っ暗となり、かおりの記憶はそこで途絶えていた。かおりがそつと左肩に手を添えると、服の上からでもはつきりと違和感が感じられる。非常に硬い何かが左肩に憑いているようなのだ。

「えっ…、なに？」

かおりは服の隙間から左肩を覗く。そこには、鈍く光を放つ宝石のような黒い石がへばり憑いていた。

愕然とするかおりを前に、それまで黙っていたセリアがゆっくりと喋り始める。

「かおりちゃん、落ち着いて聞いて…。あなたに憑いているのは魔石と呼ばれるモノ」

両肩を抱くようにして震えるかおりに、セリアはありのままの真実を語った。

「あなたは、魔獣化していたの…」

こうなってしまった以上、もはや隠しておくことはできないのだ。がたがた震えるかおりを母親がぎゅっと抱きしめる。かおりは涙を流し、ただ茫然としていた。

報道規制がされていたとしても、魔獣化事件に関しての基本的な知識はかおりも持っている。魔石に憑かれた人間が異形の獣へと変化することや、その魔石がどんな方法でも取り除くことができないことも…。

「い…いやっ、嫌あーーーーー！」

錯乱状態となり暴れるかおりを母親が必死に押さえ込む。透かさずセリアが眠りの精霊術を唱えると、かおりは即座に眠りに落ちた…。

ショックに泣き崩れる母親を、父親がそつと抱き寄せる。かおりは、この先一生、己の魔獣化に脅えながら暮らしていかなければならないのだ。

かおりの付き添いは両親に任せ、飛鳥たちは別の部屋に来ていた。
「ねえ、魔石つて一度憑かれたら本当に取れないの？」

飛鳥が率直な疑問を口にする。

その質問に、セリアはゆっくりと頷いた。

「魔石は魔力の強い者に反応して活動を始めるの。魔石から伸びた魔力の触手は、憑かれた生体の神経と融合する。それを切り取るものなら、たちまちショックで死んでしまうわ……」

セリアは簡潔に内容を説明した。

否定的な見解に飛鳥は項垂れる。しかし、魔石を取り去ることがそれほど難しいことなのかとも思えるのだった。

セリアの説明は間違いではない。が……飛鳥には語れない恐ろしい事実もあった。

それは魔獣化事件が発生してしばらくした頃のことである。ベリル研究所では、野犬に憑いた魔石を、外科手術によって切り取る実験が行われていた。

魔石に憑かれるのは、なにも人間だけとは限らない。光風町で保護した魔石憑きの中には、何匹もの動物が混ざっていたのだ。

全身麻酔によって眠る野犬から魔石の切除が始まる。魔力の触手は一般の人間族に見えないため、手術にはアリスとセリアも立ち会っていた。

周辺を注意深く切り裂き、魔力の触手を確かめる。目には見えな
いが、細い十数本の触手が身体に向かって伸びているようである。

ゆっくりと魔石を引き離そうとするがまるで動かない。だが、研究員が触手にメスを入れたとき、その異変は始まった。

麻酔の効いているはずの野犬が突然暴れた。いや……そうではない。野犬の身体が、内部から蠢き始めていたのだ。

次の瞬間、真っ赤な血を吹き出しながら、幾つもの触手が野犬の身体を突き破る。

それから、まるで残虐映画のようであった。血によって真っ赤に浮かび上がった触手は、野犬の身体を貪るように、そう……喰らい

始めた。

野犬が肉塊になるのにそれほど時間はかからなかった。そして、真っ赤に染まった手術台には一つの魔石が転がっていた…。

触手を切ろうとするとこのような現象が起こってしまう。セリアは、そういった内容を飛鳥に隠していた。また、それは優子も知らないことである。

「何にしても、今の医療技術ではどうすることもできないの…」

セリアが俯きながら答える。魔石に憑かれたら、まさに手の施しようがないのだ。

「魔力の触手か…」

極秘事項の一部を聞き、飛鳥は考え込んでしまう。

「じゃあ、魔族ならなんとかできるんじゃない？」

飛鳥の表情がぱっと明るくなる。

「あなたたちの学校にいるフォースくんって、魔族なんですよ」

それしか方法はないと言わんばかりに、飛鳥は手を打った。

「うーん、どうかな…。彼ってベリル研究所で暮らしているから、方法があるならとくに実行してると思うけど…」

セリアには、そんな単純な問題だとは思えなかった。

しかし、飛鳥は真剣な表情でセリアを見つめる。

「セリア…さん、お願い…。わたしをフォースくんに会わせて」

無駄かもしれないが、ほんの少しでも可能性があるのならそれに賭けてみたい。飛鳥は、かおりの悲しむ姿をこれ以上見たくはなかった。

白鳳学園高等部のグラウンドに、一つの人影があった。

月明かりに照らされたその姿は、この世のものとは思えないほど神秘的で美しい。長身長髪で整った顔立ち…、その女性は魔界特有の衣を纏っていた。

どこことなく優子に似ていたが、彼女の方が大人びた魅力を持っている。

そのとき、瞳を閉じる女性の前に、仔犬の姿をした光竜アクアマリンが現われた。

「お待たせいたしました♪」

アクアはお座りをして、しっぽをばさばさと振る。

女性は、ゆっくりと瞳を開き、アクアを見つめた。

「どうやら、動きがあつたようだな…」

その声は、やはり美しいものであつたが、少しだけ低く聞こえる。彼女…いや、彼の名前はシヨウ…。アウインの勇者にして精霊神ファリスの五精霊、大魔王ザーヴァを倒すため禁呪とされるバルムを唱え消滅したはずの勇者シヨウであつた。

「はい。昨日、魔獣および魔族と接触がありました。そして、先ほど同じ魔獣と戦闘があり、魔獣化の解除に成功いたしました♪」
アクアは得意げに報告する。

「そうか…」

シヨウは、美人な顔で考え込む。飛鳥が狙われるのを予期して、光竜アクアマリンを護衛に付けたのは彼である。

「で、アリスに正体がばれて、飛鳥にも見つかった…わけか」
確認のために呟いたシヨウだったが、それを聞いたアクアの顔色は一変する。シヨウの指示は、影ながら飛鳥を護ることだったのだ。

「あ、あの…、それは…」

大汗をかきながらアクアは項垂れた。

そんなアクアを見て、シヨウは優しく微笑む。

「ふふつ、別にいいよ。それに、飛鳥に直接付いていた方が、護衛しやすいしな♪」

その言葉に安心したのか、アクアは激しくしっぽを振った。

「じゃあ、引き続き飛鳥の護衛を頼めるか？」

シヨウは微笑みながら問いかけた。

「はい、もちろんです♪」

大きな声で返事をする。アクアにとって、憧れの勇者にお願いされることは、とても誇らしいことなのだ。

第8話 ベリル異世界研究所

異世界を研究するために創設された異世界対策機関は、外界からの様々な脅威を事前に防ぐための国際組織である。

主たる目的は侵略行為の監視であつたが、異種族の人間界入国や人間族の異世界出国管理なども行なっている。また、未知なる病原体の研究や有効な治療法の考案もされており、人間界と異世界とを繋ぐ上で重要な役割を果たしていた。

そして、国内で五つある対策施設の一つベリル（緑柱石）研究所には、光風町に最も近かつたともあり、魔獣化の研究チームが置かれていた。

人里離れた山奥にある研究所へは自動車で向かうしかない。飛鳥たちは、セリアによって呼び出されたSPINEELのマネージャー小田のワゴン車で、ベリル研究所へと向かつていた。

「小田さん、いつもごめんなさい…」

セリアは運転中の小田に謝る。すると小田は、気にするなと言わんばかりに、軽く手をふつて合図した。

小田は遠くから呼び出されたにも関わらず文句の一つも言わない優しい人物である。それだけに、セリアは心苦しい思いで車に乗り込んでいた。

セリア一人だけなら空を飛んで行くこともできたのだが、飛鳥やかおり、かおりの母親が一緒であるためそうはいかない。SPINEELの活動が停止している今でもわがままを聞いてくれる小田に、セリアは感謝の気持ちでいっぱいだった。

「かおりちゃん、お菓子食べる？」

飛鳥は、落ち込んでいるかおりにスナック菓子を差し出した。かおりは小さく首を振り遠慮する。

「ほら、元気出す。お母さんも心配してるでしょ」

飛鳥は最後部の座席に移動して、抱いていた仔犬姿のアクアマリ

ンをかおりの膝に乗せた。

かおりは何事もなかったかのように接してくる飛鳥を不思議に思えた。

「せんばい…恐くないんですか？ わたしは魔石憑きで、いつ魔獣化してもおかしくないんですよ…」

蚊の鳴くような声で呟るかおり…。

「魔獣になったら、せんばいたちを殺しちゃうかもしれないんですよ！」

俯きながら、今度は感情を剥き出しに大きく叫んだ。

魔獣化を起こすと、魔石に全てが支配されるため、かおりは意識を失ってしまう。かおりは、知らないうちに大好きな人たちを傷つけてしまうのを恐れていた。

泣きそうなかおりを見て、飛鳥は優しく微笑みながら魔石の憑いている左肩に手を添える。

「大丈夫だよ。かおりちゃんが魔獣になっても、わたしが元に戻してあげる。今日研究所に行くのも魔石を調べるためなんだから…、かおりちゃんは何も心配しなくてもいいのよ」お」

飛鳥はかおりを抱えて、頭に拳を押し付けた。

今までとまったく変わらない飛鳥の態度に、かおりには少しずつ笑みが戻ってきた。

「ほら、かおりちゃんをいじめないの」

助手席に座っていたセリアが、振り返りながら注意する。しかし、内心では飛鳥の対応に安堵していた。

魔石は、憑かれた者の魔力や大気中に存在する魔力を蓄えることで魔獣化を起こす。そして、もう一つ大きな要素と考えられているのが、悲しみや怒り、憎しみといった負の感情であった。

本人はもちろんのこと、魔石憑きを忌み嫌う他人の感情によって再魔獣化が速まると報告されている。誰が魔石憑きなのか極秘とされているのは、プライバシーの問題もあるが、そういった意味合いも強いのだ。

魔獣に襲われたにも関わらず平然と接している飛鳥は、かなり危機感が麻痺しているようである。いや…、単に天然なだけかもしれない。いずれにしても、ショックを受けているかおりにとって、飛鳥のような存在はとても効果的だった。

飛鳥たちを乗せたワゴン車は広大な敷地に入る。奇妙な形の建物が並ぶこの場所こそ、魔獣化研究チームが置かれているベリル異世界研究所であった。

セリアを先頭に中央の建物に入る飛鳥たち。すると、ロビー奥の受付に知っている姿を発見した。

「優子に…アリス！」

飛鳥が叫ぶと、二人は驚きながら駆け寄ってきた。

「あなたたち、どうしてここに？」

アリスは、飛鳥たちに視線を走らせる。

「まさか…、わたしを追って来た…とか？」

優子は、大汗をかきながら飛鳥との距離を取った。

「って…、なに脅えてるのよ…」

飛鳥は、意味がわからず小首を傾げる。しかし、その理由はすぐに判明した。

「飛鳥せんぱい…。あれ…」

かおりの指はロビーにある大画面テレビに向けられている。そこにはSPINEE新メンバーのテロップと帰宅途中の飛鳥が大きく映されていた。

飛鳥は頭を抱えながらしゃがみ込む。

（そ、その問題が残ってた…）

かおりの一件ですっかり忘れていたが、飛鳥は全国放送でSPINEEの新メンバーとして発表されてしまったのだ。

まずい空気を感じたのか、優子はこそごと逃げようとする…。

「優子……！」

飛鳥は片手を振り上げて追いかけようとしたが、何かにジッと見

られているような視線を感じて振り返った。

そこには、二人のやりとりを見てにやにや笑う一人の青年が立っていた。

「くくくつ……。SPINEは新しいメンバーを入れて、お笑いにでも進出する気か？」

整った顔立ちの男性だが、口調から軽そうな印象を受ける。彼こそ数ヶ月前に魔界からやって来た転入生フォースであった。

「フォース……。何の用？」

アリスが明らかに嫌な顔をする。

アリスは、フォースを魔獣化事件の首謀者と疑い、何度も闘いを挑んだことがあった。そのたびにはぐらかされ、勝敗はいまだついていなかった。

また、フォースとの因縁はそれだけではない。魔王討伐三周年記念イベントが執り行われたとき、フォースは特殊な魔石に憑かれてアリスたちを殺そうと襲いかかってきたのだ。

戦いの最中、意識を取り戻したフォースは、身体から何かを追いつ出すことに成功する。フォースから飛び出たのは、額に真つ赤な魔石が憑いている、完全に人型をした魔獣であった。

その姿は通常の魔族と何ら変わりなく、もはや魔獣という呼び名は相応しくないかもしれない。アリスたちの戦う相手は、フォースからその人型をした魔獣に代わった。

魔獣の力は凄まじく、アリスが三年前に戦った大魔王ザーヴァをも上回るほどである。今まで戦ってきた魔獣とは桁違いな強さに、アリスたちはなす術がなかった。

戦いに敗れたとき、アリスの身体に変化が訪れた。倒れたアリスを中心に、光と風の精霊力が巻き起こる。それが収まると、アリスに代わって純白の翼を持った天空族クリスタルが立っていた。

クリスタルは、両手にアウインの紋章を持つ伝説の大勇者であり、シヨウとアリスの融合体でもある。そのことは大魔王ザーヴァと共に消滅したはずのシヨウが生きている証拠でもあった。

一瞬にして人型の魔獣を倒してしまうクリスタル…。戦いが終わりセリアと優子が駆け寄ると、そこにクリスタルの姿はなくアリスが気を失って倒れているだけであった。

アリスたちにボコられたフォースは、治療のため学校を休んでいた。しかし、瀕死の重傷であったにもかかわらずこれほど短期間で回復してしまうなど、さすがは魔族といったところである。

そんな事件もあってフォースへの疑いは晴れたはずなのだが、長年魔族と戦ってきたアリスが彼を毛嫌いするのも無理はないことであつた。

「おいおい、つれないセリフだな」

フォースは何気なくアリスに近づき、自然な動作で肩を抱く。

「オレはこんなにもキミを愛しているのに」

大袈裟な動きで語ってみせるが、セリフは妙に棒読みである。

透かさずアリスが拳をフォースの顔面に叩き込む。フォースはにやけた顔のまま、後方へと吹っ飛んだ。

啞然としたのはかおりである。男嫌いで有名なアリスが、フォースとは普通に接しているのだ。逆に、以前から知り合いだった飛鳥にしてみれば、テレビに映っていた大人しく神秘的な雰囲気を持つアリスの方が奇妙に思えたのも事実であつたが…。

「あの、フォース…くん。突然ですが、今日はあなたにお聞きしたいことがあって…」

飛鳥は、床で痙攣しているフォースに、思いきつて声をかけてみた。

フォースは起き上がり、顔を摩りながら飛鳥に近づく。

「あんたが樹神飛鳥…。現代に転生した、人間神候補の…」
囁くようにそう呟いた。

飛鳥は、突然のことで意味がわからず、ただ茫然としていた。

第9話 魔獣化の治療法

「え…。いま…なんて？」

飛鳥は、自分の耳が信じられず、フォースに聞き返す。どうやらアリスたちには聞こえなかったようである。

「いや…、なにも…」

フォースは、惚けるようにそっぽを向く。

すると、飛鳥に抱かれていたアクアマリンが、感心したように呟いた。

「なるほど…。だから飛鳥さんの護衛を…」

フォースの言葉が真実なら、アクアが護衛につかされたことや彼女が魔族に狙われている理由も、全てにおいて納得できる。

「おい、犬っころ…。余計なことを喋るんじゃないぞ…」

フォースは、アクアの頭を鷲掴みにし、その手に力を込めてキリキリと締め上げた。

途端にアクアの瞳がオッドアイに変化する。

「魔族が…、馴れ馴れしくするな…」

アクアは、低い唸り声を上げながら、体毛を逆立てた。

「それにボクは犬じゃない…」

精霊界の聖獣である光竜アクアマリンは、どうやら魔族に対して良い感情を持ち合わせていないようだ。

似合わない言葉に、アクアを抱いていた飛鳥が驚いた。それはかおりや母親も同じである。ただの仔犬が、まさか人の言葉を喋るなんて思わなかったのだ。

「はいはい、ケンカなら後にしましょうね…」

一触即発な雰囲気、セリアが割って入る。このまま戦いが始まるものなら、このベリル研究所は瓦礫と化すだろう。それほどアクアとフォースの力は桁違いなのだ。

「それより、フォースくん…。魔石って、一度憑かれたら取れない

もののなの？」

セリアは呆然としている飛鳥に代わって質問した。

「なにをいまさら……」

フォースは呆れたようにため息をつくが、母親に支えられているかおりに何かを感じてその理由に納得する。

「そうか……。あんた、魔石に憑かれたな……」

一瞬ではあるが、フォースは複雑そうな表情を見せた。

アリスと優子は、その事実には驚愕する。魔族のフォースだからこそ活動していない魔石に気づいたが、二人には気配すら感じられなかったのだ。

フォースは、しばらく考え込んでいたが不意に受付と話を始める。「なんにしても、一度治療してもらってこい。話はそれからだな……」振り返ったフォースは、笑顔でかおりの頭を軽く叩いた。

母親に付き添われたかおりが別室で治療を受けている間、飛鳥たちは無言でロビーのソファに腰をかけていた。

治療自体は十分ほどで終わるようだが、手続き等で既に一時間は過ぎていた。

「ねえ……。かおりちゃんって、魔獣だった子なの？」

優子が遠慮気味に問いかける。

「そっか、まだ話してなかったよね……」

飛鳥は、かおりとの関係や優子たちが光風町に戻ってからの出来事を話した。

アリスと優子が黙って耳を傾ける。飛鳥の話が終ると、今度はアリスが光風町での話を始めた。

魔獣出現の連絡を受けて光風町に向かったが、結局その魔獣に遭遇することは無かった。しかし、魔族のような人影が目撃されたことや今までと違う出現パターンに、これが普通の魔獣化事件でないことは明らかである。今日、アリスたちがベリル研究所に来たのも、調査内容を再確認するためなのだ。

「魔族のような人影かあ……」

飛鳥は魔族ガーティスを思い出して身震いした。

ガーティスの狙いは間違いなく飛鳥であり、魔獣化したかおりが襲つて来たのも同じ理由からだと思われる。言つてしまえば、かおりは飛鳥の所為で魔石に憑かれてしまったようなものだ。

「人間神……」

飛鳥が独り言のように呟く。

「え……なに？」

飛鳥の声は限りなく小さく、優子には聞き取れなかった。

慌てて何でもないとを身体の動きで示す飛鳥……。フォースの言葉が何を意味していたのかわからないが、悩みの種が増えたことに違いはなかった。

そのとき、治療を終えたかおりが母親に連れられてやってくる。

魔石に憑かれる者は魔力属性であるため、精霊力を照射される治療法は苦痛を伴う。かおりも、かなり顔色が優れなかった。

「かおりちゃん！」

飛鳥は、慌ててかおりに駆け寄る。弱々しいが、笑顔を返すかおりに飛鳥はほっとした。

そこにフォースがやって来て、かおりの状態を説明する。

「心配することは無い。魔石に溜まっていた魔力を中和したから、しばらく気分が悪いだけだ」

フォースは、ソファアに座って背もたれに両手をかけ、ふてぶてしい態度で足を組んだ。

「けっ、なにを偉そうに……」

むすっとした顔でアリスが呟くと、その隣でアクアマリンが相鎚を打つ。この二人の魔族嫌いは、相当のものである。

フォースは体勢を直し、大汗をかきながら咳払いをする。

「さて、魔石の話だったな……」

フォースはゆっくり周りを見回す。

「オレが知っているのも、あんたらと同じ……。憑いた魔石が取れる

なら、このお嬢ちゃんにも試されているさ……」

瞳を瞑って大きなため息をついた。

予想通りの返答に飛鳥は愕然とした。かおりを見ると、震えながら涙を浮かべている。

（こんなことなら、魔石のことなんか尋ねなければよかった……）

飛鳥は、己の浅はかな考えに激しく後悔した。

「ただし、一つだけ可能性があるかもしれない……」

驚くアリスたちを見て、フォースはにやりと微笑む。

「魔石の魔力をコントロールしながら、強力な精霊力で触手を消滅させる……。つまり、魔力と精霊力を同時に操ることができれば、あるいは魔石を消去できるかもしれないんだ！」

フォースは立ち上がり、拳を握り締めた。

「ほ、本当ですか！ かおりちゃん、やったやったよ……」

飛鳥は、かおりの手を取って飛び跳ねる。かおりも信じられないといった顔をしていた。

すると、アリスは全身の力が抜けたようにソファーへ崩れ落ちる。そして、ふるふる震え出したかと思うと、突然フォースを睨みつけ大きく叫んだ。

「ふっざけるな……！」

飛鳥とかおりがびっくりしてアリスを見る。

「あんた、何言ってるかわかってるの？ 魔力と精霊力を同時に操るなんて、出来るわけないでしょーが！」

いまにも掴みかかりそうな勢いに、優子が慌てて止めに入る。

「同じ精霊力でも、属性が違えば同時に操ることは難しい……。それが相反する精霊力と魔力なら、まず不可能でしょー」

呆れ顔で呟くセリア。そのことは、当然フォースも理解しているはずである。

「仮に操れたとしても、バランスを取るのが極端に難しい。どちらか強い方に侵食されて、中和するのがオチね……」

セリアは、お手上げとばかりに手のひらを上げた。

「それに、強い精霊力と魔力が干渉し合えば、すべてを消滅させる闇が発生する…。大魔王ザーヴァを倒した禁呪も、その力を利用した精霊術…」

一瞬、アリスは寂しそうな顔をした。

「それがわかって言ってるの！」

アリスは、古傷を抉られたように、怒りの声を上げた。

しかし、フォースは平然としている。

「ふふふ…。オレの国デマントイドの魔王ルシフォンさまは、精霊界では光の精霊神をなされている…。あの御方なら二つの力を同時に操ることも可能さ」

フォースは、自分の国の魔王を自慢するように呟いた。

「…って、わざわざ人間界へ来てもらうなんて出来るはずないでしょ。人間界にやって来てアイドルやってる、どっかの国のお姫様じゃあるまいし」

アリスが叫ぶのと同時に、セリアが前屈みになって頂垂れた。

「アリス…、あんたね…」

セリアは、泣きそうな顔をする。何か言いたそうであつたが、ぐつと我慢していた。

「たしかに、ルシフォンさまに来てもらうのは無理だが…。じつは、あと一人だけ心当たりがある…」

フォースは、身を乗り出すように聞き入るアリスたちを見て、満足そうに微笑む。

「魔族に近い人間族でありながら光の精霊力の使い手…」

それを聞いたアリスとセリアの顔が強張る。続く言葉が、容易に想像できるからだ。

「そう…、アウインの勇者ショウ！ ヤツなら、あるいは…」

フォースは、にやにやと笑いながらアリスを見た。

フォースがショウのことをどれだけ知っているのかはわからない。もしかすると、大魔王ザーヴァと戦ったことは知らないのかもしれない。だが、期待させておいて結果がそれとは…。アリスの怒りは

頂点に達した。

「頼めるものなら、とつくにやってるわー！ー！」

アリスは虚空から聖剣クリソベリルを取り出し、フォース目掛けで突き立てた。

辛うじてクリソベリルを交わしたフォースは床に転がり落ちる。

「な…、なにしゃがる！」

フォースが座っていたソファアの背もたれには、クリソベリルが突き刺さっている。少しでも逃げるのが遅かったら、フォースはあの世に旅立っていたであろう。

それほど何の躊躇いもなく、アリスはフォースを殺そうとした。

第10話 アウインの勇者

光風町の中央にある自然公園では、休日ともなれば家族連れで賑わいをみせる。街では現在も魔獣化の脅威が続いていたが、日中は安全と考えられていたのだ。

しかし、それは昨日までのこと…。まさにこのとき、楽しそうに駆け回る幼児たちをじっと見つめる不気味な眼光があった。

公園を取り囲む樹の上に唸りながら潜む黒い影。真つ赤な三つの瞳…。それは大型肉食獣の数倍はあろうかという大きさの狼型魔獣であった。

「さあリウムさん、あそこにいる人間族たちを襲い、魔石の複製を憑けてください」

樹の幹に凭れかかる魔族ガーティスは、リウムにそう命令する。だが、リウムは一向に動こうとしない。

「…リウムさん、どうしましたか？」

ガーティスが表情を窺うように覗き込むと、リウムは少し強めの日差しを受け、うとうとと寝息をたてはじめていた。

ガーティスは頭を押さえてため息をつく。第二形態の魔獣が誕生して計画も次の段階へ移ろうとしているのに、肝心要のリウムがこれでは話にならないのだ。

「リウムさん、魔石だったあなたを蘇らせたのは私です。ちゃんということを聞いてもらわないと…」

ガーティスは悲しそうに呟く。すると、何かを感じたのか、リウムが突然立ち上がった。

牙を剥き出しに唸るその姿は、まさに凶暴な魔獣そのものである。「そうです。あの人間たちを襲い、あなたの魔石のコピーを憑けるのです」

ガーティスがビシッと指差すと、リウムはそれを無視して身体を反転させる。そして、枝から枝へと飛び移り、森の奥へと姿を消し

てしまった。

残されたガーティスは、口を大きく開いたまま啞然としている。指差したまま固まったその姿は、どこか寂しげであった…。

リウムは、迷いの森を抜け、こだまの樹が聳え立つ広場にやって来た。

迷いの森によって人々の侵入を拒み続けているこの場所は、精霊界への転移ゲートがあることでも知られている。また、こだまの樹は精霊界で神聖樹クリソプリーズと呼ばれていた。

ここは、クリソプリーズの精霊力が肉眼で確認できるほど充満している。いくつものオーブと呼ばれる光球体が漂う光景は、とても人間界のものとは思えない。

そこでリウムは、こだまの樹の根元に立つ人影を見つけた。

独特な魔界の衣を纏う女性のような顔立ちの青年は、昨晚、白鳳学園に現れたアウインの勇者シヨウである。

「へえ。ここに入れるなんて、ただの魔獣じゃなさそうだな…」

シヨウは、突然現れたリウムを見て微笑む。普通の魔獣がこの地に入れば、すぐさま魔石の魔力が中和されて、魔獣化が解除されてしまうだろう。

シヨウは、感心するようにリウムを観察する。見た目は他の魔獣と大差ないが、魔獣の特徴と言うべき魔石の色が違っていた。リウムの魔石は、闇のような黒色ではなく、血のように赤いのだ。

地上に降り立ったシヨウは、平然とリウムに近づく。そして、普通の犬でも相手するように、リウムの頭を撫でた。

「この魔獣、実体があるのか…」

驚いたことに、リウムの身体は温かみが感じられた。

魔獣の身体は魔力の粒子で構成されている。形はあるが実体は無く、剣で斬り裂いても傷つくことはない。しかし、リウムの身体からは明らかに血の流れを感じるのだ。

リウムは唸り声を上げながらも、シヨウの愛撫を受けていた。心

做しか、しつぽが振られているようである。

「やれやれ…、今度は魔族のご登場か？」

シヨウは、リウムを撫でながら後ろに声をかけた。

後を追ってきたガーティスは、自分と違うリウムの態度に驚愕していた。ガーティスが触ろうものなら、確実に噛まれているからだ。

「リウムさん、いつたいなにをしているんですか！」

ガーティスが、幸せそうに目を瞑っているリウムに問いかける。

「そうか、リウム…っていうのか」

シヨウはリウムの首の辺りをごしごしと掻く。

「…ん」

リウムは、ガーティスの問いかけを無視して、シヨウに返事する。

「名前、なに…？」

今度は、リウムから質問をした。

「オレか？ オレはシヨウ…。如月翔だ」

リウムが喋ったことに驚きはしたが、シヨウはそれを感じさせない振る舞いをした。

「…、シヨウ…。じゃあ…、マスター」

何をどうすればマスターになるのかわからなかったが、これ以降、リウムはシヨウのことをそう呼ぶようになった。

「シヨウ…だと…」

ガーティスは、はつとしてシヨウの右手甲を見る。そこには、鳥が翼を広げたような紋様が浮かび上がっていた。

「ア、アウインの紋章…。キサマ勇者シヨウか！」

ガーティスは信じられない思いだった。

精霊界の歴史上で最強の勇者は、間違いなく五千年前に存在したクリスタルであろう。両手の甲にアウインの紋章を持ち、その力は精霊神をも凌駕していたといわれている。

そのクリスタルの生まれ変わりとされるのが、右手にアウインの紋章を持つ勇者シヨウと、同じく左手に持つ勇者アリスであった。

二人が歴史に登場したのは、今から約十一年前…。わずか五歳に

して数々の戦いに勝利し、数年後には精霊界を支配していた魔王を倒したとされている。だが勇者シヨウは、人間界へ侵略して来た大魔王ザーヴァと相打ちになって、消滅したはずなのだ。

「まさか、生きていようとは…」

シヨウの存在は、精霊界はもちろんのこと、魔界でも有名である。ガーティスも直接戦ったことはなかったが、その驚異的な強さは耳にしていた。

「…どうやら魔石を持ち込んだのは、あんたらしいな」

シヨウは、リウムを撫でるのを止めて、ガーティスに向き合う。ただ向き合っているだけだがシヨウの威圧感は物凄く、押し潰されそうな重圧がガーティスを襲う。

「これが、勇者シヨウ…」

ガーティスは、アリスとは比べものにならないほどの力をシヨウから感じていた。

「くっ…。リウムさん、そいつは我々の敵です。殺しなさい！」

ガーティスは後方に飛びながらリウムに指示を出す。その身体は、闇の空間へと吸い込まれていった。

「…マスター、…敵？」

リウムは、頭を捻りながらシヨウをジッと見つめる。少し考えたシヨウは、微笑みながら答えた。

「そうだな…。いまのところ、敵…かな」

ガーティスが姿を消したことによって、シヨウはリウムと向かい合う。

「…敵…」

リウムは一言だけ呟き、次の瞬間大きく吠えた。

「がっががあああー！！！」

すると、場の魔力が一気に高まり、リウムは牙を剥き出しに唸り始める。

「マスター…、殺す…」

その言葉に偽りは無く、リウムから殺気が発せられていた。

「ふふっ、おもしろい…。オレも、この三年間の成果を試させてもらおうか。」

シヨウは、腰に提げていた剣を抜刀する。流れるような動作で身体を半身にし、剣を上段に構えた。

シヨウの周りに魔力のフィールドが発生する。驚いたことに、シヨウはその代名詞とも言える光の精霊力ではなく、相反する魔力が発生させたのだ。

これこそ、シヨウが三年間魔界で修行した成果であった。まだ精霊力はどうまく扱えないが、かなり強力な魔力をコントロールすることができ一通りの魔術をもマスターしている。シヨウは、この戦いで慣れない魔力戦を挑もうとしていた。

リウムは、じりじりと移動しながら隙を窺い、一瞬で間を詰めてシヨウに飛びかかった。

シヨウは剣でリウムの爪を受け流し、そのまま頭部に刃を叩き込む。迫る剣を難なく啜えたりウムはシヨウごと上空へほおり投げた。空中で停止したシヨウは魔力を錬りはじめる。リウムが透かさず口を大きく開き、火炎球を放つ。シヨウが右手を突き出すと魔力の盾が現われ、衝突した火炎球は四方に弾け飛んだ。

爆炎に紛れて地表に降り立ったシヨウは低空で飛行し、リウムの首元目掛けて剣を振り上げる。辛うじてかわすリウムだったが、鋭い剣圧により頬の一部が引き裂かれた。

「がるる…」

シヨウとの間を少しあけて威嚇するリウム。その傷口からは、魔力の粒子ではなく、真っ赤な血が流れていた。

第11話 まぬけな再会

シヨウたちの戦いは、光風町から遠く離れたベリル研究所でも捉えられていた。

「何、この魔力！」

アリスが、逸早くその異変に気づき、建物から飛び出す。

「やっぱり、光風町の方角ね…」

セリアも後を追いつ、その方向を確かめる。強大な魔力は、間違いなく光風町で発生していた。

「どうしたの…かな？」

飛鳥は慌てる二人を見て小首を傾げる。優子も理由がわからないのか、不思議そうにしていた。

「どうやら、強い魔力を持つ者同士が戦っているようです」

飛鳥に抱かれているアクアが状況を説明する。

「これほどの魔力ですから、魔獣だとは考えられません。高位魔族、あるいは…」

そこまで言ったところで、アクアはある可能性に辿り着く。

（あれ…、この魔力って…）

アクアの脳裏に、よく知った人物が浮かび上がった。

「冗談じゃない。いくら光風町にクリソプレーズがあるといっても、これほどの魔力戦をやられたら、魔石が反応して一気に魔獣化が進んでしまう！」

アリスは顔面蒼白となった。

光風町に住む魔石憑きの患者が一度に魔獣化したら、大騒ぎどころの話ではないのだ。

（なるほど…）

そのとき、アリスの頭に直接声が響いた。突然のことにアリスはきょとんとする。周りを見回し声の主を捜すが、当然いるはずもない。

「…なるほど？」

何を思ったのか、アリスは近くにいた飛鳥に聞き返した。

「はあ？」

話をふられた飛鳥も、アリスが何を言っているのかさっぱりわからない。

すると、先ほどまで感じられていた魔力が、忽然と消えてしまった。アリスたちは、この不可思議な現象に呆然と立ち尽くしかかった。

リウムの攻撃をかわしたシヨウはバトルフィールドを展開させた。その瞬間、周りの空間は外界と遮断される。これで、フィールド内の出来事が外界に影響を及ぼすことはなくなった。

シヨウとアリスは、同じ生体波長を持ち、同一人物といっても過言ではない。そのため、シヨウはアリスの思考を感じ取り、魔獣化の危険性に気づいたのだ。

「これで心置き無く戦えるな」

シヨウは改めてリウムに向き合う。戦いの激しさを物語るように、シヨウは数多くの傷を負っていた。

それはリウムも同じである。なかでも肩から胸にかけての傷跡はかなり大きく、周辺の体毛は真っ赤に染まっていた。

「ががぁー！ー！」

隙を窺いながらシヨウとの距離を詰めるリウム…。しかし、何を思ったのか発していた殺気を収め、その場に伏せてしまった。

「な、なんだ？」

シヨウは警戒しながらもリウムに近づく。

「リウム…どうしたんだ？」

戦いの相手に問いかけるのもなんだが、そう聞かずにはいられなかった。

リウムは、シヨウの顔を見て軽くしつぽを振る。そして、大きなあくびをして、一言だけ呟いた。

「帰る…」

その言葉にどんな意味が込められているのかわからないが、リウムにこれ以上戦う気はなさそうだ。

意味不明な言動に戸惑うシヨウ…。

「そうか…、帰るか…」

シヨウは、大汗をかきながら剣を収め、バトルフィールドを解除した。だが、帰ると言ったはずのリウムは、一向に動こうとしない。（さて、どうしたものか…）

シヨウは、途方に暮れてしまった。

魔獣であるからには、リウムも何者かが魔獣化しているはずである。実体のあるリウムに対して、通常の方法で魔獣化が解除できるとは思えない。かといってリウムをこのままにしておけば、魔獣化の犠牲者が増えるとも考えられる。

シヨウが視線を向けると、リウムは漂うオーブを楽しそうに追っていた。とても害があるように見えないから困りものである…。

「リウムさん、撤退しますよ」

突如、辺りにガーティスの声が響いた。姿は見えなかったものの、どうやらシヨウたちの戦いをずっと窺っていたようである。

「何をしているのですか、早くしなさい！」

いうことを聞かないリウムに、ガーティスは苛立ちの声を上げた。しばらく考えていたリウムだったが、何もない空間に向けて口を大きく開く。すると、そこに魔力の霧が発生し、リウムは息を吸い込むような動作を見せて一言だけ呟いた。

「…うざい」

リウムの口から光が溢れ出し、闇の中に隠れているであろうガーティスめがけて、大質量のレーザーが照射された。

闇の霧が掻き消されるほどの眩い光が起こる。霧の中からガーティスの悲鳴が聞こえ、辺りには焦げ臭い匂いが漂った…。

「悲惨だな…」

シヨウは、敵ながらガーティスの不幸に同情した。

「さて、リウム…。お前は他の魔獣と違って知能がある。人を襲って傷つけたり魔石を憑けたりすることはいけないことだとわかるな？」

お座り状態のリウムは、シヨウの言葉に頷く。

「今後、人を傷つけたりすることは決してしないでほしい。もし、その約束が守れないようなら、オレはお前を倒さなければならない…」

シヨウは真剣にリウムを見つめる。

魔獣化の解除法はわからないが、まずはこれ以上被害者を増やさないようにしなければならない。シヨウは、なんとなくではあったが、リウムならわかつてくれるような気がした。

「…うん」

リウムは、何の躊躇いもなく承知する。

「人を傷つけるのは…いけないこ…、はっ！」

突然、リウムがおろおろしはじめる。シヨウが何事かと訪ねると、リウムは申し訳無さそうに呟いた。

「ガ…ガ…ティス…」

つい先ほど、無抵抗なガーティスに向かって攻撃をしてしまったのだ。リウムは、叱られるのを覚悟してしょぼくれた。

「ガーティス？ ああ…さっきの魔族か…」

シヨウは、一瞬で結論を叩き出す。

「あれはOK」

よくやったと言わんばかりにシヨウが親指を突き立てると、リウム顔はぱっと明るくなった。

魔石を撒いて人間界を混乱に陥れようとしている魔族に容赦することはない。リウムが攻撃しなければ、シヨウが戦いを仕掛けていたであろう。

ガーティスは高位魔族であるため、戦いとなれば確実に命の奪い合いになったはず…。考えようによっては、ガーティスはリウムに助けられたのだ。

「さて、オレは行くけど、リウムはどうするんだ？」

シヨウは、鋭い眼つきで睨むリウムに問いかける。

保護者だった魔族ガーティスと決別したため、リウムに帰るべき場所はない。しかし、リウムの考えは既に決まっていた。

「一緒に…行く…」

シヨウに近づき、軽くしつばを振る。最大の愛情表現であった。

魔獣であるリウムと一緒にいることは何かと制限がかかるが、シヨウはこの奇妙な魔獣を妙に気に入ってしまった。

「よし、一緒に行くか」

シヨウは、リウムの頭を優しく撫でた。

ちょうどそのとき、光風町から飛んできたアリスとセリアが地面に降り立った。アリスは、魔獣リウムと魔界の衣を纏ったシヨウを見て哑然としている。

アリスの前から姿を消したシヨウは、魔界のデマントイド国にいた。そこでシヨウは、魔王ルシフォンに魔力を操る修行を受けていた。そして、魔獣化事件の発生を知り、この人間界へ戻って来たのだ。

三年ぶりの再会に、シヨウは微笑みを浮べる。

（二人とも、きれいになったな…）

シヨウが素直にそう思えるほど、お互い成長していた。

「がるる…」

アリスとセリアを見てリウムが唸り声を上げる。シヨウが苦笑しながら頭を軽く叩くと、敵でないことを理解したのかリウムは唸るのを止めた。

ジッと睨まれていることに気づいたシヨウは、自分が無事だったことを知らせなかったことにアリスが怒っているのかと考えた。だが、アリスの口から出た言葉は、シヨウを仰天させるものであった。「また、美人な魔族が現れたものね」。いったいその魔獣を使って何をするつもりかしら？」

シヨウは、全身の力が抜け、リウムにもたれかかるように倒れ込む。どうやらアリスは、目の前の美人がシヨウだと気づいていないようだ。

「アリス気をつけて…、この前の魔族とは比べものにならない強さよ…」

セリアもシヨウだと気づいていないようで、剣を構えながら精霊力を練り始める。

頭痛がしてきそうであったが、そこはさすがのシヨウである。場の空気を読み取り、何を思ったのか偉そうな口調で喋り始めた。

「くくくつ、このリウムは、ただの魔獣ではない…」

突然の変貌に、リウムが目を丸くしてシヨウを見る。

「いずれリウムがキサマらを倒し、人間界は再び恐怖に包まれるのだ！」

シヨウは身を翻し、闇の霧を出現させる。

「行くぞリウム！」

啞然としているリウムに声をかけ、シヨウは闇の霧へと姿を消してしまった。

混乱状態のリウムであったが、それでもシヨウの後を追う事にする…。

「くつ…」

残されたアリスは舌打ちをした。

アリスは、シヨウのことを完全に魔族だと勘違いしていた。そしてセリアは、魔族が優子にそっくりだったことに、少しだけ違和感を覚えていた。

第12話 とんでもない思い違い

「ああーっ、この魔族腹立つー！」

アリスが大きな声で悔しがる。ペリル研究所に戻ったアリスは、光風町での出来事を記憶石で映しながらみんなに説明していた。

「なにが 『いずれキサマらを倒し』 よお！」

よほど気に入らなかったのか、かなり怒り心頭である。

「でもさー、この魔族…優子に似てなかった？」

セリアがその疑問を呟くとアリスは大声で否定する。そんなやりとりを聞きながら、飛鳥は泣きそうな顔で項垂れていた。

「…って、どう考えてもシヨウくんじゃない！」

飛鳥は、叫びながら拳を上下に揺らす。

その言葉にアリスの動きが止まった。

「え…？ だってシヨウの気配じゃなかったし…、魔力を使ってたんだよ、こいつ」

アリスは確認のためにセリアを見る。するとセリアは、納得したのか頭を抱えて、しまったといった顔をした。

「…あれ？」

アリスは小首を傾げた。

また、優子の驚きも大変である。

「お兄ちゃん…。わたしより美人になってる…」

涙を流しながら、喜んでいいのか悲しんでいるのか、かなり複雑な顔をしていた。

生体には種族を問わず波長というものがある。魂の波動というのであろうか、それぞれが固有なもので、同じ波長を持つ者は別種族の間でも存在しない。しかし、時代が流れると過去に存在した波長を持つ者が現われることもある。それが生まれ変わりの証明となるわけだ。

そして、異例なことではあるが、シヨウとアリスは同じ生体波長

を持っていた。過去に存在した勇者と同じ波長を持つ二人が、クリスタルの生まれ変わりといわれるのはそうだった理由からである。

アリスたち異世界の住人は、相手を見るととき生体波長で認識することが多く、顔や身体の特徴で判断するのは二の次である。そのため、顔だけで本人と認識することは難しく、まるで外国人の顔はみんな同じに見える状態だったのだ。

だが、同じ波長を持つアリスが、ショウを間違えるはずがない。

「と、いうわけで、こいつは絶対にショウじゃないの!」

アリスが自信満々で説明した。

「くくっ…、あはははっ」

そんなアリスを見てフォースが笑い出す。

「いや、ショウもノリノリだね。なにが『人間界は再び恐怖に包まれる』だ。これじゃあ、まるで悪人じゃねえか」

膝を叩きながら大受けするフォースに、アリスは目を丸くする。

「こいつは間違いなくショウだよ。その犬っころに聞いてみな、そいつはショウの命令で樹神飛鳥を護衛してるんだからな」

その言葉に、アクアの身体はびくつと震えた。

飛鳥の膝の上で大汗をかきながらそっぽを向くアクア…。アリスはアクアに近づき、片手で頬を挟んで持ち上げる。

「アクア…、本当なの?」

優しく問いかけるが、手には信じられないほどの力が込められ…
なによりアクアを見つめる目が笑っていない。

（こ、殺される!）

アクアは瞬間的に身の危険を感じた。

「は、はひ。た…たひかにヒョウひやまでひゅ」

込められた力により、顎がうまく動かない。アクアは涙を流しながらその恐怖に耐えていた。

以前、アリスをショウに比べると大した事は無いと考えたことがあったが、それは間違いであった。怒りに震えるアリスは、はつきりいってショウより怖い…。

アリスはアクアを解放し後ろを向く。わなわな震えたかと思うと、精霊力が集まった拳を低めのテーブルに叩き込んだ。テーブルは木っ端微塵に吹き飛び、余波で床に亀裂が入る。

「あの野郎…。今度会ったら殺すーっ！」

まるで、アリスの背後に怒りの炎が見えるようであった。

優子は脅えながらセリアに問いかける。

「ねえ…、アリスって性格変わった？」

二年以上も一緒に暮らしているが、こんなアリスは見たことがない。

「いや…、これが本来のアリスだよ…」

セリアが大汗をかきながら優子の問いに答える。

アイドルとして、大人しく神秘的な少女といわれていた面影は、微塵も感じられなかった。

「うう…」

シヨウの身体に悪寒が走る。辺りをきよろきよろ見回すが、もちろん誰もいるはずがない。

「な、なんだ？」

シヨウは、無意識にアリスの怒りを察知し、身の危険を感じていた。

「…マスター？」

魔獣リウムが不思議そうに小首を傾げる。

シヨウは何でもないとリウムの頭を撫でながら、先ほどのアリスたちを思い出していた。

「やっぱり、こいつの所為だろうな…」

シヨウは首にかけているペンダントを手にした。細い鎖の先には綺麗にカットされた青い宝石が付いている。この宝石は、シヨウが新しく創り出した鉱物でブルークリスタルと名付けられていた。

ブルークリスタルは、ダイヤモンド以上の硬度があり、金属のようにも加工できる優れものである。系状にすれば伸縮性に優れ、織

り上げて布を作ることでも最強の服を作ることでもできた。ブルークリスタルは自然界には存在せず、その創造や加工はクリエイト能力のあるシヨウにしかできなかった。

シヨウは、このブルークリスタルで出来たペンダントに、ある能力を付加させていた。それは生体波長を誤認させる能力である。

アウインの勇者シヨウの生体波長は、数多くの者に知られていた。特に敵対していた魔族には波長が知れ渡っており、シヨウが魔界で生活する上でどうしても隠す必要があったのだ。

ずっと付けていたためシヨウもすぐに思い出せなかったが、アリスが気づかなかったのはおそらくその能力が原因であろう。

「それでも気づけよな……」

シヨウは苦笑気味に呟くのだった。

シヨウとリウムは、光風町にある樹神神社に来ていた。同じ名の神社は各地にあるが、こだまの樹を御神木とする光風町の樹神神社こそ本家であり樹神飛鳥の実家でもあった。

樹神神社は自然崇拜で有名な神社だが、それは表向きのこと……。

樹神一族は、古の時代より人間神を祀っていた。

神社の境内には人影は無く、シンと静まり返っている。シヨウは、魔獣リウムを連れて祭壇へと近づいた。

祭壇には一人の男性がおり、リウムを見て愕然とする。

「ま、魔獣！」

その男性は神社の神主であり、飛鳥の父親であった。

「この魔獣は心配ないですよ。リウムは味方です」

出会ってから一時間も経ってないが、シヨウはそう断言した。

シヨウは、人間界へ戻ってから何度も樹神神社と接触していた。

その目的は、転生したであろう人間神候補の情報を得るためである。魔族ガーティスが飛鳥を人間神候補と考えているのはまず間違いない。シヨウは、飛鳥が狙われるのを察知して、アクアを護衛に付けたのだ。

「おじさん。オレは金緑石に向かおうと思います」

シヨウは、これまでの経過を説明し、これからの考えを伝えた。

「おじさんが言うように、飛鳥が人間神の生まれ変わりなのか…オレにはわかりません。でも、友人が狙われているのを、黙って見過ごすつもりはありませんから」

シヨウは右手の甲を見せる。鳥が翼を広げたような紋様の傍らに、小さくではあるが炎のような樹のような紋様が浮かび上がっていた。

「その紋様が…、すべての始まりだったな…」

飛鳥の父は紋様を見てため息をつく。

「シヨウくん、どうか娘をお願いします…」

そして、真剣な表情でシヨウを見つめ、ゆっくりと頭を下げた。

「任せてください」

シヨウは、微笑みながらそう答えた。

第13話 魔獣の恐怖

リウムがガーティスを裏切ったことにより、魔獣化事件は転機を迎えようとしていた。今まで数日に一つの割合で発見されていた魔石が、この日に限って十数個も見つかったのだ。

光風町では外出禁止が発令され、連絡を受けたアリスとセリアそしてフォースが、直ちに警戒にあたっていた。

「これで、七個目つと…」

アリスは、何者かに取り憑こうとしている魔石を見つけ、精霊力で活動を抑えながらガラスの小瓶に入れる。これで封印を施せば、魔石の活動を完全に封じることができるのだ。

「ねえアリス…。変じゃない？」

合流したセリアがそう呟く。これだけ派手にばら撒かれれば、住人たちも警戒して魔石に憑かれる者が現れるとは思えない。

「そうね、たぶんあっちが目的でしょうね…」

アリスは、金緑石に戻った飛鳥のことを言っていた。

アリスたちを誘き寄せ、手薄になった飛鳥を狙う…。手段としては単純なものだが、かなり有効であることに違いなかった。だが、魔石をこのままにしておく訳にもいかない。アリスたちは、一刻も早く金緑石に向えるように、回収作業を急いだ。

住宅街でかおりと母親を降ろした飛鳥たちは神社入口の森に到着する。小田が車を止め飛鳥たちが降りると、テレビや雑誌などの取材陣が殺到した。

目的はもちろんSPINEELの新メンバー飛鳥の取材である。

今回はSPINEELのリーダー優子も一緒であることから、確実な情報が得られると取材関係者は目の色を変えていた。それに、なんとか取材拒否権の発動する森に入られる前に情報を聞き出さなければならぬ。取材関係者は、身体を張って飛鳥たちの行く手を遮

っていた。

また周辺には、夜にも関わらずかなりの野次馬が集まっている。その中には飛鳥のクラスメイトも何人か混じっていた。

ここに来れば大人気のSPINEELに会える。金緑石では、ちょっとしたお祭り騒ぎであつた。

（まったく、人間とは騒がしい種族ですね…）

飛鳥に抱っこされている光竜アクアマリンは、うんざりとした顔をする。これが憧れの勇者と同種族であるなど、とても信じられなかった。

そのとき、アクアは野次馬の中に強力な魔力を感じた。そのことを飛鳥たちに伝えようとしたが、人前で喋るわけにもいかない。アクアは、おろおろしながら飛鳥と優子の顔を交互に見つめた。

「アクアちゃん、どうしたの？」

優子がそんなアクアの様子に気づく。アクアの視線は群がる野次馬に向けられていた。異変を察した優子は、慌てて鞆から何かを取り出そうとする。

飛鳥が不思議そうにしていると、野次馬の中から三名ほどが近づいてきた。

「…と、智子？」

三人のうち一人は同じクラスの友人であつたため、飛鳥をからかに来たのかと思った。しかし、アクアの唸り声からただ事ではないと感じ、慌てて三人から距離を取った。

突然、場の魔力が高まる。すると、その者たちの身体から魔力の粒子が噴き出しはじめた。

粒子はそれぞれが塊となり、団子状となって身体にへばり付く。そして、わずか数秒の間に三体の魔獣が誕生した。

辺りはパニックとなり、野次馬たちも一斉に逃げ出す。まずいことに、取材に来ていた局の中には生放送をしているところもある。その結果…、極秘とされていた魔獣化の瞬間を、多くの人が目撃してしまうことになった。

「あつた」

優子は、一つの宝珠を取り出し地面に叩き付ける。その瞬間、精霊力が周りを覆い、外界との空間を遮断した。それは、精霊力が少ない者でもフィールドを発生させることができる宝珠であった。

フィールド内では、放送機器・撮影機の全てが機能を停止してしまう。優子は魔獣化が始まる前にフィールドを張りたかったが、突然のことで少し手間取ってしまったのだ。

「みんな、早く逃げて！」

魔獣化に驚きながらも取材を続ける記者たちに、優子が苛立ちながら叫ぶ。さすがプロというべきなのだろうが、肝心の機材が動かないのでは話にならない。

記者の一人が、魔獣の一撃を喰らい吹き飛ばされる。血だらけでぐったりとなった記者を見て取材関係者も命の危険を感じたのか、優子の指示に従って避難を始めた。

魔獣は、逃げ惑う人々には見向きもせず、飛鳥に襲いかかった。

アクアは、飛鳥の腕から飛び降りて一瞬で巨大な光竜となる。

「飛鳥さん、ボクに乗ってください！」

しゃがみ込むアクアの瞳は、父親譲りのオッドアイとなっていた。飛鳥は、アクアの首筋に抱きつくように身体を預ける。するとアクアは、翼を広げて大空へ舞い上がった。

「わああー！！」

飛鳥は、驚いて悲鳴を上げる。アクアは、飛鳥を乗せたまま金緑石の市街地へ向かった。

「って、アクアちゃん！ 優子を一人にしないで！」

飛鳥は、アクアにしがみ付いたまま叫んだ。優子だけを残して、自分たちだけが逃げるわけにはいかない。

「優子さんは大丈夫です…。魔獣はこつちを狙っていますから」

アクアは、魔獣の魔力を感じながら呟いた。

恐る恐る地上を覗くと、さきほどの魔獣は住居の屋根伝いに飛鳥

たちを追ってきている。飛鳥が逃げることで、優子に危険が無くなるのだ。

「人が少なく戦いの被害が出にくい場所…。飛鳥さんの学校に向かいます」

冷静に状況を判断したアクアは、白鳳学園に向かうためスピードを上げた。

すると、夜の闇に浮かんだ黒い影が、アクアめがけて突っ込んできた。

大きな衝撃と共に、飛鳥の乗ったアクアがバランスを崩して落下する。態勢を立て直したアクアが見たものは、大空を舞う猛禽類のような姿をした巨大な魔獣の姿であった。

「鳥型の魔獣！」

アクアはその事実には驚愕する。魔獣化事件が発生してから三ヶ月、鳥型の魔獣が現れたなど聞いたこともない。

（まずいですね…）

アクアは、飛鳥を校舎の屋上に降ろし、地上で獣人型の魔獣と戦おうと考えていた。しかし、空を飛べる魔獣がいるとなれば話は変わってくる。これで、安全な隠れ場所がなくなってしまったのだ。

「アクアちゃん…」

飛鳥が不安そうに呟く。その身体は僅かながら震えていた。

魔鳥が矢のように迫り、鋭い鉤爪でアクアの皮膚を引き裂く。

アクアがいつもの俊敏な動きができないでいると、悠然と構える魔鳥に地上から駆け上がったきた何かが体当たりを噛ました。

漆黒の毛並み、真っ赤に光る三つの目…。それは、狼型をした第二形態の魔獣リウムであった。

「がががあああー！ー！ー！」

リウムが大きく吠えようと、周囲の魔力密度が高まる。リウムは、魔鳥を見据えて駆け出した。

魔鳥との間に次々と闇の霧が発生し、リウムはそれを足場にして走る。まるで見えない地面があるかのようなようだ。

リウムは、幾つものフェイントを加えながら魔鳥に襲いかかる。

首筋に牙を衝き立て、自分の数倍もある魔鳥を押さえ込む。リウムが力を込めると、傷口から魔力の粒子が噴き出し、魔鳥は徐々に動かなくなつた。それでもリウムは力を緩めることなく、魔鳥の首を噛み切ろうとした。

「やめなさい！」

アクアが慌てて叫ぶ。

「もう勝負が付いています。それ以上やると、魔石に憑かれている人も死んでしまいますよ！」

アクアは、リウムの動きを警戒しながら注意する。

その瞬間、リウムの殺気がアクアに向けられた。魔鳥から牙を外したリウムは、唸りながら呟く。

「うるさい…、いぬ…」

支えを失った魔鳥は、そのまま地面へと落下した。

「しゃ、喋った…」

飛鳥が驚きの声を上げる。記憶石の映像を見ていたのでショウと一緒にいた魔獣だと気づいていたが、まさか喋るとは思っていなかったのだ。

「ボクは犬じゃありません！」

アクアは涙を浮かべながら抗議する。

もちろんリウムも光竜型のアクアを犬だとは思っていないが、生まれて間もないため竜という単語を知らなかったのだ。

「じゃまする…なら…殺す…」

リウムは牙を剥き出しに低い声を出す。その声は、口からではなく真つ赤な魔石から聞こえてくる。

「やはり、魔獣には違いないか…」

項垂れるように呟くアクア…。再び顔を上げると、両前足から青白く輝くクリソベリルの爪が伸びていた。

第14話 光のシヨウ

「ウソでしょ…」

魔獣がいなくなり安心してしまっていた優子の前に、信じられない人物が現われた。それは、全身痛々しそうに包帯を巻いた、魔族ガーティスである。

「くくく…。何も直接襲うだけが方法ではありません…」

ガーティスは脅える優子に近づく。その手には、体格に似合わない剛剣が握られていた。

「あなたには、飛鳥さんを捕らえるための餌となってもらいます」

片手で剛剣を一振りすると、強烈な風が巻き起こった。

これまで自ら戦おうとしなかったガーティスだが、その力はあるスをも凌いでいる。つまり、どう足掻いても優子に勝ち目は無いのだ。

「優子ちゃん！」

小田が車から剣を取り出し優子に投げ渡す。

「ほお、まだ逃げていない人間がいましたか…」

ガーティスは、小田に向けて剛剣を一振りする。剣先からは衝撃波が生まれ、ワゴン車を引き裂いて炎上させた。辛うじて交わした小田だったが、爆風に吹き飛ばされ気を失ってしまう。

「小田さん！」

駆け寄ろうとする優子を、ガーティスが遮る。

「くつ…。あなたの目的は何？ どうして飛鳥を狙うの！」

慣れない剣を構えて優子が問いかける。気丈な態度をしているが、内心は恐怖を抑え込むことに必死であった。

「何も…知らないようですね」

ガーティスはにやにやと微笑む。

「彼女は、現世に転生した人間神の生まれ変わり…」

驚愕する優子を見て、ガーティスは満足そうである。

「お前たちとは、すべてが違うのだよ！」

そして、剛剣を振り上げ優子に襲いかかった。

優子は目を瞑り身体を竦ませる。ガーティスは、優子が構えた剣を弾き飛ばし、片腕を掴んで持ち上げた。優子の顔が恐怖と苦痛に歪む…。

「殺しはしません…。ただし、抵抗すれば…」

ガーティスは優子を捕らえたことに微笑んだ。しかし、その笑みは一瞬で消えてしまう。

「またキサマか…」

ガーティスの視線の先には、気を失った小田を炎上する車から遠ざけるシヨウの姿があった。

「あ…ああ」

優子の瞳から涙が溢れ出る。三年前と比べると姿こそ成長しているが、その優しそうな顔立ちは少しも変わっていない。

「ガーティスとか言ったな…。ゆうを放せ…」

シヨウは悠然とガーティスに近づく。

「どうやらこの娘は、あなたにとって掛替えのない人のようですね…」

ガーティスは、優子の首筋に剛剣を押しやる。

「動かないでいただきましょう…。この娘がどうなっても良いのですか…」

勝ち誇ったような笑みを見せるガーティス。だが、シヨウは歩みを止めようとしない。

シヨウの気迫にガーティスが後退る。そのとき、優子が小さな悲鳴を上げた。

「キサマーーー！」

その悲鳴に、シヨウが怒りを爆発させる。

ガーティスが何事かと慌てて確認すると、後退るとき刃に触れてしまったのか、優子の首筋に赤い血の線が浮かんでいた。

「ま、まで！ これは間違い…、ただのかすり傷！」

必死で意味不明な言い訳をするガーティスは、シヨウの逆鱗に触れてしまったことに気づいた。

「ぶっ殺す！」

場に漂っていた魔力がシヨウの精霊力によって中和される…。いや、それだけではない。シヨウを中心に、膨大な光の精霊力が辺りを包み込んだ。

シヨウの額に光が集まり、精霊水晶が現れる。それに応じてシヨウの黒髪が金色に輝き出し、光が全身を覆って身体が再構築された。我が名はシヨウ…」

ゆつくりと瞳を開いたシヨウは、右手を胸の位置まで持ち上げアウインの紋章を見せる。

「精霊神… フアリスさまの五精霊の一人…」

アウインの紋章を一気に振り下ろすと、空中に同じ紋章が現れた。それがシヨウを包み込むと光の鎧が装着される。そして、虚空より聖剣クリソベリルを取り出し、宣言するように言い放った。

「光のシヨウ！」

その瞬間、まるで光が爆発したような衝撃が起こる。衝撃が収まると、そこには五精霊化によって精霊族となったシヨウが存在していた。

「こ、これが… 精霊神の… 五精霊…」

ガーティスはその圧倒的な力に恐れを抱いた。全身が震え、優子を盾にすることも思いつかない。ただ、死の恐怖だけがガーティスを支配していた。

「…うう…」

リウムがシヨウの精霊力を感じて身を竦める。アクアに攻撃を仕掛けようとしていたが、それどころではなくなった。少しでも気を抜けば、直ぐにでも気を失ってしまいそうなのだ。

地上にいた魔獣も、強大な精霊力にさらされ、次々と人間へ戻っ

ていく。

「シヨウさまが、五精霊化！」

アクアは愕然とした。唯でさえ非常識な強さのシヨウが五精霊化によってノーマルの数十倍パワーアップしたのだ。このまま戦いになれば、下手をすると辺り一帯が消し飛ぶかもしれない。

「飛鳥さん、一度戻っても構いませんか？」

アクアは、飛鳥に緊急事態であることを伝えた。

「うん。シヨウくんを止めなきゃ！」

飛鳥もアクアに跨ったまま樹神社の方角を確認する。勇者としてのシヨウの強さは、飛鳥も十分に理解しているのだ。

飛び去るアクアたちを、リウムはジッと見つめる。そして、苦しそうではあるが、その後を追うために動きはじめるのだった。

シヨウの精霊力は遠く離れた光風町でも感じられた。

「今度は間違いなくシヨウみたいだね」

セリアは、魔石回収に集中しているアリスに声をかける。昼間は魔界の衣を着て生体波長も違っていたため気づかなかったが、今感じている気配は紛れもなくシヨウのものであった。

アリスは少しだけ考えたが、再び魔石を探し始める。

「シヨウがいるなら心配ないね。こっちは魔石を全部回収しないと

…」

そうは言うものの、アリスの魔石を探すスピードは確実に早まっていた。

「無理しちゃって」

セリアは、そんなアリスを見てクスクスと笑う。早く会いたい気持ちが大変である。

五精霊化したことで、シヨウの生存は各聖界に知れ渡った。かつてシヨウと共に大魔王ザーヴァと戦った五精霊の仲間たちは、その事実には驚き歓喜する。また、精霊界の聖域サンストーンにも、シヨウの精霊力は届いていた。

「ラルドさま、シヨウくんが…シヨウくんの気配が感じられます！」

一人の美しい精霊族が、かつこいい男性に報告をする。

「少し落ち着け…」

うんざりしたように対応しているが、ラルドもかなり嬉しそうである。

「やはり生きていたのだな…シヨウよ…」

ラルドは、ひとりごとのように呟いた。

「シヨウくん…」

両手の指を絡ませながら祈るように微笑むこの女性こそ、現在、唯一の精霊神ファリスであった。

自分の所為で死んだと思われていたシヨウが生きていたことに、ファリスは涙して喜んでいた。

押し潰されそうな重圧にガーティスが後退る。

（殺られる…）

ガーティスは死を覚悟した。

「な〜んてね♪」

突然、シヨウが五精霊化を解き人間に戻った。

「私闘に五精霊の力を使うわけないだろ〜。ファリスさまの命令があるわけでもないのに〜」

冗談だよと言うように、シヨウは手を上下にふった。

啞然としていたガーティスだったが、やっとからかわれていたことに気づく。

「お、おのれー！ー！」

ガーティスは、怒りに任せて剛剣を振り上げる。その瞬間、超速で迫るシヨウの鉄拳が、ガーティスの顔面に炸裂した。

「げふっ！」

ガーティスは後方へぶっ飛び、何度か地面にバウンドして動けなくなった。

「ゆっは返してもらっよう」

意識があるのかは疑問だったが、シヨウは念のためガーティスに

伝える。

「ゆう…、大丈夫か？」

優子は、いまだ状況が理解できないのか、ただ呆然と立ち尽くしていた。

そこに、飛鳥を乗せたアクアマリンが到着する。シヨウは手を上げて飛鳥に軽く挨拶をした。

「おのれ…、おのれおのれー！」

ガーティスは、小刻みに震えながら立ち上がるとする。シヨウの一撃で、かなりのダメージを受けているようだ。

「勇者シヨウよ、キサマはこのわたしが殺し！」

怒りに叫ぶガーティス…。だが、そのセリフは最後まで続かなかった。

ぱくっ

突如、真上から降ってきた魔獣リウムが、ガーティスの頭から胸にかけてを啜えたのだ。

その場にいた全員が目を丸くする。ガーティスは、手をリウムの口に引っかけ、足をジタバタさせる。しかし、リウムはしっかりと啜え込んで離さない。

リウムは、ガーティスの身体を持ち上げ、数字の八を画くように振り回す。リウムがその牙を離すと、勢いよく振り回されたガーティスは、遙か彼方の空へぶっ飛んでいった…。

これにはさすがのシヨウも驚いた。得意げにしつぽを振るリウムにどう反応していいのかわからない。

「…いや。まあ…なんにしても、みんな無事でよかったな…」

シヨウは、当り障りないように、この場をまとめようと努力した。

第15話 トルマリンの魔石

「お兄ちゃ〜ん」

優子はシヨウの胸に飛び込んだ。

「お兄ちゃんお兄ちゃん！」

泣きじゃくる優子を、シヨウはそつと抱きしめる。

三年ぶりの兄妹の再会。実に感動的なシーンではあるがそれは表面上だけのこと…。その証拠に、優子の顔はかなりにやけていた。

「いい加減にしなさい。このブラコン娘！」

しばらくは成り行きを眺めていた飛鳥だったが、長くなりそうだったので優子をシヨウから引き離れた。

「つて、なにするのよお！」

優子は途端に不機嫌となる。母親が仕事の都合で家にいることが少なく子どもの頃から二人で過ごすことが多かったため、優子はいわゆるブラコンであった。

そんなやりとりを、シヨウは苦笑しながら見つめていた。

「シヨウさま…、この魔獣はいつたい？」

光竜型のアクアマリンは、魔獣リウムから視線をそらそうとせず、警戒しながら問いかけた。魔獣でありながら言葉を操り、他の魔獣とは比べものにならない戦闘能力…。そんな魔獣がシヨウと共にいるなんて、アクアには信じられなかった。

アクアの言葉に、優子たちもリウムの存在を再認識する。大型肉食獣の数倍ほど大きな身体に漆黒の毛並み、真つ赤な瞳とまるで三つ目のように輝く魔石。リウムは、低い唸り声を止めようとはしなかった。

「ああ、こいつはリウムって名前で…。まあ、敵じゃないのは確かだ。」

シヨウは、リウムの頭をバシバシ叩いた。

リウムが唸り声を上げてシヨウを睨み付ける。いまにも噛まれそ

うな雰囲気。優子たちはやきもきしたが、リウムは別に怒っているわけではない。魔獣としての顔が恐いだけで、じつは反対に喜んでいた。気に入らないのであれば、身体に触れさす前に噛み付くであらう。

「…マスター、仲間…？」

リウムは、優子たちを見て呟いた。

「オレの妹のゆくに、幼馴染みの飛鳥。そして光竜アクアマリンだ」
ショウが簡単な紹介をすると、リウムは鼻を近づけみんなの匂いをかき始めた。

直立姿勢で固まる優子たち。リウムの巨大な顔が近づき、生暖かい鼻息が感じられる。

すると、リウムは少し距離を取りお座りをした。

「ゆっ…、お姉ちゃん…。あすか…、お姉ちゃん…」

順番に確認するように呟くリウム。

「で……………、いぬ…」

ぼそつと呟いた瞬間、アクアが崩れ落ちる。涙目で抗議するアクアだったが、リウムの言葉はさらに続いた。

「…ごはん、たべもの。……………おいしい？」

リウムはショウの方を見て確認する。

「…食べちゃいけません」

目が真剣だったため、ショウは念押しをした。

意味不明な言動にアクアは呆れる。しかし、仔犬型をしているときに襲われたら、一飲みにされてしまうかもしれない。アクアは、これまで以上に身の危険を感じた。

その後、飛鳥の護衛はアクアに任せ、ショウとリウムはその場から姿を消した。

悲しむ優子だったが、騒ぎの後始末をしなくてはならない。優子は、後ろ髪を引かれる思いでショウと別れた。

保護された三人の魔石憑きは、専用の救急車でベリル研究所に輸

送される。

シヨウの精霊力で魔力が中和され治療の必要はないと思われたが、一瞬で大量の精霊力を浴びた影響か、意識は一向に戻ろうとしなかった。

「たぶん、放送されちゃったよね」

優子は、小田を乗せた救急車を見送り一息ついた。

SPINELの登場する番組は、どんなジャンルでも高視聴率である。そのため僅か一分程度の騒ぎであつたとしても、多くの人に目撃されたと考えるべきだ。

そのことは、魔獣化の瞬間が放送されただけでなく、光風町以外での魔獣化事件発生を知られたことでもあつた。

「ねえ、優子…。これからどうなっちゃうのかな…」

飛鳥は、仔犬型のアクアマリンを抱っこしながら問いかける。人間神の生まれ変わりと言われても、飛鳥には何のことだがわからない。これからも、ただ護ってもらえないのであるのか…。最近の飛鳥は、心を痛めてばかりであつた。

一方、優子は飛鳥を見つめながらガーティスの言葉を思い出す。

（人間神様の生まれ変わりねえ…）

幼馴染みの飛鳥が神と言われても、ピンとこないのが正直なところである。

神とは見えない存在であやふやなもの。住む国や地区、時代によつて信じられている神は異なるが、基本的には霊的な信仰対象であるはずだ。

普通の人間族である飛鳥が、本当に人間神なのだろうか…。優子には疑問に思えるのだった。

そのとき、光風町で魔石を回収し終えたアリスとセリアが飛んできた。

「シヨウは！」

アリスは、慌てて辺りを見回す。しかし、優子たちの反応を見て一足違いだったことを理解した。

ショウとの再会を期待していた分、その落胆も大きい。アリスが頂垂れていると、突然、美しい音色が流れてきた。どうやら、アリスのつけているペンダントが鳴っているようである。

アリスがペンダントに手をやると、空中に美しい女性が映し出された。

「ファ、ファリスさん……」

アリスが驚きの声を上げる。それは、サンストーンにいるファリスからの通信であった。

『アリスちゃん、お久しぶりね……』

立体に映し出されたファリスは、にっこり微笑んでいる。

『二年間もまったく連絡無しで心配してたのよ……。一度こっちに戻って、状況を報告してください』

対話はできないのか、アリスは黙ったまま言葉を聞く。

『そのときには……、樹神飛鳥さんもお連れしなさい……』

ファリスは笑顔のままであったが、有無を言わせない口調であった。

予期せぬ言葉にアリスは絶句する。

「ちょっ……、ファリスさん。飛鳥を連れてって……いったいどういうアリスの言葉が終らないうちに、ファリスとの通信は切れてしまった。」

「ねえアリス……。さっきの人、アリスのお姉さんなの？」

優子が興味津々に問いかける。

ファリスとアリスは、髪の色も同じで雰囲気も似ていた。まるで、数年後のアリスの姿を見ているようだったのだ。

「あ……うん……。お姉さん……っていうか、あたしの親代わりで……」

アリスは頭をかきながら、視線を泳がせる。セリアだけが、ファリスという名前で、彼女が何者であるか気づいているようだ。

「ファリスさんは……、現在唯一の……精霊神……さま……」

その瞬間、時が止まるように、優子と飛鳥の動きは固まってしまった。

「おのれっ！」

全身傷だらけのガーティスが岩壁を叩く。岩壁は粉々に砕け、まるで砂のように地面へと流れ落ちた。

ここは魔界と人間界を繋ぐ洞窟の一つで、ガーティスが人間界潜伏の拠点としていた場所である。遙か地下にあるため地表にそれほど影響ないが、辺りには魔界からの魔力が流れ出ており、もし人間が迷い込んだら命を落としかねない場所であった。

「アウインのシヨウ。キサマはこの手で殺す！」

全く相手にされなかったことに、ガーティスの怒りは頂点に達していた。

だが、シヨウとの力の差は歴然としており、太刀打ちできないのも事実である。ガーティスは意を決してある行動を始めた。

呪文を唱え、印を結ぶと、目の前の空間が歪み、中から一つの小さな宝石が現われる。ガラス光沢をした真つ黒な宝石で、ガーティスが手にすると生物の心臓のように脈打ち始めた。

「リウムと共に伝わった魔石トルマリン……」

ガーティスは呟きながら、その石を胸の位置まで持っていく。

「うぐっ！」

突如、その顔が苦痛に歪む。ガーティスは、両膝をつきそのまま倒れ込んでしまった。

宝石から無数の触手が飛び出し、ガーティスの胸を貫く。触手が脈打ちながら体内に潜り込むと、ガーティスは激痛にのたうちまわる。

「はぁはぁはぁ……」

しばらくして激痛が治まると、ガーティスの胸には透き通ったピンク色の魔石が憑いていた。

「ふふふっ、すばらしい……。これがトルマリンの力か！」

立ち上がったガーティスが叫ぶと、体内の魔力が弾けたように爆発する。

その力は、以前とは比べものにならないほど高まっていた。

第16話 人間神の紋章

精霊界は三つの聖界によって構成されている。

第一聖界スフェーン、第二聖界カーネリアン、第三聖界アイオリト。それぞれの聖界は独立した時空に存在しており、他聖界の存在を知る者は限られていた。

そして、約五千年前に創造されたといわれる第三聖界アイオリトには、精霊族の聖域とされる島サンストーンがあった。

アリスは飛鳥を連れてサンストーンに帰ってきていた。

久しぶりの帰郷なのだが、アリスの心は沈みっぱなしである。

「まずいな、ファリスさん怒ってたみたいだし…」

アリスは昨日の通信を思い出す。笑っていたが、映像からはファリスの怒りがヒシヒシと伝わってきていた。アリスは、唸り声を上げながら頭を抱え込む。

また、悩むアリスの隣りでは、飛鳥が緊張の面持ちで歩いていた。サンストーンは精霊族の聖域で選ばれた者しか立ち入ることが許されていない。さらに、飛鳥はこれから精霊神に謁見するのだ。緊張しない方がどうかしている。

「ねえ、アリス…。どうしてわたしも呼ばれたのかな？」

飛鳥は縋るようにアリスに問いかける。しかし、考え込んで聞こえていないのか、アリスからの返答はなかった。

SPINEELが飛鳥の家に行って来たのはちょうど三日前…。それから、気の休まる暇がないほど、とんでもない出来事が続いた。魔獣に襲われ、SPINEELの新メンバーとなり、魔族に人間神の候補だと言われ…。まるで一生で経験する出来事が、この数日間ですべて起こっているようである。いや…。普通ならこれほどの事件に遭遇しないだろう。

飛鳥は、四年前にも精霊界へ迷い込んだことがあった。魔物に襲われそうになったところをショウとアリスに助けられ、それが原因

で叔父が神主をしている金緑石の樹神神社に移り住んだのだ。それ以降、平常な日々が続いていたのだが…。飛鳥は、自分の不運に大きなため息をついた。

湖畔をしばらく歩いていると、丸太を積み上げたログハウスが見えてきた。

精霊界に似つかわしくない建物のように思えるが、これがこの島で唯一の住居…つまりアリスの実家であった。

「ただいま…」

アリスが恐る恐る声をかけると、ログハウスの中から体格のいい美形の男性が現れる。それは、ファリス以外で唯一サンストーンに住んでいるラルドであった。

「アリス…、戻ったか」

ファリスから話を聞いていたのか、ラルドの態度はそっけない。

「あ…、おじいちゃん」

アリスは苦笑気味に呟く。

「ぐげっ！」

その途端、ラルドの投げた木製の椅子がアリスの顔面を直撃する。椅子は粉々に碎け飛び、アリスは顔を抑えながら七転八倒した。

「おじいちゃんじゃない…。お兄ちゃんと呼べ…」

ラルドの殺気にも似た怒りが、アリスに突き刺さる。

「つて、二年以上生きてて何がお兄ちゃんよー！」

猛抗議するアリスだが、ラルドは知らん顔をしている。

二人のやりとりはいつものことだが、初めて目の当たりにする飛鳥には衝撃が大きかった。さらに驚いたのは、どう見ても二十五、六歳なラルドが二年以上も生きており、アリスにおじいちゃんと呼ばれていることだ。

精霊族は長寿な種族だが、寿命は二千…長くとも三千年のはずである。アリスの話が本当なら、ラルドは長寿どころではない。

「樹神飛鳥…だな」

ラルドは、ゆっくりと飛鳥に近づく。慌てて頭を下げる飛鳥に、ラルドは笑顔で呟いた。

「ようこそ、精霊界へ…。貴女の来界を歓迎する」

ラルドの笑顔に、飛鳥の顔は真っ赤となった。

（か、かつこいいい）

ラルドには、ショウとは違ったかつこよさがあつた。

「ねえアリス」ラルドさまって本当にお年寄りなの？　かつこよすぎだよ」

飛鳥はアリスの耳元で囁いた。

「見た目に騙されちゃダメ」

アリスが首を振りながら答える。

「こつ見えても、極悪凶悪、絶対無敵の非常識、究極の若作り…」

説明が終わる前に、ラルドの拳骨がアリスの頭上に炸裂していた。頭を抱えてしゃがみ込むアリスを無視して、ラルドは飛鳥の背に手をやる。

「さあ、話は家の中でしょうか」

ラルドに連れられ、飛鳥はログハウスの中へ入った。

パン、パンパン！

突然、爆竹のような音が聞こえ、頭上から紙テープが降りかかる。驚きに目を丸くした飛鳥が見たものは、ハデハデなとんがり帽をかぶり数個のクラッカーを手にしたファリスの姿であった。

「飛鳥ちゃん、いらつしゃい」

笑顔で歓迎するファリス。部屋の中はパーティー風に飾られており、テーブルには見たこともない美味しそうな料理が並んでいた。

「精霊神…さま？」

精霊神に謁見という硬いイメージを予想していた飛鳥は、あまりのことにファリスを指差してしまう。

「あ…」

アリスは頭をかきながら苦笑する。

「いまは精霊神化してないから…、ただのお姉さん…かな？」

その意味不明な言葉に、飛鳥は混乱した。

飛鳥にしてみればファリスと精霊神ファリスは同じ人物である。しかし、アリスたち異世界の住人の考え方はそうではない。精霊神化していないファリスはただの精霊族であり、精霊神とは別の存在なのだ。

それは、シヨウやアリスにも当てはまる。ノーマル状態ではアウインの勇者であるが、五精霊化することによって精霊界の神となるわけだ。

「なにそれ…」

飛鳥は、大汗をかきながら小首を傾げる。ただ、それほど気を使わなくてもいいことだけは理解できた。

「さあ飛鳥ちゃん、座って」

椅子を引き飛鳥を座らせる。確かに気のいいお姉さんな感じで、神様な雰囲気ではなかった。

ファリスはラルドが席に付いたのを見て自らも座る。が…、椅子は三つしかなくアリスの座る場所はどこにもない。

「あ、あの…」

困り顔で呟くアリスに、ファリスの静かな怒りが突き刺さる。アリスは、何かを察したのか、苦笑気味に呟いた。

「あゝ、今まで何の連絡もしなくて…ごめんなさい…。で…、ただいま…」

頭を下げながら、アリスは帰宅を告げた。

すると、ファリスは席を立ちアリスに近づく。

「アリス…。お帰りなさい…」

ファリスは、涙を浮べてアリスに抱きついた。そして、自ら座っていた席をアリスに譲り、別の部屋からもう一つの椅子を持つてくる。

「さて、アリスちゃんの反省も終わったことだし…。飛鳥ちゃんの歓迎パーティーをはじめましょう」

ファリスはそう宣言した。

「あ、あの！」

突然立ち上がった飛鳥は、皆に注目されて口籠る。

「その、どうしてわたしがここに呼ばれたんですか？」

飛鳥は、思い切って疑問を口にした。

「わたし、久しぶりにアリスと再会したばかりで……」

精霊神に見られている緊張が、飛鳥の言葉はそれ以上続かなかった。

ファリスとラルドがお互いの顔を向き合わせる。アリスがお世話になっているというのであれば、優子やセリアが招待されるべきなのだ。

その理由は、飛鳥にもなんとなく予想がついていた。飛鳥を追うように発生した魔獣化事件、魔族ガーティスの襲来、影ながら護衛していた光竜アクアマリン。全てが人間神というキーワードで繋がっている。だが、適当に流されるのではなく、はっきりとした答えを聞いておきたかったのだ。

飛鳥の問いにファリスはゆっくりと喋り始めた。

「本格的な戦いが始まる前に、一度会っておきたかったの……。人間神候補のあなたとね……」

その言葉にアリスは愕然とする。飛鳥は、予想通りの言葉に目を伏せた。

「人間神候補……正確には前人間神トパーズの生まれ変わり。あなたの身体のどこかには、これと同じ形をしたアザがあるはず……」

ファリスが手をかざすと、空中には樹の葉を象ったような紋様が現れる。飛鳥は、その紋様を見てハツとした。

「そのアザは、あなたが人間神の生まれ変わりである証しなのです……」

ファリスは、諭すように優しい口調で語った。

会話が途切れ静かな時が流れる。アリスなど、驚きのあまり口を大きく開いたまま固まっている。

真実を受け止めるのには時間がかかるだろう。しかし、全てを受け入れ人間神としての自覚を持ってもらわないことには、これから起こるであろう戦いに耐えることなど出来ない。ファリスは、飛鳥の反応を待ち続けた。

「あ、あの…」

飛鳥はファリスをジッと見つめ、複雑な表情で申し訳無さそうに呟いた。

「そんなアザ、どこにもないんですけど…」

苦笑しながら頭をかく飛鳥…。

予想外の答えに、今度はファリスとラルドが固まってしまった。

第17話 小林比奈

人間神の紋章が自分では見えない箇所にあると考えたファリスは、飛鳥の許可を得て別室で身体を調べさせてもらった。背中や脇の下はもちろん、足の裏や髪で隠れている頭皮など、考えられる箇所は全てである。

「どうだ？」

ラルドは、部屋から出てきたファリスに声をかけた。

ファリスは否定するように首を振る。一緒に出てきた飛鳥は、よほど恥ずかしい思いをしたのか、顔が真っ赤になっていた。

「シヨウくんが護衛を付けているから、てっきり飛鳥ちゃんが人間神だと思ったんだけど…」

当てが外れてファリスは項垂れた。

「だったら、なぜ飛鳥ちゃんが狙われているのかしら？」

ファリスは、紋章が無いことにホッとしている飛鳥を見つめた。

飛鳥は、人間族に珍しい精霊力属性であるが、シヨウのようにずば抜けた力があるわけでもない。人間神でないのなら狙われる理由など見当たらないのだ。

「ヤツらも、勘違いをしているのかもな…」

ラルドはそう呟く。

勘違いで命を狙われているのであれば堪ったものではない。飛鳥はその事実泣きたくなった。

「まゝ、あたしたちで飛鳥を護れば問題無いでしょ」

アリスは、一人だけ料理にぱくつきながら答える。

「アクアもいるわけだし…」

アリスの脳裏に、頼り無さそうに笑っているアクアマリンの姿が浮かんだ。

光竜アクアマリンの強さは疑いようもないが、まだまだ実戦不足のように思える。しかも、アリスたちが飛鳥に付きつきりというわ

けでもなく、頼りのシヨウは神出鬼没であるため昨晚のような攻撃を受けたら護りきれない可能性があるのだ。

すると、ファリスは悩みながらも結論を出す。

「わかりました。飛鳥ちゃんには、五精霊の一人を護衛に付けます」
その案にはラルドも頷いた。

アリスは風の、シヨウは光の五精霊である。他には、背に純白の翼を持つ天空族大地のルウー、自称シヨウの弟子で二刀流のソードマスター炎のシン、第三聖界にあるムーンストーン国の姫水のユウコ、この五人が精霊神ファリスの五精霊であった。

戦いが終わった後、シヨウとアリス以外の五精霊は精霊界の警護と異世界の監視にあたっているはずである。その人員を割いてまで護衛に付けるなどただ事ではない。

もちろん安全になるまでサンストーンに避難しているのが一番かもしれない。しかし、飛鳥にも人間界での生活があるためそういうわけにはいかない。そういった理由から、ファリスは精霊界最強の五精霊を護衛に付けることにしたのだ。

だが、飛鳥のためを思ったこの措置も、ガーティスの誤解を増長させるだけなことに、ファリスたちは気づいていなかった。

飛鳥が人間神候補でなかったとはいえアリスの友人には変わりない。その後、飛鳥はファリスの大歓迎を受けることになった。

人間界へ戻ったところには夕方となっており、飛鳥は慌てて夕食の準備をはじめ。忙しそうに動いている飛鳥を見かねて、料理に関してはプロ級の腕前を持つ優子が手伝いに加わった。

「で…、なんでこいつがここにいるの？」

アリスは、畳の上に平然と寝転んでいる魔獣リウムに視線を向ける。

アリスの声に反応して瞳を開けるリウムだったが、またすぐに寝入ってしまう。

リウムは、アリスたちがサンストーンへ出向いているとき、ふら

ふらと樹神社にやって来たらしい。何をするわけでもなく境内に寝転んでいたのだが、人目に付くのを恐れた優子が家の中へ連れてきてしまったのだ。

「自分が魔獣だというのを、わかってないんじゃないですか…」

アクアは、リウムの動きを警戒しながら呟いた。妙な動きをしないかずっと監視していたため、アクアは少し疲れ気味である。

「確か、リウム…だったよね。あんた、何しに来たの？」

アリスはリウムに近づき耳を引っぱる。リウムは低い唸り声を上げて威嚇するが、アリスは一切怯もうとしない。

「シヨウに何か言われて来たの？」

シヨウの名に反応したのか、リウムは身体を起こしてお座りをした。

お座り状態のリウムは、爪先から頭までがアリスの身長より高いため、見下ろすような体勢となる。鋭い視線でアリスを睨むが、魔獣本来の顔が恐いだけであって、別に怒っているわけではない。

「…マスタ…」

リウムは、アリスを見つめて軽くしっぽを振る。

「マスタ…に言われた…。あすか…お姉ちゃん…、まもる…」
得意そうにしっぽで畳をバシバシと叩いた。

「ちよ、ちよっと待ってください！」

それを聞いたアクアは、憤然と立ち上がってリウムに近づく。

「飛鳥さんの護衛はボクが任されています！」

信じられないといった顔でリウムに喰ってかかる。

「ま、まさかボクだけでは不十分だということですか！」

アクアは、涙目で小刻みに震え出した。

「……………」

リウムは、仔犬の姿をしたアクアをじつと睨む。何かを考えているのか、かなりの間がある。そして、簡潔に一言だけ呟いた。

「…うん」

リウムの口元が、少しにやついたように見えた。

真っ白な状態で固まるアクア。その衝撃は容易に想像できるだろう。

「そうね…、アクアよりは頼りになるかも」

アリスが、面白がって、さらに追い討ちをかける。

「あう~~~~」

滝のような涙を流すアクア。

そんなアクアを、飛鳥たちは苦笑しながら見ていた。

シヨウは光風町の西地区に来ていた。

同じ町内でも自宅から自然公園を挟んだ反対側に位置しており、シヨウもあまり来たことがない地区である。

「小林…、ここか」

シヨウは表札を見て呟く。留守なのか、窓には厚いカーテンがかけられていた。

リウムを金緑石に向かわせた後、シヨウはあることについて調べていた。それは、リウムの本体…、魔石に憑かれて魔獣となった者についてである。

人語を操るほどの知能を持ち他の魔獣とは比べられない強さのリウムがどのように誕生したのか…。それを調べることで、魔獣化解除についての手掛かりが見つかるかもしれないと考えていたのだ。

アクアからの情報によると、近くの公園で魔獣化した幼児がリウムの本体に間違いなさそうである。その子の名前は小林比奈。額に魔石が憑いて、ベリル研究所で治療を受けていた三歳の女の子であった。

比奈は初期の頃に魔獣化した被害者の一人である。今でこそ魔石憑きの素性は極秘とされているが、当初はマスコミにも大々的に取り上げられていた。もちろん名前などは公表されなかったが、額に魔石が憑いている比奈のことは周知の事実であり、かなり酷い差別を受けていたようである。

そんなことを考えると、ひっそり静まり返っている住居にも説明

がつく。

魔獣化事件に対する脅えや不安、怒りの矛先が、被害者であるはずの少女やその家族に向けられていたのだ。

シヨウは玄関にある呼鈴を押してみる。何の反応も返ってこないためもう一度呼鈴を押そうとすると、鍵が外れる音がして中から一人の女性が現れた。

「小林：亜紀さんですね」

二十代後半ぐらいの女性は警戒しながら頷く。シヨウは亜紀に近づき用件を伝えた。

「娘さんの…、比奈ちゃんについてお聞きしたいことがあります」

シヨウがさらに歩み寄ろうとすると、亜紀は拒絶した態度を取る。亜紀は哀しそうな表情でシヨウを見た。

「帰ってください…。比奈は何も悪くない、比奈の所為じゃない！」
ヒステリックに叫び、ガタガタと震え出したかと思うと、その場にしゃがみ込んでしまう。

その瞬間、亜紀を中心に魔力が発生した。魔力は、亜紀の感情に反応するようにどんどん増大する。シヨウが集中すると、亜紀の右胸から魔力が溢れ出していた。

「魔獣化！」

シヨウは、魔石があるはずの右胸に、精霊力の照射を始めた。

魔石に蓄積された魔力を中和すれば魔獣化は阻止できる。だが、精霊力を照射する行為が、魔石に大きな変化をもたらした。

亜紀の衣服を突き破るように鋭い爪のような触手が飛び出す。苦痛に悶える亜紀は、衣服を手にして引き裂いた。あらわとなった胸には魔石が憑いており、その色は闇のような黒ではなく血のように真っ赤となっていた。それは、リウムの魔石と同じ色であった。

触手は肉片のように蠢く…。赤い魔石から魔力の粒子が溢れ出るのではなく、周りの体組織が盛り上がるように亜紀の身体を包み込む。

通常の魔獣化と異なる変化に、シヨウは驚きを隠せない。

「まさか、これがリウムの魔獣化！」
シヨウは、そう直感するのだった。

第18話 リウム誕生

ベリル研究所で治療を終えた比奈を連れて、亜紀は光風町の自宅へと帰宅した。

このところ魔力の蓄積が早まっている気がする。つい十日前にも治療を受けたばかりなのだ。いずれこの治療法では魔獣化の進行を止められなくなる…。そんな不安が亜紀の心を苦しめていた。

比奈の頭には包帯が巻かれている。べつに怪我をしているわけではなく額に憑いた魔石を隠すためであった。しかし、異様な出っ張りや包帯に隠された魔石の存在を感じさせるものである。亜紀は比奈を幼稚園にもやらず自宅に軟禁し、治療へ向かうときしか外に出さなかった。

だが、何にでも興味を示す年頃の比奈が、おとなしくしているはずもない。その日、亜紀が目を離れた僅かな隙に、比奈は外へ抜け出してしまった。

比奈は自宅から少し離れた公園にいた。

魔石憑きである比奈に近づく者はいなかったが、遠巻きに見る人々の視線は冷ややかなものである。無邪気にはしゃいでいた比奈も、異様な雰囲気を感じ取り呆然と立ち尽くしてしまった。

「帰れよ…」

一人の少年が比奈に小石を投げる。

当たりはしなかったが、地面を掠める小石に比奈は驚く。子どもを連れた大人もいたが、その行為を咎める者は一人もない。

「死んじゃえばいいんだ」

心無い言葉が比奈に浴びせかけられる。

別の少年が後ろから近づき、比奈をおもいつき突き飛ばす。比奈は前屈みに倒れ込み、とうとう泣き出してしまった。

慌てた亜紀が駆け寄って比奈を抱き起こす。亜紀は、泣きじゃく

る比奈を抱きしめた。

また一つ小石が飛んでくる。今度は亜紀の腕を掠めた。

「魔獣は出て行け！」

少年が怒鳴りつける。すると、遊んでいた子どもたちが一斉に汚い言葉で叫び出した。

ざわめきが比奈を包み込む。一人一人が何を言っているのか聞き取れないほどざわめきが大きくなる。この瞬間、魔獣化事件への恐怖や憎しみが、比奈一人に集中してしまった。

どくん！

比奈の身体が大きく脈打つ。

「ひ、比奈……」

亜紀が異変に気づき声をかけると、比奈は身体を振るわせ叫びはじめた。

「比奈！」

必死で押さえ込もうとするが、暴れるように亜紀の腕から逃れる。そして変化は始まった……。

包帯を突き破り、爪のような触手がいくつも伸びる。触手は比奈の身体に突き刺さり、まるで生物のように蠢く。闇色をしていたはずの魔石は血のように真っ赤となり、触手の間を埋めるように肉片が溢れ出す。

肉塊となった比奈は徐々に獣の形となり、漆黒の体毛に覆われた巨大な狼型魔獣となった。

公園内はパニックとなり、人々は我先にと逃げ惑う。

「があがあああー……！」

魔獣は雄叫びを上げ、石を投げつけた少年を睨みつける。素早く逃道に立ち塞がり、震える少年に向って唸りながら呟いた。

「……死……ね……」

それは、先程まで比奈に向けられていた言葉であった。

魔獣が少年に牙を突き立てる。だがその牙は、少年ではなく庇うように飛び込んできた亜紀に突き刺さっていた。

「うつ…、比奈…」

亜紀の顔が苦痛に歪む。魔獣は、慌てて牙を外した。

「お… かあさん…」

魔獣は、自分がやってしまった行動に愕然とする。その場に倒れ込む亜紀を見て、逃げるように姿を消してしまった。

魔獣の去った方向を見て涙する亜紀。傷は浅いものであったが、心に受けた衝撃は大きい。

亜紀に残されたのは、右胸に光る真っ黒な魔石だけであった…。

亜紀はゆつくりと目を覚ました。

はつきりしない頭で何が起こったのかを理解するには時間がかかる。辺りを見回すと、どうやら居間のソファーに寝ているようであった。

身体にはマントのようなものが被されている。亜紀は、マントを手で身体を起こした。

「すみません、勝手に上がらせてもらいました…」

そのとき、亜紀は居間に自分以外の誰かがいることに気づく。見ると、そこにはSPINEELの優子に似た美少女が立っていた。

「あなたは確か…」

亜紀は、それが意識を失う前に訪ねて来た少女であることを思い出す。

「オレは如月翔といいます」

美少女…いや、美少年はにっこりと微笑んだ。

「え！ 男の子…」

亜紀は、驚きと申し訳なさで口を押さえる。引きつった笑顔を見せるシヨウが、自分の女顔を気にしていることは言うまでもない。

気を取りなおして、シヨウは亜紀に用件を伝える。

「リウムの…、比奈ちゃんの魔獣化についてお聞きしたかったんですが…」

シヨウは左手を亜紀に突き出す。なんと掌には、真っ赤な石が憑

いていた。

「おかげで、いいサンプルが手に入りました」

シヨウは笑っているが、それはどう見ても魔石であった。

はっとした亜紀は、手にしたマントを取り、自分の右胸を確認する。憑いていたはずの魔石は、跡形も無く消えていた。

「いったい…、どうして…」

魔石に憑かれたら、絶対に取れないはずである。亜紀は信じられないといった声を上げた。

驚いた亜紀はシヨウを見つめる。すると、シヨウは亜紀から視線を逸らし、どこか照れているようにしていた。亜紀が再び胸元に視線を戻すと、引き裂いたブラウスの隙間から胸が丸見え状態であった。

「あ、あ…」

亜紀は納得した声を上げる。別に恥ずかしがる必要もないが、落ち着いて話をするためにも、亜紀は着替えることにした。

「魔獣化した比奈ちゃん…魔獣リウムは、いまオレの知り合いの家にいます…」

シヨウは、これまでの経過を簡潔に伝えた。

シヨウの目的は、特殊な魔獣化をしたリウムの解除法を見つけること。そのため魔獣化に至った状況を聞きに来たわけだが、偶然にも同じと思われる魔獣化に出くわした。

亜紀の魔獣化が止められないと判断したシヨウは、精霊力の照射をやめて魔力を高めた。魔石は、より強い魔力の持ち主を選ぶ。シヨウに反応した魔石は、左手にへばり憑いた。

魔石から伸びる触手が完全に亜紀から離れたことを確認したシヨウは、絶妙なバランスの精霊力で状態を保ちながら魔獣化を押さえ込む。それは、強大な精霊力と魔力を同時に操れるシヨウだからこそこできる芸当であった。

魔石が手に憑いたことにより、シヨウにも臃げながらリウムの魔

獣化についてわかってきた。

魔獣化が始まる切っ掛けは、ずばり感情の高まりである。不安、怒り、憎しみ…、そんな感情に反応して魔石の活動が始まった。そして、魔獣化を阻止するために行なった精霊力の照射が原因となり、通常の魔獣化では起こりえない特殊な反応を示した。

もし他の魔石が同じ性質を持っているとするなら、治療のために行なっている精霊力の照射は危険な行為なのかもしれない。ベリル研究所で治療を受けた魔石憑きが、何らかの感情によって特殊な魔獣となってしまう可能性があるのだ。

シヨウの脳裏に、大勢のリウムたちが一齐にガーティスへ噛み付く場面が浮かぶ。横一列に並んだリウムたちが同時に大質量のレーザーを放つと、直撃をくらったガーティスは消し炭となって風に吹き飛ばされる…。そんな想像をして苦笑するシヨウだったが、現実となれば己に降りかかる問題かもしれない。

もちろん治療を施さなければ確実に魔獣化を起こす。シヨウの仮説が正しいとするなら、これまでの魔獣化事件とは比べものにならない騒ぎが起こることになるだろう。

「あの…、あなたなら比奈の魔石を取ることができるとすよね…」
亜紀は、考え込むシヨウをじっと見つめた。自分の魔石を取り除いてくれたシヨウにならそれが出来る。亜紀がそう期待するのも無理はない。

しかし、シヨウの反応は、はつきりしないものであった。

「魔石については…、もう少し調べる必要があります」

途端に亜紀の表情が曇る。それを見たシヨウは、亜紀を安心させようと微笑んだ。

「大丈夫ですよ。より確実に比奈ちゃんから魔石を取り除く方法を調べるだけです。この魔石を使ってね」

シヨウが左手をかざすと、魔石から魔力の粒子が溢れ出し、肘から先が魔獣化する。だが、次の瞬間には元の状態へと戻っていた。完全に魔石をコントロールしているシヨウに、亜紀は驚きを隠せ

ない。

「いったい…あなたは何者ですか？」

亜紀はシヨウを見つめる。

シヨウは、少しでも考える素振りを見せて呟いた。

「神さまの使い…ってことにしといてくださいっ」

につこりと微笑んだシヨウに、亜紀は年甲斐もなくどきどきしてしまった。

第19話 天空族の少女

光風町では、夜になると魔獣を恐れて出歩く者が少なくなる。まるで誰も住んでいない街のように静まり返るのだ。

「これも魔獣化事件の影響か…」

シヨウは、自宅への帰り道、何気なく夜空を眺めた。

雲一つ無い満天の星空。シヨウは立ち止まり、知っている星座を見つけて微笑む。そのとき、視界の端を白い塊りが横切ったように感じた。

一瞬であつたが、何かが高速で飛んでいったのは間違いない。シヨウは、その影を追うように走り出していた。

最初はアクアから聞いていた鳥型の魔獣と考えたが、それにしても魔力がまったく感じられない。シヨウは正体を確かめるべく、迷わず自然公園の中に飛び込んだ。

「あ…、お兄ちゃん」

そこでシヨウが見たものは、公園の水銀灯に照らされている優子の姿であつた。

緊張が一気に解け、ため息をつくシヨウ…。優子は、にこにこ顔で駆け寄ってきた。

「わたしね、お兄ちゃんを迎えに来たんだ〜」

そう言つて、優子はシヨウに腕を絡ませる。

「お兄ちゃん、また黙つてどっか行く気だつたでしょ〜」

優子は頬を膨らませ、可愛く怒つてみせた。

腕にしがみ付き身体を寄せてくる優子を、シヨウは呆れ顔で見つめる。

「で…、いつ人間界へ来たんだ？」

シヨウの言葉に驚く優子…。だが、すぐに微笑んでシヨウから距離を取った。

「あら…、気づかれました？」

優子は後ろで手を組み、少し戯けたしぐさをする。

「気づくだろ、普通……」

シヨウは、頭をかきながら苦笑する。

「自信、あったのですが……」

優子は微笑みながら目を瞑る。すると、髪が金色となり、背中から一对の純白な翼が現われた。顔は優子のままだが、雰囲気ガラリと変わり、まるで天使を思わせる姿となった。

「お久しぶりです。シヨウ……」

天使の姿をした優子は、優雅に礼をする。

「ああ、久しぶりだな。ルウー……」

シヨウも嬉しそうであった。

ルウーは、シヨウと同じ精霊神ファリスの五精霊であり、翼を持つ天空族の少女である。その強さは、精霊界最強とされるシヨウにも引けを取らない。

とはいっても、ルウーは好戦的な天空族に拘わらず、やたら平和主義である。それは、戦いの最中、敵である魔族に争いの虚しさを説くほど徹底していた。大魔王ザーヴァに説教をはじめたときは、さすがのシヨウも開いた口が塞がらなかったほどだ。

「いま……何か失礼なことをお考えになりましたか？」

思い出したように苦笑するシヨウを見て、ルウーはむっとする。

普段は天然気味なルウーだが、こういった鋭さは相変わらずであった。

「ところで、何をしに人間界へ来たんだ？」

シヨウは話題をはぐらかし、そんな疑問を口にした。

少し躊躇ったルウーは、シヨウであれば問題無いと考え、その理由を喋り始めた。

「ファリスさまから、樹神飛鳥さまを護衛するよう承りました」

ルウーは、シヨウの表情を窺うように見つめる。シヨウは、なぜ護衛が必要なのか不思議そうな顔をしていた。

「どうやら、飛鳥さまは人間界の神と勘違いされており、命を狙わ

れているようなのです」

ルウーが手をかざすと、空中に樹の葉のような紋様が浮かび上がる。

「これは人間神の紋章。人間神さまのお身体には、これと同じ紋章があるそうです…」

真意を探るため、ルウーはあえてシヨウの行動について問わなかった。

「なるほどな、飛鳥は人間神に間違えられていたのか」

シヨウは、初めて聞いたことのように感心する。そして、不意に自分の右手を見た。

「で、これが人間神の紋章と…」

甲にあるアウインの紋章の傍らには、ルウーが見せたのと同じような小さな紋様が浮かび上がっていた。

「なっ！」

ルウーは、その事実に驚く。が…、すぐに納得をした。

「シヨウ…。あなた、何でもありですな…」

ルウーは、呆れるように微笑んだ。

シヨウが人間神であつても不思議ではない。いや、むしろ当然と思えた。

ルウーたちの神とは、人間界のように信仰対象で姿が見えない存在ではない。実際に存在し、聖界を見守る者のことである。

精霊界を例えにすると、精霊神とは並外れた力を持つ者とされていた。そのため、外界から精霊界を護る職に就くファリスが神とされ、彼女の守護騎士である五精霊も神ということになっている。もちろん、強さだけでは精霊神といえないのだが…。

シヨウは、精霊界でも五本の指に入る強さである。当然、人間界では最強であろう。正義感も強く、すべてにおいて人間神に相応しいと思われるのだ。

「人間神の紋章といつても、オレのは第二候補のものだけだな」

シヨウは小さな紋章を見て呟く。

「もし、第一候補に何かあれば、その瞬間オレが人間神となる…」
突然、シヨウは拳を握り締め、腕を振るわせる。

「そんな面倒なことやってられるか？ 第一候補が誰なのかは知らないが、なんとしてもそいつに押し付ける！」

そう言い切るシヨウを、ルウーは呆れ顔で見つめた。

「あなたって人は…」

ルウーがくすくすと笑い出す。

「変わっていませんね♪」

シヨウは三年前と少しも変わっていないようだった。

「ほっとけ…」

むっとするシヨウ。

「とにかく、その第一候補を見つけること。そして…、魔獣化事件の真相を探る。それがオレの目的だ」

シヨウは、真剣な表情でルウーを見つめた。

「事件は人間神候補を見つけるために起こっているのではないというのですか？」

ルウーは、ファリスから聞いていた内容と異なることに驚愕する。

「ああ、違うな…。人間神を見つけるだけなら、わざわざ魔石をまく必要もない」

シヨウは、ゆっくりと言葉を選ぶ。

「まるで、何か実験しているような…、そう思えるんだ」

シヨウがこの仮説を話すのは、ルウーが初めてである。それほど、ルウーには絶対的な信頼を寄せていた。

「魔獣化事件の真相…ですか…」

ルウーは手を頬にあて考え込む。

「いったい、どうしてなのでしょうね」

真剣に質問するルウーに、シヨウは頭を押さえながら唸る。

「おまえ…、話聞いてたか？」

それを確かめるのがシヨウの目的なのだ。

しかし、その答えはすぐに判明することとなる。

「ジユエルナイトの一人、トルマリン復活のためですよ…」

突然、そんな声が聞こえてきたのだ。

シヨウは虚空から聖剣クリソベリルを取り出す。ルウーも、身長以上の長さで身体が隠れるような広い刃をした大剣を構え、戦闘態勢を取った。

「何者です…」

全く気配を感じられないことにルウーは驚く。視力だけに頼らず生体波長を感じて戦う彼女たちは、たとえ熟睡していたとしても相手の接近を感知できる。声が聞こえる距離にいて、相手に気づかないなどありえないのだ。

「この声…、ガーティスか…」

シヨウは、クリソベリルを握る手が汗ばむのを感じた。

リウムと戦ったときもガーティスの位置は把握できていたが、今はその存在すら感じられない。

必死で気配を探ろうとしていると、一瞬だけ視界が揺れてシヨウたちはただっ広い岩肌をした荒野に立っていた。苦しみ出すルウーを見て、シヨウは慌てて精霊力のフィールドを張る。

「空間転移…。魔界…なのか？」

シヨウが驚くのも無理はない。そこは、高密度の魔力が漂う大地だったのだ。

しかし、通常空間にこれほど魔力が密集する地など、シヨウが知る限り魔界にも存在しないはずだ。

「あ、ありがとうございます…」

苦しそうにしながらもルウーは微笑んだ。天空力属性のルウーにとって、大量の魔力を浴びることは死を意味する。もちろん通常レベルの魔力なら問題なく活動できるが、このように密集すると身動きが取れなくなってしまい、命を落してしまうのだ。

シヨウが精霊力を張りながら辺りを見回すと、そこかしこに黒いガラス質の石が転がっていた。

「ここは魔石の故郷ともいえる地ですよ…」

発生した闇の霧からガーティスが姿を現す。

透明なピンク色の宝石を胸に憑けたガーティスは、大魔王ザーヴアをも超える威圧感でシヨウたちを睨みつけた。

変貌したガーティスを前にシヨウの身体は震え出す。過去に感じたことのない絶望感が押しよせてくる。

「くくくつ、恐怖に声も出ませんか？」

ガーティスの瘡にさわる笑い声が響く。

「トルマリンの力を手に入れたこのガーティスさまが、あなたがたに死を与えます…」

ガーティスが剛剣を一振りすると、巨大な衝撃が発生し、大地の一部が消し飛んだ。

「ふふつ、ただのお笑いキャラじゃなかったわけだな」

シヨウがアウインの紋章を胸の位置に構える。シヨウからは先程までの脅えた表情は消え、どこか嬉しそうな笑みを浮べていた。

第20話 精霊神ファリスの五精霊

「精霊神ファリスさまの五精霊の一人、光のシヨウ！」

シヨウが叫ぶと同時に場の精霊力が高まる。五精霊化したシヨウは、聖剣クリソベリルを構え、ガーティスに向き合った。

「わたくしも戦います…」

シヨウの後ろでルウーが立ち上がる。強大な光の精霊力により、ルウーは動けるほど回復していた。

「あの存在は…危険過ぎます…」

ガーティスの邪悪性を感じたのか、ルウーがいつになくやる気になっている。

「シヨウ、わたくしの精霊水晶を！」

ルウーは大きく叫んだ。

シヨウは微笑みながら頷く。

「できればもう少し封印しておきたかったんだがな…」

すると、シヨウの周りに四つの宝石が現われた。宝石は上空へ舞い上がったかと思うと、三つが飛び去り一つが輝きながらルウーの身体に吸い込まれた。

「ルウー、力の加減に気をつける！ 封印していたことで、以前の数倍は力が上がっているはずだ！」

シヨウは、ガーティスから視線を逸らさずに伝える。ガーティスは、そんなシヨウたちを余裕の表情で見ていた。

ルウーは、確かめるようにゆっくりと精霊力を高めた。

「精霊神ファリスさまの五精霊の一人…」

額に精霊水晶が現われ、髪の色も薄翠色となる。

「大地のルウー！」

ルウーが叫ぶと、大地が震えるような衝撃が起こった。

五精霊となったルウーには天空族の象徴ともいえる純白の翼が消えている。そして、精霊水晶から精霊力が補給されることで、魔力

によって倒れることはなくなっていた。

「くつくつく…。前置きは終りましたか？」

五精霊二人を前にしても、ガーティスの余裕は変わらない。

「アウインのシヨウ…。苦しみながら死になさい…」

ガーティスが呟くと、その周りに漆黒の闇が広がる。肉眼で確認できるほど強力な魔力が、波打つように揺れていた。

「せ、精霊水晶！」

アリスは、飛んできた風の精霊水晶を見て驚く。精霊水晶は、アリスの身体に吸い込まれるように消えてしまった。

風の精霊水晶は、三年前の戦いにおいてアリスの手から離れたものである。それが突然戻ってくるとは、シヨウの身に何かが起こっているとした考えられなかった。

アリスは、シヨウの意識にチャネルを合わせようと試みる。が…、シヨウの方で意識を遮断しているのか依然として繋がらない。

「もぉ！ いったい何だつていうのよ！」

シヨウの安否がわからず、アリスは大いに苛立った。

昨晚の放送により、金緑石で魔獣化事件が発生していると世間に知られてしまった。

テレビでは特別報道が生まれ、今朝からどの局も魔獣化事件の話題を伝えている。ここまで騒ぎになった以上、アリスたちも事件に対して規制をかけることは出来なかった。

そんな報道を見ている最中に、精霊水晶が現れたのだ。

「アリス、落ち着きなさい…」

セリアが諭す。

「まだシヨウに何かあったって決まったわけじゃ…」

口ではそう言っているが、セリアも胸騒ぎが治まらない。

意味がわからず呆然としている優子と飛鳥…。そのとき、うつ伏せで寝ていたリウムがゆっくりと立ち上がった。

「マスター…危ない…」

リウムが唸ると闇の霧が発生する。リウムは、その霧に入ろうとした。

「待って！」

アリスがリウムを呼び止める。

「あたしも連れて行って……」

真剣な面持ちで見つめると、リウムは素直に頷いた。

かといって、ノーマルのまま魔力の霧に入れば命の保証は無い。

アリスは、左手にあるアウインの紋章をかざし、風の五精霊へと変化した。

五精霊化を目の当たりにして驚く飛鳥たち。

「アリスさま、ボクは飛鳥さんの護衛でここを離れられません。どうかシヨウさまをお願いします……」

仔犬型をしたアクアマリンは、とても悔しそうに呟いた。

アリスは無言でアクアの頭を撫でる。そして、リウムの背に跨り、首にしがみ付いた。

「リウム……お願い！」

アリスは、リウムに準備が出来たことを伝えた。

「……ん」

リウムは頷き、闇の霧に進入を始める。アリスたちは、まるで霧に飲み込まれるように、その場から姿を消した。

シヨウが両腕で防御すると、そこにガーティスの拳が叩き込まれる。骨が砕けるほどの衝撃を受けたシヨウは、後方へ吹き飛ばされ岩壁に激突する。シヨウはすぐさま身体を起こし、上空へ飛び上がる。直後に灼熱の術が炸裂し、真っ赤となった岩壁は溶岩のように流れ出した。

意識がシヨウに向いていのかを見て、ルウーは高速でガーティスに迫る。大剣を振り上げ斬激を繰り返そうとするが、ガーティスの強大な魔力に阻まれ接近することすら出来ない。

「ちっ！」

ルウーは距離を取り、大剣を地面に突き立てる。すると、地面から槍のように尖った無数の岩盤が飛び出し、ガーティスの頭上に降り注いだ。

ガーティスは微動だせず立ち尽くす。岩盤の槍はガーティスに触れることなく粉々に砕け散る。魔力の壁が身体を覆い、盾のように攻撃を防いでいるのだ。

力が強いほど盾は強度なものとなり、実力の差がある相手から攻撃を受けることはない。ショウたちの戦いは、いかに盾を無効化して相手に攻撃を与えるかなのだ。

だが、五精霊の力を付加した大剣ですら、ガーティスの魔力には通用しない。

「まるで、ザーヴァと戦ったときのようだ…」

ルウーが苦虫を噛みつぶしたように悔しがる。何らかの攻略法が無ければ、一切の攻撃が当たらない…。力ある者同士の戦いとは、そういうものであった。

「うおおー……！」

僅かな隙に、ショウが光の精霊力を高める。精霊力はショウの右手に集中し、眩いばかりの光を放つ。そして、手を腰の位置に構え、空手の正拳突きのように突き出した。

「ライトニング・ドラゴン！」

突き出した右手は爆発したよう輝き、増大した光の精霊力がガーティス目掛けて放たれた。

いくつもの精霊力が束となり、巨大な光となってガーティスに襲いかかる。それは、まるで生きている龍のようであった。

「ふっ…」

ガーティスは慌てる様子もなく瞳を瞑る。そこに光の龍が襲いかかった。

衝撃波、爆音、熱風…。大地が抉れ細かな岩石が降り注ぎ、一帯を覆い尽くす砂埃が発生して視界を遮った。

しかし、相手の生体波長を感じられるショウたちには、ガーティ

スが何のダメージも受けていないことがわかっていた。

「やれやれ…、こいつはまいったな」

呆れ口調で呟くシヨウ…。五精霊最大の技ですら、いまのガーテイスには効かない。シヨウたちは、八方塞がりにも陥ってしまった。

そのとき、一陣の風が舞い起こり、砂埃を晴らした。

クレーター状となった大地の中心に立つガーテイスは、ある一点を睨んでいる。もちろん、それにはシヨウたちも気づいていた。

シヨウたちが目にしたのは、魔獣リウムに跨りポーズを決めるアリスの姿であった。

「じゃっじゃ〜ん」 フアリスさまの五精霊、アリスちゃん登場」

自らの口で効果音をつけ、登場を演出するアリス。シヨウたちが呆れて口が塞がらなかったのは言うまでもない。

アリスはシヨウを確認して思わず涙を流しそうになるが、それを堪えてガーテイスを指差した。

「かゝたす！ あんた、こんなところにシヨウたちを連れ込んで、いったい何を企んでいるの！」

かっこよく叫ぶアリスだが、魔族の名前はガーテイスである。

「おやおや…。お笑い担当はお呼びじゃないですよ」

「な、なんですってー！」

激怒するアリスだったが、脅えたように後退るリウムの異変に気づいた。

「リウム、どうしたの？」

リウムは、耳を伏せしっぱを股下に隠す。その脅えようは、ただ事ではない。

「…とる…まりん…」

リウムは暴れるように首を振りガタガタと震え出した。

アリスは、リウムを落着かせようと首にしがみつく。狂ったように暴れるリウムに、アリスはたまらず地面へと投げ飛ばされてしまった。

「どうやらリウムさんは、過去の記憶を思い出しているようですね」
ガーティスは、リウムの様子にクスクスと笑い出す。

「ジュエルナイト、トルマリんに殺された前世での記憶を……」
にやついた顔でリウムを見つめた。

「あのさ……、一つ聞いていいか」

何を思ったのか、シヨウはガーティスに質問をする。

「さっきから言っているジュエルナイトって……、何なんだ？」

その問いに、ガーティスがずっこけた。

「トルマリンって宝石の名前だろ？」

シヨウは、腕を組み小首を傾げる。

「キサマ、伝説のジュエルナイトも知らんのか……！」

「そんなマイナーな騎士名は知らん！」

シヨウははつきりと言い切った。

そんな態度に、ガーティスは泣きそうな顔をする。まさか、アウインの勇者ともあるうものが、ジュエルナイトを知らないとは思わなかったのだ。

その間にも、ガーティスの胸に憑いたピンク色の宝石は輝きを増す。感情を糧に、さらなる変化が起きていることに、誰一人として気づいていなかった。

第21話 伝説のクリスタル

ジュエルナイトとは、聖界創造に携わったとされる十四人の騎士たちのことである。

時空、天空、精霊、竜（幻獣）、人間、魔、暗黒…。それぞれの属性に二人の騎士が存在し宝石名を名乗っていることから、現在では宝石騎士ジュエルナイトと呼ばれていた。

が、今回のストーリーにはあまり関係ないことなので、シヨウたちが知らなくてもまったく問題はなかったりする。ガーティスが親切にも解説しようとしたのだが、シヨウの叫びで中断されてしまった。

「何にしてもいいタイミングだ！ アリス…融合するぞ！」

アリスは一瞬驚いたが、変貌したガーティスの力を感じてその意図を理解する。脅えるリウムのことも心配だったが、アリスはシヨウに向かって滑空した。

シヨウとアリスが重なった瞬間、眩い光が発生する。空中にはアウインの紋章が輝き、それを中心に光と風の精霊力が高まった。肉眼で確認できるほど高まった二つの精霊力は、天へと螺旋状に伸びながら交わる。

爆風が起こり治まったとき、そこには一人の青年が立っていた。女性と見間違えるほどの顔立ちをした美しい青年。金色の長髪をなびかせ、背には天空族特有の翼がある。さらに両手の甲には、シヨウたちと同じアウインの紋章があった。

この姿こそシヨウとアリスの最強形態、アウインの勇者クリスタルなのだ。

「クリス…兄さま…」

ルウーの口からそんな言葉がこぼれた。

クリスタルはルウーを見つめる。

「クリスの意識は眠ったまま…。今のメインはオレだ」

クリスの姿をしたシヨウはそう答えた。

ほんの少しだけ落胆するルウーだったが、すぐにキリツとした表情に戻る。

「ふっ…。ならシヨウよ、あの魔族をさっさと殺すぞ！」

ルウーは、五精霊化によって天空族本来の気質が現われるのだ。

「いや…、ルウーはここから去れ。リウムなら空間を渡って人間界へ戻るはずだ」

アリスと融合したことにより、シヨウはそのことを確信していた。
「冗談！ このままオメオメと逃げ帰れっていうの！ それに、あなたたちだけを残して逃げることなんてできない…。あんな思いは二度とごめんだ！」

瞳に涙が浮かべるルウー。どうやら、三年前のことを思い出しているようだ。

『やれやれ…だね♪』

シヨウの頭にアリスの声が響く。

『ルウーが心配するのも無理ないよ。あんた、自分の命を軽く見すぎだもん』

アリスの声はシヨウにしか聞こえていなかった。

鋭い指摘にシヨウは苦笑する。

「大丈夫…。アリスも一緒なんだ、死ねるわけないだろ」

シヨウはルウーの頭に手をやる。

「それに、リウムの脅えようが気になる。ルウーはリウムを護ってやってくれないか…」

頬を赤らめたルウーは、照れたようにシヨウの手を払い除けた。

「わかった…。絶対に死ぬなよ…」

ルウーは睨むようにクリスタルの姿をしたシヨウを見つめるのだ。
「つた。」

「ク、クリスタルだと…」

ガーティスは、その様子を見て愕然としていた。

シヨウとアリスが勇者クリスタルの生まれ変わりであることは魔

界でも有名な話だ。だが、その二人が融合してクリスタル本人になるなど、非常識極まりないことなのだ。

しかし、目の前で起こった現象は事実である。光と風の精霊力を同時に操る天空族など、五千年前に存在したアウインの勇者クリスタルであるとは思えなかった。

「くつくつく…。奇数月十三月のジュエルナイト、クリスタル…」
ガーティスが不気味に微笑む。

「まさか、ジュエルナイトの力を持つ者同士の闘いになるうとは」
剛剣を握り直すガーティスには、先程までの余裕は消えていた。
クリスは、ルウーがリウムに駆け寄ったのを確認してから、ガーティスに向かい合った。両手には、宝石のような刀身をした二振りの聖剣クリソベリルが握られている。クリスがそれを重ね合わせると一本の大剣になった。

それは、光竜アレキサンドライトの精霊力が結晶化して出来たといわれる、聖剣クリソベリルの真の形であった。

一方、ルウーは初めて見る魔獣に唖然としていた。

「えーっと、リウム…だったな。ここから脱出するぞ」

ルウーは、トルマリンの気配に脅えているリウムの頭をそつと撫でた。

クリスとガーティスの激しい闘いによって大地は崩壊し始めている。早く脱出しないと、空間自体が消滅してしまう恐れがあった。

それほどジュエルナイト同士の闘いは激しいものなのだ。

「…ゆう…お姉ちゃん？」

リウムは、ゆっくりと顔を上げ、ルウーの匂いをかぐ。

「わたしの名はルウー。如月優子ではない」

ルウーは優子を知っていた。自分とそっくりな顔を持つ少女の話を、シヨウから聞いていたのだ。もちろん、直接の面識はないのだが…。

少し落ち着いてきたのか、リウムから脅えた様子が消えた。

「…るう…お姉ちゃん…」

リウムはしつぽを軽く振り、立ち上がってルゥーに顔を摺り寄せた。

「つて、ちょっと痛いな…」

ルゥーは、リウムの頬を掻きながら苦笑する。

「それより、わたしたちがここにいても邪魔になるだけだ。いったん退くぞ！」

己にも納得できていなかったが、ルゥーはショウの指示に従うことにした。

すると、リウムが牙を剥き出しに唸り出す。

「とるまりん…、殺す…」

リウムは、目に追えない速さで激しくぶつかり合う何かを睨んで呟いた。

「そんなヒマはないんだよ！」

ルゥーは、リウムの耳をつかんで引つ張る。リウムは、反抗することも出来ず、ルゥーに引きずられた。

そのとき、鬨いの余波で発生したプラズマが、超速でルゥーたちに迫ってきた。ルゥーは、リウムを護るため迷うことなく両手を広げる。プラズマはルゥーの身体に触れると激しく炸裂した。

鎧が砕け皮膚を焦がす。身体中から鮮血が飛び散り、ルゥーはその場に倒れ込んでしまった。

そんな様子を、リウムは呆然と見ていた。

「…るう…お姉ちゃん？」

鼻でルゥーの身体を揺らす、何の反応も無い。リウムはしばらく考えていたが、ルゥーを啞えて背中に乗せる。そして、闇の霧を発生させてその中に飛び込んだ。

その瞬間、閃光と衝撃が後方より襲ってくる。爆風に圧されながらもルゥーを落とすまいと踏ん張るリウム…。

「…マスタ…」

リウムは一度だけ振り返り、全力でその場を離れた。

それほど時間が経ってないにも関わらず、再び現われたリウムに驚く飛鳥たち。リウムの背中で意識を失っているルゥーを見て、さらに驚いた。

「ゆ、優子お？」

飛鳥は、優子とルゥーを交互に見て奇妙な声を上げるが、彼女の額にある精霊水晶を見てあることに気づいた。

「この人、わたしの護衛に就いてくれる…五精霊の…」

飛鳥はファリスの言葉を思い出していた。

「ひどい怪我をしてる…。セリア…お願い」

優子は、リウムの背中からルゥーを降ろして畳に寝かせる。セリアは、駆け寄って回復の精霊術を唱えはじめた。すると、みるみるうちに傷が消え、顔色も良くなった。

「う、ううん…」

ルゥーは、瞳を開けゆつくりと身体を起こし辺りを見回す。優子と目が合っただけで固まるが、額の汗を拭くようなしぐさをしてホッと息をついた。

「…なんだ、鏡か…」

もちろん、リウム以外の全員がずっとけた。

五精霊化を解き、天空族に戻ったルゥーを見てまたまた驚く飛鳥たち。その姿は、まるで天使のようなのだ。

「助けていただき、ありがとうございます。わたくし、ルゥーと申します」

ルゥーがにっこりと微笑むと、飛鳥たちもつられて微笑む。

「あなたが飛鳥さまですね。わたくし、精霊神ファリスさまより、あなたの護衛を言い使っております」

ぺこりとおじぎすると、飛鳥も慌てて頭を下げる。続いてルゥーは優子に向かい合う。

「優子…さまですね。お噂はかねがねシヨウより聞き及んでおります」

あたふたする優子を、微笑みながら見つめる。

「そして…、第二聖界カーネリアン。ユークレース国の第一王じよ…」

セリアがマツハの速さでルウーの口を塞ぐ。

「ごめん…。それ、内緒…」

セリアが苦笑しながら、ルウーにしか聞こえないような小声で呟いた。ルウーはそれを笑顔で了承した。

ルウーの前に、仔犬型をしたアクアマリンが座る。アクアは何かを期待するようにじっと待っている。

「まあ、かわいいワンちゃん♪」

ルウーはそんなアクアを抱き上げた。

「…もう、いいです」

アクアはがっかりしながら滝のような涙を流した。

「ところで、リウムさん…」

アクアは真顔に戻り問いかける。

「ショウさまやアリスさまは…、どうなったのですか？」

アクアは、リウムをジッと見つめた。

畳に伏せていたリウムは、そのままの姿勢で呟く。

「マスタ…、…死んだ…」

素っ気無くともないことを言うリウムに、飛鳥たちは言葉を失った。

慌てて説明を始めるルウーだったが、彼女にもショウたちの生死はわからない。その日、ショウとアリスが帰ってくることはなかった…。

第22話 ガーティスの陰謀

大地は真つ赤に燃え、至る所で爆発が起こっていた。

その様子を遥か上空で見下ろす人影がある。それは、重傷を負いながらも勝利に酔い痴れる、魔族ガーティスであった。

「ふふつ。アウインの勇者クリスタル、恐れるに足らず…」

闘いの激しさを物語るように、ガーティスの肩口は大きく裂け、衣服は血で真つ赤に染まっていた。

魔族であるが故、精霊力でつけられた傷は簡単に回復しない。ガーティスは、激痛をこらえながら傷口を押さえる。早めに治療しないと命に関わるのだ。

「うっ！」

そのとき、ガーティスは肩に違和感を覚えた。見ると無数の触手が蠢き、傷口を塞ごうとしている。

「あまり、気持ちの良いものではありませんね…」

蠢く触手に嫌悪を感じるが、そのおかげで痛みは消え、手に感覚が戻ってきた。

「くつくつく…。トルマリンの力とこの回復能力があれば、まさに無敵！」

ガーティスは思った以上の効果にほくそ笑んだ。

ガーティスは、以前から魔石や魔獣を研究していた。それは、古より伝わるトルマリンを復活させ、己の支配下に置くためである。

魔獣化事件を起こし、トルマリンと共に伝わったりウムを復活させたのもそんな実験からであった。

だが、シヨウの態度に激怒したガーティスは、自らトルマリンの宿主となる。元々は転生した人間神を見つけ出しトルマリンの宿主にする予定だったのだが、ジュエルナイトの力を手に入れた今となつてはこれ以上考えられない結果となつた。

最強の部下を持つより、己が最強となつたほうが良いに決まつて

いるからだ。

「飛鳥さんには、別の魔石に憑いてもらいましょう…」

何を思ったのか、ガーティスはそんなことを呟く。

「たとえばクズの魔石でも、人間神に憑けば少しはマシな魔獣ができるでしょうから…」

ガーティスはニタニタと微笑んだ。

しかし、それには大きな問題があった。精霊力属性の飛鳥に憑けるためには、成長した魔石…つまり第二形態の魔石が必要だったのだ。

現在、第二形態に成長しているのは、魔獣リウムとショウが回収した魔石のみ…。

「まずは、魔石の成長が必要ですね…」

逸早く第二形態の魔石を手に入れるには、今いる魔石憑きを成長させるのが一番である。ガーティスは、闇の霧を発生させて、人間界に向かうのだった。

樹神社へ繋がる森の入口には、例のごとく多数の報道関係者が詰め寄せていた。

今回の魔獣化事件は、SPINELを取材している最中に起こったため、誰もが飛鳥との関係を疑っていたのだ。

そんな状況で姿を見せれば大騒ぎになるのは目に見えている。そのため飛鳥は、本意ではあるが学園を休んでいた。

「そういえば、この時期って期末試験とかあるんじゃないの？」

優子は、昼食の後片付けを手伝いながら問いかける。

「あゝ、うちの学園は試験とか無いから」

飛鳥は明るく答えた。

病気でもないのに休むのは心苦しいが、魔獣化した友人のことも気になる。いま、ベリル研究所にセリアが向かっており、その報告も待ち遠しかった。

「…って、試験ならあんたの学校だってそうじゃない！」

ふとそんなことを思い出し、飛鳥は思わず叫んでしまう。優子たちは、再会してから一度も学校へ行った様子がなかったのだ。

「一応、校長先生には言つてあるけど…」

優子もさすがにまずいと感じているのか苦笑気味に答える。最悪、留年も考えられた。

光風町にいたころは、夜だけ警戒にあたつて、学校へはちゃんと通つていた。しかし、事件が金緑石に移つてからは、全く登校していないのも事実である。

「まゝ、この事件が一段落したら、報告がてら学校に行つてみるね」
」

そのとき、専用通信機の着信音が鳴り響いた。優子は、慌てて部屋に戻り通信機を取り出す。

この通信機は優子以外にアリスとセリアが持っている。主にベリル研究所と通信するもので、魔獣化事件専用のもの…。つまり、通信が入っているということは、魔獣化事件において緊急事態が発生している可能性があるのだ。

「はい、優子です」

優子が通信のスイッチを入れると、ベリル研究所にいるセリアの声が聞こえてきた。

『セリアです。優子…、落ち着いて聞いて』

セリアの声と一緒に、何か騒がしい人声が聞こえてくる。そして、衝撃の事実が伝えられた。

『この前保護された三人の魔石憑きが再び魔獣化、施設を破壊し逃走…。方向からみておそらくそちらに向かったと思われます』

セリアは、情報を簡潔に伝えた。

「…あの三人が魔獣化！」

優子は、つい大きな声で叫んでしまう。

「もしかして、リウムちゃんのような特殊な魔獣化なの？」

こんな昼間に魔獣化してしまうなど普通ではない。優子はリウムの変化を思い出していた。

「いいえ…。魔獣化が始まる前に強大な魔力を感じたわ。何者かが魔力を送り込み、強制的に魔獣化させたと考えるべきね…」

セリアと優子の考えは一致していた。かゝたす…正確にはガーティスなのだが、彼が今回の一件に関わっているのだ…。そうすると、ガーティスと闘っていたはずのシヨウとアリスの安否が気になる。

「お兄ちゃん…、アリス…」

話に聞くクリスタルが負けるはずないと安心していった優子だったが、こうなってくると心配で身体が震えてくる。

「わかった、こつちでも対策を考えるね。で…、セリアは戻ってこられそうなの？」

優子は、セリアの心配をする。

「大丈夫、みんなの救助が終ったら直ぐに向かうから」
セリアとの通信は、そこで途絶えた。

敷地内に植えられている樹にもたれながら、通信機のスイッチを切るセリア…。左腕は力無くぶら下がり、それを伝って血が地面に滴り落ちる。いや、身体の左半分が血だらけなのだ。

セリアは、苦しそうに左肩を押さえる。

「さて…、この怪我をなんとかして、さっさと応援に行きますか…」
セリアはよろけながら歩き出す。左腕の骨は、魔獣の攻撃を受け粉々に砕けていた。

手っ取り早く治療するには、回復の精霊術がある。

もちろんセリアも精霊術を使えるが、回復の術は本人には効かないといった制限があった。さらに、術で回復した傷は完全に治る代わりに治療前の数倍の激痛を伴い、自然治癒するのと同じ期間続く。また、回復の術は怪我を治すものであり、病気には効果がない。

そういった理由から回復の術を使う者は、常に命の危険が付きまとう冒険者くらいであった。

「あ…、血が足りないかも…」

景色が揺れ、身体感覚がなくなる。セリアは、意識が遠退くように倒れ込んだ。

「おっと…」

倒れようとしたセリアを何者かが受け止める。

「大丈夫かい？ お姫さま」

それは、人間界での拠点をベリル研究所に置く、魔族フォースであつた。

セリアは、青い顔でフォースを見る。

「誰に聞いたの…って、シヨウか…」

自問自答するセリア。意識が朦朧として、光風町を警戒していたはずのフォースが、なぜここにいるのかという疑問も浮ばなかった。「いま治療してやるから…」

フォースは、セリアを抱き支えながら腕に手をかざす。

「気持ちはいがたいけど、魔力の回復術はわたしたちには効かないのよ…」

フォースなら百も承知のはずであるが、そんなことを口にしてしまふほどセリアの思考は低下していた。

しかし、予想に反してフォースの手には精霊力が集まり、みるみるセリアの傷を癒し始めた。セリアは驚きに目を丸くする。

得意げな笑みを見せるフォース。

「オレも、少しだけなら精霊力を扱えるんだよ。ちなみに、属性は闇な」

その言葉に、セリアはさらに驚いた。

精霊力には四大属性として地・水・火・風があり、さらなる上級属性として光がある。そして、あまり知られていないことだが、光と対称な精霊力闇があつた。

だが、闇の精霊力は光以上に特異なもので、長い精霊界の歴史の中でも闇の精霊力を持つ者は現れていない。一部に存在だけが知られている幻の属性であり、精霊神の守護騎士にも闇の騎士は数えられていないほどなのだ。

「これでもあんならの仲間のつもりだからな…。どうだ、少しは信用したか？」

「…あなたを信用してないのは、アリスだけだと思うけど」

セリアは、フォースが悪事を企んで人間界に潜り込んだと大騒ぎしていたアリスを思い出して微笑む。フォースも同じことを考えたのか苦笑していた。

「うーん、しばらく我慢してくれよな…」

精霊力のコントロールにフォースは四苦八苦する。

ショウたちなら数分で回復できる傷も、慣れないフォースが唱えるとかかなりの時間がかかってしまう。そんなフォースに身を任せて、セリアは微笑みながら瞳を瞑った。

第23話 黒き魔獣、白き聖獣

白鳳学園では、通常通りの授業が行われていた。

しかし、一昨日に起こった魔獣化事件を恐れて休みを取る生徒も多く、登校したとしても数多くの噂が飛び交う中、授業に集中することは困難であった。

そして、高等部の騒ぎは尋常ではなかった。放送された映像の中に、高等部の生徒が二人もいて、その一人が魔獣化を起こしたのだ。校門には引き続き報道関係者が押し寄せ、少しでも多くの情報を入手しようと待ち構えている。その様子は、先週のようなお祭り騒ぎではなく、重大事件の発生を重く受け止めた深刻な雰囲気であった。

一週間ぶりに登校したかおりは、憂鬱な面持ちで体育の授業に出ていた。陸上部ということもあり身体を動かすことは好きな方だが、魔獣化事件が気になってそれどころではなかった。

準備運動を終えた生徒たちがグラウンドに座り込み魔獣についての噂話を始める。すると、かおりに憑いている魔石がジリジリと痛み出した。

それほどではないが、昨日より今日と痛みの感覚が増していた。まるで、魔獣化事件に恐怖する人々の心を、魔石が感じ取っているかのように…。

気分が悪そうに頂垂れるかおりを、誰一人気遣う者はいなかった。少し離れた場所に座り、かおりの方を横目で窺いながらひそひそと囁く。行方不明だったかおりが魔獣化事件の発生と同時に現われたことで、みんな彼女が魔石憑きではないかと疑っていた。

それを感じてか、かおりも必要以上に友人たちと喋ろうとしなかった。ある意味、魔石に憑かれたとわかった時点で覚悟していたことなのだ。

かおりは、体育座りの状態で、顔を腕に埋める。

今は誰とも関わりたくない、全てを拒絶し誰もいない世界へ行きたい……。そんな願いが叶うはずもなく、左肩に走る痛みがかおりを絶望へと追いやっていた。

「え……なに……。きゃああー！ー！ー！」

突然、女生徒が悲鳴を上げる。かおりが顔を上げると、グラウンドの中央に三つの黒い霧が見えた。

霧の中から巨大な魔獣が姿を見せる。それは、一昨日に現われた二体の獣人型魔獣と一体の魔鳥型魔獣だった。

「ぐあがああ！」

獣人型魔獣が雄叫びを上げると、途端に場の魔力濃度が跳ね上がる。

魔獣を見てパニックとなった女生徒たちは、校舎に逃げ込もうと走り出す。だが、空に飛び上がった魔鳥が回り込み、奇声を上げて生徒たちを威嚇した。

魔鳥は鉤爪を使い、少女を一人掴み上げる。

「いやああー！ー！ー！」

少女は恐怖に泣き叫んだ。

魔鳥は、少女を掴んだまま舞い上がり、遙か上空でその爪を放す。支えを失った少女は、なすすべなく落下する。魔鳥は旋回しながらスピードを上げ、少女に鋭い嘴を叩き込もうと襲いかかった。

その騒ぎは隣りの高等部でも確認できた。巨大な魔鳥が上空へと舞いあがり、何かを落としたかと思うと、今度はそれに襲いかかるうとしているのだ。

校門にいた取材スタッフがカメラをズームアップすると、上空から落とされたのは人間であることがわかる。そんな衝撃的な映像が、電波に乗り全国へ放送された。

「があああつ、ががああー！ー！」

突然、奇妙な叫び声が辺りに響く。その瞬間、巨大な黒い物体が猛スピードで魔鳥にぶつかった。魔鳥は、吹き飛ばされて中等部の

校舎に激突する。

カメラが捉えたその姿は、闇の霧を足場にして空中に浮ぶ、黒き魔獣リウムであった。驚いたことに、その背にはSPINELの優子が乗っている。

「リウムちゃん、お願い！」

優子が叫ぶと、足元の霧が消える。リウムはそのまま落下し、気を失っている少女の下に潜り込んだ。

「よつと…」

優子は少女を無事受け止める。その衝撃で意識を取り戻した少女は、パニックを起こし暴れだす。

「ちよつと、落ち着いて！」

優子は、暴れる少女を落下しないように抱きしめた。リウムがゆっくりと地面に降り立つ。

「…着いた」

お座りをして後ろを向き、背中の優子に声をかける。優子は少女を抱きかかえ、リウムの背中から降りた。

「もう大丈夫だから…」

優しく微笑みながら、少女の頭を撫でた。

凶暴そうな魔獣とSPINELの優子に助けられたことで、少女とはかなり混乱していた。それは他の女生徒も同じことで、そんな光景を呆然と眺めていた。

「さあ、なにやってるの。早く逃げなさい！」

優子の声で我に返った女生徒たちは、魔鳥を避けるように校門へと走り出す。だが、一体の魔獣が逃道を塞いでいた。

校門では、駆けつけた報道陣がそんな光景を撮影している。すると、報道陣を跳び越えて真っ白い獣が魔獣に飛びかかった。

白い獣は魔獣の腕に噛み付き、グラウンド中央に投げ飛ばす。もちろんその獣とは、光竜型をしたアクアマリンである。そして、背中には飛鳥が乗っていた。

「あ、飛鳥せんぱい！」

かおりが驚きの声を上げる。

「かおりちゃん、無事？」

飛鳥はアクアから飛び降りてかおりに近づく。

アクアは獣人の動きに警戒しながら叫んだ。

「飛鳥さん、少し離れてください。フィールドを張ります！」

その瞬間、アクアから青白い光が半球のように広がり、辺りを包みこんだ。

事件を報道していた人々は、突然機材が一切反応しなくなったことに慌てふためく。

「えっ、カメラ動かないんですか！」

レポートしていた吉田は、この状況を伝えられないことに苛立ちの声を上げる。

「やっぱり…、優子ちゃん」

吉田は、改めてグラウンドに目をやった。

簡易な鎧を纏い、剣を握っている少女は、どう見てもSPINELのリーダー優子なのだ。さらに、優子を護るように二体の魔獣と戦う狼型魔獣の存在…。また、SPINELの新メンバー飛鳥と、言葉を喋る真っ白な獣にも驚かされる。

「いったい、どうなってるのよ…」

想像を超える出来事の数々に、吉田は頭を抱えてしまった。

優子は、緊張した表情で剣を握っていた。

「わたし一人じゃ、どうにもならないよぉ」

これまでも魔獣と戦ってきた優子だったが、戦闘に関してはまだまだ初心者である。リウムが護ってくれているとはいえ、かなり危険な状態に違いなかった。

「でも…、なんとかしなきゃ！」

優子は、気合を入れ直し、魔獣との間合いをはかった。

一方、魔鳥と戦うアクアは、その高速な動きに手を焼いていた。飛鳥たちを護りながらの戦いであるため、アクア本来の力が出せない。

いのだ。

すると、上空に魔鳥とは別の影が現われる。

「お手伝いいたしましょうか？」

アクアが見上げると、そこには今朝になって姿を消していた天空族ルゥーが浮んでいた。

「ルゥーさま！」

アクアは、思わずしつぱを振って喜んでしまう。ルゥーは、にっこり微笑んで巨大な大剣を取り出した。

翼を持つ者たちによる空中戦が始まった。さすがはショウウに匹敵する強さのルゥーである。徐々に魔鳥を追い詰め、身体を構成している魔力を確実に削っていった。

女生徒たちは、天使の姿をした優子そっくりの少女に驚く。そして、有利な戦いの進行に、歓喜の声を上げて応援しはじめた。校舎内で脅えながら隠れていた生徒たちも、窓際に集まり騒ぎ出す。そんな様子を見て、アクアは呆れながらため息をついた。

「なにを考えているんでしょうか……。この間に避難を……うっ！」

突然、下腹に激痛が走る。アクアが下を向くと、足元に闇の霧が広がり、そこから伸びた剛剣が腹部に突き刺さっていた。

突き上げられた剛剣は、一気に振り下ろされアクアの腹部を引裂く。

「アクアちゃん！」

飛鳥は、地面に転がり悶え苦しむアクアに駆け寄った。

アクアは激痛にもがきながらも、精霊力を高める。だが、体内に入った魔力は予想以上に強力で、アクアの生命力をも蝕み始めていた。

飛鳥が顔を上げると、アクアの血を全身に浴びて真っ赤に染まった魔族ガーティスがにやにやと微笑んでいた。

「くつくつく……。飛鳥さん、またお会いしましたね……」

相変わらず癪にさわる笑い方をするガーティス……。その胸には、ピンク色に輝く魔石が憑いていた。

観戦を決め込んでいた生徒たちも、その惨劇を前に目が覚める。

今まさに、魔獣化事件が発生し、自分の命が危険にさらされているのだ。校舎にいた生徒たちは、慌てて反対側の窓から裏庭に飛び出し、学校の敷地内から逃げ出すために走り出した。

「おやおや……。そんなに慌てると、転んで怪我をしますよ」

ガーティスは微笑みながら掌を上に向ける。魔力が肉眼で確認できるほど高まり、その中から無数の魔石が飛び出した。

魔石は街中に散らばり、いくつかは逃げ惑う生徒の魔力を感じてへばり憑いた。

「がああー！ー！」

魔石に憑かれた生徒たちはすぐに苦しみ出し魔獣化を始める。トルマリンの力を入れたガーティスは、魔石を創り出すことが可能となり、魔獣化をも自由に操れるようになっていたのだ。

第24話 第二形態の魔獣化

「ぐふっ、げぼげぼっ！」

大量の血液を吐き出すアクア…。その苦しみ様はただ事ではない。飛鳥は必死に傷口を押さえようとするが、それで出血が止まるはずもなかった。

「無駄ですよ。魔力を中和しない限り、その光竜は死を待つばかりです」

アクアの苦しむ姿を、ガーティスはニタニタと見学している。

「アクアちゃん、しつかり！」

飛鳥は、血まみれになりながらも、傷口を押さえる。

「お願い…。誰かなんとかしてー！ー！」

飛鳥の悲痛な叫びが響く。そのとき、飛鳥の中で何かが弾けた。

「えっ…」

胸の奥底から力が湧き上がってくる。身体全体が淡く光を放ち、意識を集中すると手が熱くなった。すると、アクアから苦痛の表情が消え、呼吸も落ち着いてきた。

その光景に、ガーティスは愕然とする。

「そうか…。人間神の力か！」

ガーティスは、魔力をも消し去るほどの回復術を使うことのできる飛鳥が間違いなく人間神であると確信した。

回復したアクアも驚きの表情で飛鳥を見る。魔力で付けられた傷は、通常の精霊術では治せないはず。しかし、激痛は残るものの、魔力は完全に消えていたのだ。

自分の手を見つめて呆然とする飛鳥。

「うそ…。でしょ…」

精霊術など、聞いたことはあっても使い方なんてわからない。まさに、自分でも信じられないことだった。

「くくっ、ならさっそく準備に取りかかりましょう…」

ガーティスは闇の霧を発生させ、その中に姿を消す。次に現われたのは、震えながら左肩を押さえているかおりの真後ろであった。

「さあ、第二形態へと成長の時です…」

ガーティスは、泣き叫ぶかおりの腕を持ち上げる。そして左肩を掴み魔力を高め、それが終わるとかおりを乱暴に投げ飛ばした。

「かおりちゃん！」

飛鳥は地面に転がるかおりに駆け寄ろうとする。だが、アクアによつて遮られた。

「なっ、アクアちゃん！」

そんなアクアに文句を言おうとしたが、その瞳が赤と緑のオッドアイになっているのを見て、かおりが魔獣化を起こそうとしていることに気づいた。

かおりを見ると、左肩からは鋭く尖った触手が伸び、それが巻きついて身体に喰い込む。真っ赤になった魔石は妖しく光を放ち、湧き出た肉塊が盛り上がるように全身を包み込んだ。

それは、以前見た魔獣化ではなく、もっと禍々しい変化であった。逃げ遅れたクラスメイトたちが、悲鳴を上げながら気を失う。かおりは、以前よりも巨大な獣人：爬虫類のような猿の魔獣となっていた。

第二形態となったかおりは飛鳥をじつと睨んでいたが、突然、グラウンドの優子たちに向かって走り出す。何を思ったのか獣人型魔獣の一体に掴みかかり、首筋に噛みついた。

「なっ！」

その奇妙な光景に、優子が驚きの声を上げる。

魔獣の首筋から魔力の粒子が飛び散り、身体の形を保てなくなつて崩れ落ちる。地面には、白鳳学園の制服を着た少女が倒れていた。しかし、ただ魔獣化が解除されただけではなかった。空中に少女から離れた魔石が浮いていたのだ。

かおりが魔石に近づくと、触手が伸びて胸に突き刺さる。魔石は、

そのままかおりの胸にへばり憑いた。すると、かおりの両腕が鎧のようになる。手が数倍に膨れ上がり、刃物のような爪が現われた。

「魔獣を…喰った」

優子は、その変化が先程まで戦っていた魔獣の特徴とそっくりなことに気づく。かおりは続けて別の魔獣にも襲いかかった。

同じように魔石を取り込むと、今度は足の筋肉が膨れ上がる。かおりは信じられない勢いでジャンプして、魔鳥も捕らえて魔石を取り込んだ。

魔獣化が解かれ、空中にほおり出された男性をルウーが受け止める。安全な場所まで移動させて空を見上げると、背中に魔鳥の翼、手には巨大な爪、強力な脚力の足を持つ、三体の魔獣を取り込んだ第二形態のかおりが浮んでいた。

「魔獣の能力を取り込み成長する…。これが本来の第二形態なのです！」

ガーティスが嬉しそうに叫んだ。

「出来損ないのリウムさんとは偉い違いですね」

呆然とするリウムを見て、ガーティスはニタニタと笑った。

「かおり…ちゃん…」

飛鳥が呟くと、その言葉に魔獣化したかおりが反応した。

かおりは、静かに地面へ降り立つ。

「あ…すかせんぱい…」

その声は、口からではなく、左肩の赤い魔石から聞こえてきた。

魔獣は鋭い爪を振り上げる。

「わたし…せんぱいを…殺し…、ダメ！」

身体が震え、今にも爪が振り下ろされそうだった。

「死…ね…、嫌っ嫌だ！」

魔獣本来の凶暴な意思と葛藤しながら、かおりは叫んでいた。その声からは、苦しさや悲しさが伝わってくる。

しばらく笑っていたガーティスだったが、かおりの反応を見て不機嫌になる。

「何をしている…。はやくその娘を喰らえ！」

ガーティスの叫びで、かおりは飛鳥に襲いかかった。

「ダメーーーーっ！」

後方からの叫びで、かおりは振り返る。その叫びは、唸り声を上げて威嚇する魔獣リウムのものであった。

アクアが瀕死となったことで、フィールドはすっかり解除されていた。

ほとんどの報道関係者は魔獣を恐れ避難していたが、吉田がレポートする番組スタッフだけは、必死に放送を続けていた。そのことは、飛鳥たちも気づいていない。

番組は全国に流れ、光風町に住む小林亜紀もその放送を目にした。
「比奈…」

小林比奈の母親である亜紀は、やや複雑な心境で放送を見ていた。魔獣となった比奈は人を襲って魔石を憑けている…。亜紀はそう思っていた。しかし、リウムは魔鳥から女の子を救い出し、SPI NE Lの優子を護りながら別の魔獣と戦っている。今も、飛鳥が襲われそうになったのを止めたのだ。

見た目は凶暴そのものだが、どこか他の魔獣とは違うように思える。だが、比奈が魔獣になっっていることに変わりはなく、怪我をしないかという心配もあった。

亜紀がそんなことを考えていると、リウムは第二形態の魔獣にゆっくりと近づいていった。

「ダメ…」

リウムは牙を剥き出しに唸り声を上げる。

「そんなヤツの…こと…、聞く必要ない…」

すると、ガーティスの頭に怒りマークが付く。

「人を傷つける…いけないこと。死なない程度に…痛めつける！」

そう言い切るリウムに、全ての人がずっこけた。みんなの反応に、

リウムは理由がわからず小首を傾げる。

「結局、傷つけるのか…」

ガーティスは、剛剣を杖のように起き上がった。

「ええい、そんな出来損ないの言葉に耳を傾けるな！」

苛立つように叫ぶが、リウムとかおりはガーティスを見無視する。

相変わらずの反応に、ガーティスは少し落ち込んだ。

「傷つく…痛い…。お母さん…泣いてた…」

リウムが哀しそうな顔をする。

「マスターに…ダメって言われた！」

強い意志を込めてかおりを見つめた。

「だから…いけない！」

その言葉に、優子たちは驚いた。魔獣となつたリウムが、人の痛みを理解しているのだ。

「くくつ、何を言い出すかと思えば…」

ガーティスは、かおりに近づき剛剣を太股に突き立てた。

「ががああー！」

魔獣の悲鳴と共に真つ赤な血が流れ出る。第二形態となつたかおりには、痛みもそのまま伝わっていた。

「痛い…ですか…」

ガーティスは剣を引き抜く。

「しかし、殺らなければ己が傷つくだけですよ…」

にたにたと微笑みながら、更に剣を突き立てた。

「ガーティス！」

怒り狂つたリウムは、ガーティスに襲いかかった。

素早い動きでガーティスの腕に噛み付き、思いつき振り上げた。ガーティスの腕は引き千切れ、返り血がリウムを真つ赤に染める。

千切った腕を咥えながらガーティスを睨み付けるその姿は、まさに魔獣…。かなり恐いものがあつた。

ガーティスは慌てた様子もなく、無くなつた腕の位置を見る。

「おやおや、これは困りましたね…」

すると、傷の断面から無数の触手が伸び始めた。

はっとしたリウムは、啞えていたガーティスの腕を投げ捨てる。見ると、腕からも同じように細い触手が伸びようとしていた。

触手は、お互いを引き寄せるように伸び、絡まり合って縮まる。

ガーティスは何事もなかったかのように腕を動かしてみせた。

その回復能力に愕然とする飛鳥たち。千切れた腕が元に戻るなど、信じられないことだ。

目を丸くしたリウムは、ゆっくりと振り向き優子を見つめる。

「…ばけもの？」

まじめ顔でそう問いかけた。もちろん、優子はその質問に苦笑する。

「あなたに言われたくはありません…」

ガーティスの表情は、かなり複雑であった。

ただしルウーだけは、優子たちがなぜそんなに驚いているのか、不思議そうにしていた。確かに触手や回復の早さには驚いたが、千切れた腕を繋げるなど精霊術でも可能であったからだ。

第25話 暗黒族

リウムの懷に潜り込んだガーティスは、喉元を掴み力任せに地面へ叩きつけた。

「リウムさん、これまでの非礼は水に流します。わたしに仕えなさい……」

仰向けとなつたリウムにそう囁く。

「がはっ！」

リウムは、咳き込みながらも前爪をガーティスに突き刺そうとする。しかし、ガーティスは身体を回転させ、リウムの前足を蹴り上げた。

ほんの一瞬、喉元の締め付けが緩くなったことで、リウムは大きな雄叫びを上げる。後ろ足を跳ね上げ身体を起こし、すぐさま牙を向けるがそこにガーティスの姿はなかった。

ガーティスは、リウムの死角を突き側面へと回り込む。そして、剛剣を横腹目掛けて振り上げた。リウムは、殺気を感じて飛び上がる。そこに、超低空で滑空してきたルゥーが大剣を横に振り抜く。ガーティスは剛剣で身体を護り、ルゥーの攻撃を防いだ。魔力の低い人間界では、魔界での戦いのように、全ての攻撃を無効化することはできない。そのため、ガーティスも必死であった。

剣同士がぶつかった瞬間、火花が飛び散りその反動で衝撃波が起きる。ハイレベルな攻防について行けず呆然としていた優子は、その衝撃波でぶっ飛ばされた。飛鳥もアクアにしがみつくように暴風を耐えている。

ルゥーが両断する勢いで大剣を振り下ろす。だが、ガーティスは闇の霧に姿を隠し、ルゥーの剣は地面に突き刺さった。まるで爆発があつたように大地が砕け散り、地震のような揺れが起こる。土煙が治まると、グラウンドには深い裂け目できた。

「あがつ……」

その威力に驚く優子は、その場にへたり込んだ。

「ルウーさま手加減無しのもうですから、お二人は早く避難したほうがいいですね…」

アクアは痛みには耐えながら立ち上がる。

戦いが激しくなる前に飛鳥と優子を安全なところまで連れて行きたかったのだが、どうやらそうはいかないようである。目の前に、第二形態の魔獣かおりが唸りながら迫っていたのだ。

「やはり…、魔獣の意思には勝てなかったか…」

考えてみれば、リウムのような考えをする魔獣が変なのだ。アクアは、前足に青白い宝石のような爪を出現させ、戦闘態勢をとった。

吉田たちは、リウムたちの戦いをプレッシャーに耐えながら撮影していた。

そこに、魔獣化した生徒が現われる。魔獣は怒声を上げながら駆けより、放送機材を積んだ車を投げ飛ばす。ガソリンに引火した車は爆発を起こし、放送が中断されてしまった。

数名のスタッフが、魔獣に弾き飛ばされ、ぐったりと動かなくなる。恐怖に腰を抜かした吉田は、涙を流して後退り、頭を庇いながら目を瞑った。

身体が震え、心臓が激しく鼓動する。死を覚悟した吉田だったが、一向に魔獣が襲ってこないことに疑問を感じて顔を上げる。すると、ガーティスと戦っていたはずのリウムが、吉田を護るように魔獣と格闘していた。

リウムは、魔獣の首筋に噛み付き地面に叩き付ける。かなりの衝撃でぶつけられた魔獣は、気を失ったのか動かなくなった。

魔獣を俯せに寝かせたリウムは、背中に牙を突き立てた。魔獣の皮膚に鼻を潜り込ませるようにしているが、そこからは血ではなく黒い粒子が飛び散っている。リウムが魔獣から口を引き抜くと、無数の細長い触手が暴れるように伸びる魔石が啞えられていた。それを噛み砕くと、魔獣の身体は形を保てなくなつて崩れ落ち、その場

には意識を失っている男子生徒が横たわっていた。

憑かれたら取れないはずの魔石を、いとも簡単に取り去るリウム……。吉田に近づき、鋭い目付きで睨みつけた。

「危険……、はやく逃げる……」

凶暴そうな顔をしているが、吉田にもリウムの優しい心が感じられた。

そのとき、右上に闇の霧が発生し、ガーティスが飛び出してきた。「そんなクズのような人間族を護るとは……、魔獣として恥ずかしくはないのですか？」

ガーティスは、剛剣をリウムの肩に突き刺した。

リウムは、大きく口を開け、ガーティスに牙を振り下ろす。ガーティスは、その牙を片手で難なく防ぐ。そのまま顎を蹴り上げ剛剣を引き抜く。強引に引き抜かれた傷痕からは、鮮血が吹き出した。

軽やかに着地したガーティスは、吉田に切っ先を向けニタニタと微笑んだ。

「人間族など、魔石を憑け魔獣を育てるための……言わば家畜のような存在……」

掌に魔力が集まり、一つの魔石が精製される。

「そんなものを護ったとしても、無駄ではないですか……」

ガーティスは吉田の腕を取り、羽交い絞めにした。

「ああ……ああっ」

首を締め上げられ、目の前には真つ黒な魔石が浮んでいる。吉田は恐怖に震え、顔が真つ青となった。

頼りのルウーは、飛鳥たちを護りながら魔獣化したかおりと闘っている。この状況で吉田を助けられるのは、リウムだけなのだ。

「そのひとを……はなせ……」

リウムは片足を引きずりながらガーティスの隙を窺う。その姿は、まるで獲物に襲いかかるうとしてしている肉食獣のようであった。しかし、ガーティスは少しも慌てることなく、魔石を吉田に近づけた。

「いやあああ……！」

吉田の悲鳴がリウムの逆鱗に触れる。

「がああーーーーー！」

狂ったように吠え立てるリウムに、さすがのガーティスも驚く。

「ガーティス…、殺す！」

その瞬間、リウムの魔石が妖しく輝いた。

地面の底から闇が湧き上がる。いや、闇よりも暗い暗黒がリウムの身体を包み込んだ。

「なんだ…、何が起きている！」

狼狽するガーティスは吉田から腕を外し、火炎球を発動させてリウムがいるであろう闇に叩き込んだ。

激しい爆音と熱風が起こり闇が晴れる。そこにリウムの姿はなく、代わりに幼い少女がガーティスを睨んでいた。

全裸で立ちつくす少女…。頭には髪の毛で隠れているが獣のような耳があり、お尻にはふさふさとした尻尾が付いている。額に憑く真つ赤な魔石が、リウムであると証明していた。

「魔獣が…人型に成長した…」

ガーティスは、あることに気づき、さらに驚愕する。リウムの魔石には鳥が翼を広げたような紋様が浮かび上がっていたのだ。

「ア、アウインの紋章だとお！ 魔獣が…、魔獣がアウインの勇者だとも言っのか！」

その紋様は、紛れも無くアウインの紋章であった。

かおりは何かに脅え始める。魔力ではない別の力をリウムから感じ取っていた。

第二形態であるため攻撃できなかったルゥーは、かおりの動きが止まった瞬間を見逃さず、左肩の魔石目掛けて天空力の塊を叩き込んだ。

絶妙なバランスの天空力は、魔獣の身体を崩壊させ一気に魔獣化を解除させる。アリスたちには決して出来ない芸当であった。

その場に崩れ落ちそうになったかおりをルゥーが受け止める。そ

して、ガーティスと向きあう少女を厳しい眼差しで見つめた。

「まさか…暗黒族…」

リウムから感じられる力は、先程までの魔力ではなく、純粹なる闇の力暗黒力だったのだ。

天空族であるルウーには、リウムが何者なのか予想がついていた。暗黒族とは鉱物生命体であり、本体は暗黒石と呼ばれる石そのものである。天空族と暗黒族は、古より幾度も戦いを繰り返しており、互いが天敵のような存在であった。ただ、ここ数千年は暗黒族の存在は確認されていない…。

暗黒族の誕生については長年謎とされていた。もしリウムが暗黒族であるとするなら、魔石が成長して暗黒族になるのかもしれないのだ。

ルウーがその事実には驚愕しているとき、アクアは別の意味でショックを受けていた。

「…ア、アウインの紋章だつてー！ー！」

アクアは、臨戦態勢にも構わずリウムに駆け寄る。リウムの額を覗き込み、途端にボロボロと涙を流しはじめた。

「あうう…、本物だ…」

勇者シヨウに憧れるアクアにとって、アウインの紋章こそ絶対正義の証し。アクアも、いずれはアウインの勇者になりたいと考えていた。それなのに、こんなわけのわからない魔獣に先を越されるなど、アクアは心底悲しみ落ち込んだ。

「…ぬ？」

リウムは、アクアのマジ泣きに小首を傾げる。

そこに、優子が大慌てで走ってきた。

「リウムちゃん、素っ裸でなにやってるのよお！」

優子は、辺りを見回し何かを探している。

「ええ…と、何か着るものは…。ねえ、何か無い？」

飛鳥たちの方を見て問いかけた。

「あつ、はい」

はつとしたルウーは、気を失っているかおりを飛鳥に預け、小走りで近づく。そして、手をかざして、子どもサイズの服を取り出す。それは、天空族独特の衣であった。

「これは、わたくしの着ていた服と鎧です。いかがでしょう」
服をリウムに合わせ、にっこりと微笑んだ。

「うん」 リウムちゃんかわいくなるよお」

優子は、リウムに服を着せ始めた。

二人は、まるで着せ替え人形で遊ぶかのようにリウムに服を着せる。隣りでは、まだシヨックから立ち直っていないアクアが、わんわん泣いている。

強敵の目の前で繰り広げられるほのぼのした光景…。そんなやりとりを、飛鳥は半ば呆れ顔で見つめる。もちろんそれは、吉田もガ―ティスも同じであった。

第26話 魔獣な勇者

天空族の服と鎧を着て、リウムはガーティスと向かい合った。その姿はかなり様になっている。

「アウインの勇者…」

ガーティスの表情から完全に余裕が消えていた。

ルウーは、ガーティスが吉田から離れているのを確認して再び襲いかかる。無防備なガーティス目がけて、大剣が振り下ろされた。

「ジャマをするなアー！」

怒りに反応してガーティスの魔力が高まり、ルウーは見えない壁に弾き飛ばされた。

「遊びはここまで…。リウムさんがアウインの勇者だというなら…死んでもらわなければなりません」

平静をよそおうガーティスだったが、リウムが人型になったときから胸のトルマリンはまるで心臓のように脈動し始めていた。

アウインの紋章が現れたといっても、リウムが急に強くなるわけではない。五精霊を軽くあしらうガーティスにとって、紋章の出現など取るに足らないことである。しかし、リウムから感じられる闇の力に、トルマリンが激しく反応していたのだ。

ガーティスは、えも言われぬ不安を振り払うように、リウム目掛けて突っ込んだ。片手でリウムの頭を掴み、腹部に膝を叩き込む。リウムが咳き込みながら前屈むと、透かさずガーティスは剣の柄で背中に一撃を喰らわせた。さらに、崩れ落ちたリウムに何度も蹴りを入れる。

一瞬の出来事に優子は啞然とする。地面で痙攣するリウムを見て、事の重大さに気づいた。

「おっと、動けば先に殺すぞ…」

ガーティスは、駆け寄ろうとする優子に剣を突きつける。リウムの頭に足を置き、ぐりぐりと踏み付けた。

「ああが！」

リウムは、手足をばたつかせて、何とか脱出を試みる。すると、伏せている地面に闇が発生し、リウムは溶け込むように姿を消した。「ちっ！」

ガーティスは舌打ちをする。胸のトルマリンは、さらに激しく脈動していた。

ガーティスが手をかざし闇の霧を発生させる。その中へ入ろうとしたとき、闇から大質量のレーザーが飛び出てきた。素早く身体を捻るガーティスだったが、レーザーは脇腹を掠める。

闇の霧からは、魔獣形態のリウムが飛び出てきた。魔獣リウムは激しく吠え立て、ガーティスを威嚇する。

「……どういふつもりだ。なぜ魔獣に戻っている！」

ガーティスは、脇腹を押さえながら、リウムの不可解な行動を問い詰めた。

リウムは唸るのを止め、その場に固まる。質問の意味を考えながら、ゆっくり時間をかけて答えを捻り出した。

「……噛めない」

その答えに、すべての者がずっこける。だが、リウムは冗談で言っただけではなかった。

「確かに、戦いにおいては魔獣型の方が向いているかもしれませんが……」

ルウーが一人だけ冷静に分析をする。成長したばかりのリウムにとって、人型での戦いは未経験なのだ。

「アウインの勇者が、噛んで攻撃をしないでください！」

憧れの勇者をバカにされた気がして、アクアは泣き叫んだ。

「アウインの勇者なら、優雅に剣技で！」

そこまで言っただけで、アクアは重要なことに気づいた。そう……リウムは武器など持っていないのだ。

そのことは優子も気づいたようで、自らの剣をリウムに投げた。

リウムは、再び暗黒族へと姿を変え、飛んできた剣を受け取る。が

…、剣は重く、リウムには持ち上げることすら出来ない。

すると、アクアが後ろを振り向くようにして自らの肩に噛み付く。何かを口に咥え、それを一気に引き抜いた。

それは、刀身が白い半透明の石質で出来た、一振りのショートソードだった。

アクアはその剣をリウムに向かって投げる。

「リウムさん、その剣を！ あなたが本当にアウインの勇者なら、その剣が使えるはずです！」

ショートソードはリウム手前の地面に突き刺さった。

ショートソードといっても、リウムにはかなり大きく感じられる。リウムが手にしてみると、それほど重くはなく十分に扱えそうであった。しかし、尖ってはいるものの肝心の刃はなく、相手を斬り裂くことなど出来ないように思えた。

「うう………」

リウムは、抗議の視線をアクアにぶつけた。

「やはり、無理か……」

アクアは剣の反応に落胆する。

「何を遊んでいるんですか！」

ガーティスは、なぜか回復しようとしないう脇腹を気にしながらも、リウムに斬りかかる。

辛うじて受け止めたリウムだったが、その衝撃に耐え切れず後方へと吹き飛ばされた。

ガーティスはゆっくりと歩み寄り、リウムの胸倉を掴み持ち上げて暗黒石に浮かぶアウインの紋章を憎々しく睨み付けた。

「お笑いですね…、魔獣が勇者だとは……」

リウムを地面に叩き付け、腹部に片膝を乗せる。片手で首を締め付け、もう一方で剣を逆手に握り、その刃をリウムの眉間に宛てがった。

「これで終わりです…。死になさい……」

冷徹な笑みを浮かべ、ガーティスは剣を握る手に力を込めた。

がしゅっ！

鈍く嫌な音が聞こえ、辺りが真っ赤に染まる。何かが宙に舞い、地面へと落ちた。

ガーティスは、地面に転がる何かを見つめる。それは、剛剣を握ったまま固まる己の左腕であつた。

「な…に…」

啞然とするガーティスの目前に、光り輝く何かが迫る。ガーティスは反射的に身体を反らし、リウムから距離をとつた。

立ち上がるリウムの手にはアクアから渡されたショートソードが握られていた。その刀身は、先程までとは違い、中央から外側にかけて青白い光を放っていた。

「聖剣クリソベリル…ですね」

ルウーが納得したように呟く。

クリソベリルとは、光竜の精霊力を精製・結晶化させた聖剣で、この世に斬れぬものは無いとまでいわれている。

歴史上、聖剣クリソベリルを手にした者は伝説の勇者クリスタル…、そして現代においてその聖剣を引き継いだショウとアリスのみである。まさに聖剣クリソベリルとは、アウインの勇者が持つ剣だといえた。

「がああー！」

斬られた肩を押さえ、ガーティスは激痛に苦しみだす。

「なぜだ！　なぜ回復しない！」

ガーティスは発狂したように暴れ出した。

聖剣クリソベリルを握り呆然とその様子を見ていたリウムはあることに気づいた。ガーティスの体内に、魔力ではない純粹なる闇の力が増大していることを…。

「…とるまりん」

リウムの身体は震え始めた。忘れていた恐怖が蘇ってくる。

トルマリンに殺されたという前世の記憶は無かったが、その恐怖

は身体に染み付いているようだ。

そのとき、リウムの心に直接語りかける声があった。その声を聞いたリウムは、ぱっと明るい表情となる。

「マスタ〜」

それは、まさしくリウムの大好きなシヨウの声であった。リウムは何度も頷きながらその声を聞く。だが、声はリウムにしか聞こえておらず、傍目はかなり異様である。

「うん…、やってみる…」

リウムは、クリソベリルの切っ先を天に向け、暗黒力を高め始めた。

クリソベリルに暗黒力が絡まり、刀身が激しく震える。精霊力の結晶であるクリソベリルは、魔力以上の闇を受け、桁外れな負荷がかかっていた。

「な、なにやってるんですかー！ー！」

アクアの悲鳴が聞こえる。大事なクリソベリルが、いまにも壊れそうなのだ。しかし、事はそんな単純な問題ではなかった。

「リウムちゃん、おやめなさい！」

ルウーは真つ青な顔をして叫ぶ。

強大な精霊力と魔力を反応させ、全てを飲み込み消滅させる自己犠牲精霊術…。ルウーは三年前にシヨウが唱えた禁呪のことを思い出していた。

「うあああー！ー！あ！」

リウムが更に暗黒力を高めると青白かった刀身が赤黒くなる。

上空に向けて精霊力と暗黒力が反発しながら立ち昇ると、クリソベリルに幾つもの細かい亀裂が入った。アクアの悲痛な叫びが辺りに響き渡る…。

暴れるクリソベリルを振りかざし、発狂するガーティス目掛けて振り下ろす。

「ばるむ・そー！ー！ど！」

リウムは大きく叫んだ。

バルムの力が付加されたクリソベリルは、激しい雷撃を纏いながらガーティスの身体を崩壊させる。「があぎゃああーーーーー！」
ガーティスはクリソベリルを掴もうとするが、刀身に触れる前に腕が弾け飛ぶ。

「ガーーーーーーティス！」

リウムはクリソベリルの柄を握り締め一気に振り下ろした。

激しい爆発が起こり、空間に歪みが生じる。すると、小さな闇の球体が現れ、全てを飲み込むように回転しだす。切断されたガーティスの身体は、粒子となって闇に吸い込まれ、この世界から跡形も無く消滅した。

第27話 トルマリンの胎動

闇の球体が消え、辺りに静けさが戻った。

リウムは大きく息をして手にしたクリソベリルの刀身に目を走らせる。クリソベリルは、ピシピシと音を立て細かく碎け散った。

「あぎゃー……あー！」

アクアは、固まった状態でひっくり返る。仔犬の姿に戻り、ついには泣き出してしまった。アクアは、クリソベリルをいずれショウに使用してもらおうと思っていたのだ。

さすがに申し訳なく感じたのか、リウムはしゃがんでクリソベリルの破片を集める。大きめの破片を両手に乗せてアクアに駆け寄った。

「…はい」

アクアに見せるように両手を差し出す。破片の中には、いくつもの瓦礫が混ざっていた。

アクアは、一瞬引きつった顔をするが、リウムの困った顔を見て苦笑する。

「仕方ありませんね。ああしなければ、かゝたすは倒せなかったわけですし…」

アクアにもリウムの所為ではないことぐらいわかっていた。ちなみに、魔族の名はガー…

「ん…」

リウムは、手にした破片をアクアの目の前に落とす。アクアが頭を捻ると、リウムはとんでもないことを口にした。

「…「ミ」」

もちろん、リウムに悪気は無い。

再び泣き出すアクアを、優子が抱き上げる。子どもをあやすように背中を叩きながら、リウムに質問した。

「ねえリウムちゃん、技を使う前にマスターって言うってたけど…、

それってお兄ちゃんのこと？」

優子の問いにリウムが頷く。

「お兄ちゃん、何処にいた？」

シヨウが何らかの方法でリウムと連絡したのだ。優子はシヨウの無事を喜んだ。

しかし、リウムの答えは単純明快。

「…あの世…」

その答えに、優子は固まってしまった。

優子たちが、そんな漫才のようなやりとりをしていると、鎧を身に纏ったセリアがやって来た。

「どうやら、こっちも終わったみたいね…」

ベリル研究所から戻ったセリアは、今まで街に出現した他の魔獣と戦っていたのだ。

セリアは、優子から戦いの経過を聞く。目の前の少女が成長したリウムで、ガーティスを倒すため精霊力と魔力（暗黒力）を融合させた技を使ったと聞いて血の気が引いた。

「バルム…って、冗談？」

セリアが驚くのも無理はない。

剣を媒体に技を発動させたことで斬り裂いたガーティスだけが消滅することになったが、本来のバルムはその場の空間をも飲み込む超技である。もしリウムが力のバランスを誤っていたら、金緑石地区など跡形もなく消滅していたであろう。もちろんそんな超技であったからこそ、トルマリンの力を手に入れたガーティスを倒せたのだが…。

そんな説明を受けて、優子と飛鳥は改めて事の重大性に愕然とするのだった。

「それにしても…、吉田さんは災難だったね…」

魔獣に襲われガーティスに魔石を憑けられそうになるなど、セリアは吉田の不幸に苦笑した。

「あなたたちが姿を消していたのって、こんな理由があったのね…」
吉田には、全てが驚きの連続であった。

優子たちSPINELが魔獣化事件に関わっていたこと…。なかでも、アリスと翼のある優子にそっくりな少女が、かつて大魔王ザーヴァと戦った五精霊であることには心底驚かされた。ちなみに、ルウーは既に姿を消している。

「吉田さん…。このことは内緒だからね」

優子は、吉田に念押しをして、かおりを看病している飛鳥のところに向かった。

ルウーに天空力を叩き込まれ気を失っていたかおりはゆっくりと目を覚ました。徐々に魔獣となっていたときのことを思い出したのか、かおりは泣きながら飛鳥にしがみ付いた。

「せんばい、ごめんなさい。わたし…わたし！」

魔獣の意思に支配されていたとはいえ飛鳥を殺そうとしたのだ。

謝っても許されることではない…。

だが、当の飛鳥は相変わらず危機感がマヒしているのか、きょとんとした顔でかおりを見つめる。

「いや…まあ、四年前のことを考えれば、全然平気だし」

飛鳥は、精霊界で魔物に取り囲まれた時のことを思い出して身震いをした。あのときの恐怖に比べれば、それこそ些細なことである。飛鳥がかおりを落ち着かせようとしていると、そこにリウムがやってきた。リウムはかおりを見つめ、何を思ったのか、突然魔獣の姿となった。

「ひっ！」

それを見たかおりは一瞬脅えるが、リウムがただの魔獣ではないことは覚えていた。かおりは、リウムが匂いを嗅ぎながら顔を寄せてくるのを、震えながらも黙って耐える。

するとリウムは、かおりの胸の位置に口を当てて、もぞもぞと動かす。胸から口を離し、お座りをして何か硬いものをバリバリと噛み始めた。

「リ、リウム…ちゃん？」

飛鳥が何を噛んでいるのかを尋ねと、リウムは噛むのを止めて舌を出した。舌の上には、噛み砕かれた真っ黒な石の欠片が乗っかっている。

「ま…魔石！」

飛鳥は、びつくりして叫んでしまう。

リウムは再びかおりに近づき、今度は巨大な口で肩から胸にかけてを咥えた。牙を立てて噛んでいるのではなく口をはむはむと動かす。そして、また離れたかと思うと、何かを噛み砕いた。

はっとしたかおりは、体操服の破れ目から左肩を覗く。だが、そこに憑いていたはずの魔石は、跡形もなく消えていた。

「う…そ…」

かおりは、信じられないといった顔でリウムを見つめる。

魔獣の強面でかおりを威嚇するが、リウムの言葉は優しいものであった。

「もう…だいじょうぶ」

かおりはそれを聞いた途端に大声で泣き出し、リウムに思いつきり抱きついた。

「…う？」

リウムは突然のことに驚いたが、動かずにかおりの抱きしめを受けていた。

「魔獣が勇者で、人助け…か…」

吉田は感動的な場面に遭遇し、涙ぐんでいた。

「よし決めたっ」 優子ちゃん、わたしも協力するね。まだ、世間に知られたくないことってあるんでしょ。何でも言って」

一緒に取材していたスタッフは、魔獣の攻撃で意識を失ったため、事件の決着を目撃したのは吉田だけである。放送されてしまった場面は仕方ないとして、重要なことは吉田が黙っていれば良いのだ。

優子は微笑みながら吉田の身体を肘で突付く。

「いいんですか吉田さん」。事実を発表したら、一躍時の人なんで

すよっ」

にやにやと笑いながらリウムを見た。魔獣が魔獣化事件の首謀者を倒したなど、ものすごいスクープなのだ。

「うーん、そうなんだけど。…って、発表したらあなたたちが困るんですよ！」

怒ったような吉田を見て、優子は笑い出した。吉田もつられて笑い始める。

「でも、魔獣化事件が完全に無くなったら、そのときは…ねっ」

吉田は優しそくに微笑んだ。

そんな提案に優子は感謝していた。金緑石地区には、まだガーティスが創り出した魔石が大量にばら撒かれている。余分な情報を流して、混乱を招くことは避けなければならないのだ。

こうして、金緑石地区で起こった魔獣化事件は、ひとまず終結を向かえようとしていた。

しかし、バルムの力で別次元に飛ばされたガーティスは、死んではいなかった。トルマリンの力で切断された身体を再生させ、高位魔族の闇を渡る能力によりクリスタルと戦った地へと戻ってきていたのだ。

「はあはあはあ。リウムめ…、キサマはこの手で殺す！」

意外にしぶといガーティスは、お決まりの文句を言っただけで震える。完全に回復してないため仰向けに寝転ぶが、異変はすぐに始まった。

「うっ…、ががぁー！ー！」

ガーティスは突然胸を押さえ苦しみ始めた。胸を中心に闇の力が増大するのがわかる。ガーティスの脳裏にある可能性がよぎった。激しく脈動する魔石、身体中を引裂かれるような感覚…。

「トルマリンかー！ー！ー！」

立ち上がり、怒声を発するガーティス。それが、彼の最後の言葉となった。

ガーティスの身体は、まるで砂の像が壊れるように崩れ落ちる。砂の山に衣が被さり、ガーティスの存在はこの世から完全に消滅した。

砂が風に吹き飛ばされると、そこには小さな塊が残されていた。塊はガーティスの衣を纏い、ゆつくりと立ち上がる。それは、トルマリンの魔石…いや、暗黒石を胸に憑けた一人の少年であった。五歳ぐらいの少年は、自分の身体を確認するように見回す。小さな手を何度も握ったりして、感覚を確かめているようである。

すると、少年の後ろに、何者かが降り立った。

「今度の身体は、やけに子どもだな…。トルマリン…」

トルマリンと呼ばれた少年は振り返り、声の主を見上げた。そこには、美形な顔立ちに金色の長髪、背に一对の純白な翼を持つ天空族の青年が立っていた。

「久しぶりだね…。クリス…」

トルマリンは、五千年ぶりに再会した宿敵クリスタルを睨み付けた。

第28話 リウムと比奈

ガーティスの死によって現われたのはトルマリリン…。かつて暗黒族の軍勢を引き連れ精霊界を支配しようと企み、幾度もクリスタルと戦った凶悪な性格のジュエルナイトであった。

「どうやら、迷惑をかけたみたいだね…」

トルマリリンは、近くの岩にもたれかかりながら腕を組む。

「なに…。シヨウとアリスがお前の宿主と戦っただけで、わたしは何もしていない…」

クリスは微笑して、トルマリリンを睨んだ。

「…以前のような邪気は感じられないな」

クリスはトルマリリンの変貌に少し驚いていた。過去のトルマリリンは、配下ですらゴミのように扱う、まさに悪魔のような男であったからだ。

トルマリリンは苦笑気味に答える。

「ボクたち暗黒族は、他の生体に憑くことで能力を吸収する…。そのとき、心の情報も引きつぐんだ」

前世において戦いに明け暮れていたトルマリリンは、他の暗黒族を取り入れることで邪悪面が強くなり過ぎていたのだ。

「キミに…。いや、あの二人に倒されて暗黒石に戻ったことで、ボクの中から邪気が消えたようだね」

につこりと微笑むトルマリリンには、かつての凶悪さは微塵も残っていないようである。

クリスは真意を探ろうとトルマリリンを見つめるが、力は強大であるものの敵意は感じられなかった。

「ふう、まあいい…」

何もしないトルマリリンを相手に、戦いを仕掛けるわけにもいかない。クリスは、頭をかきながらため息をつき、翼を広げて飛び去ろうとした。

「まって！」

トルマリンはクリスを呼び止める。

「ボクと一緒に復活したリウムって暗黒族の少女……」

少しだけ躊躇ったように俯いたが、クリスに近づき懇願した。

「過去のボクが殺してしまった彼女に、すまなかったと……謝っておいてくれないか」

トルマリンは真剣にクリスを見つめる。

クリスは少しだけ考えたが、すぐに答えを出す。

「そういったことは、自分で言うんだな……」

空中で振り向き、にやりと微笑んだ。

「わたしは、シヨウのようにお人好しではない……」

そして、クリスは空間転移で姿を消した。

「キミは……相変わらずのようだね……」

トルマリンは、クリスのそんな態度に苦笑するのだった。

金緑石で発生した魔獣化事件は、人々に大きな衝撃をもたらした。これまで規制がかかっていた事実が次々と公表され、連日魔獣化事件についての報道特番が組まれていた。優子たちSPINELも仕事に復帰しており、魔獣と戦っていた彼女たちから話を聞こうと、今まで以上に忙しい毎日を過ごしている。また、事件に巻き込まれた吉田の仕事量も急増していた。

アリスは、金緑石での戦いの後、自分の部屋で目を覚ましていた。だが、覚えているのはクリスとなつてガーティスと戦ったところまでで、自分がどうやって戻ってきたのか記憶はなかった。そして、一緒に戦っていたシヨウの行方もわからなくなっていた。

事件の詳細が公となり魔石憑きと呼ばれる人々の立場が悪くなると思われたが、新たな治療法によって魔獣化を完全に治すことができるようになっていた。今まで不可能と思われていた魔石を除去する方法が見つかったのだ。

ガーティスが撒き散らした魔石は全てを回収できていない。その

ためベリル研究所には、いまだ治療を受けにくる患者が訪れていた。しかし、ベリル研究所では治療が行われることはなく、とある住所を教えられる。しかもその住所というのが金緑石にある樹神社なため、治療を受けに来た者は不思議に思っただけであった。

樹神社には、今日も魔石憑きの患者が訪れる。その対応は、SPINELの新メンバー飛鳥が行なっていた。飛鳥は新メンバーと発表されたものの、住んでいるところが離れすぎているため、SPINELの仕事で呼び出されることはほとんど無かった。もちろん飛鳥は、そのことを喜んでいた。

やって来た患者は社務所の一室に通され、その瞬間、恐怖に絶叫することとなる。目の前に巨大な魔獣リウムがお座りして、入ってきた患者を待ち構えているのだ。

苦笑しながら大丈夫だと説明する飛鳥だが、そんな問題ではない。不幸にも一人目の患者は、後頭部に魔石が憑いていたため、リウムに頭から啜えられてしまった。

暴れる患者を無視して、リウムは口をはむはむと動かす。そんな状態がしばらく続いたかと思うと、リウムは窒息寸前な患者を口から解放する。ただ啜えていただけではなく、患者から魔石を取り去っていたのだ。

これで魔石は完全に取り去られ、いつ魔獣化するかもしれないという不安から解放される。だが、リウムの唾液でべたべたとなった患者の顔には、安堵の表情は全く見られない。それどころか、喰われるかもしれない恐怖に、真っ青となっていた。

悲鳴を上げながら逃げ出す患者に、飛鳥とリウムは呆然とする。治療に訪れた患者のほとんどは、同じような反応を見せる。リウムを恐がらないのは、一部の小さな子どもぐらいであった。

治療が行われているはずの部屋から悲鳴が聞こえ、数分も経たないうちに逃げ出すように飛び出してくる。順番を待っている患者は、生きた心地がしなかった。数分後…、自らも絶叫することになるのは言うまでもない。

樹神社では、しばらくそんな悲鳴が耐えることはなかった。

ある日のこと…。昼食を知らせに来た飛鳥は、境内で寝転んでいるリウムに寄りかかる一人の幼女を見つけた。

見た感じ三歳ほどの女の子で、近所の子どもが遊びにきて眠ってしまったのかと思われた。しかし、それにしてもリウムが嫌がっていない。いつもなら、子どもに近づかれると、困った顔で低い唸り声を上げるのだ。

飛鳥はリウムたちに近づき、目をこすりながら身体を起こす女の子に問いかけた。

「ねえ、あなたお名前は？」

すると、リウムを全く恐れる様子のない女の子は、周囲をきよろきよろと見回し、突然大声で泣き始めた。慌ててなだめようとするが、小さな子どもの相手をしたことがない飛鳥には、どうすればいいのかわからない。

そうこうしていると、リウムが頭を上げて女の子に顔を近づけた。「だいじょうぶ…、あすかお姉ちゃん…、恐くない…」

リウムは、狂暴そうな顔でそう呟いた。

女の子は泣くのをやめて飛鳥を見る。

「あすか…おねえちゃん？」

人見知りが激しいのか、女の子はリウムにしがみ付きながら問いかけた。飛鳥が頷くと、女の子は笑顔を見せる。

「あたし…、こばやしひな…」

女の子は、はつきりと答えた。

「小林…比奈！」

飛鳥は、リウムと女の子を交互に見た。魔獣リウムは、比奈に魔石が憑いて誕生した存在…。その比奈が、リウムと一緒にいるなど考えられないことなのだ。慌てた飛鳥は、携帯電話を取り出す。

「もしもし、優子！」

飛鳥は、リウムに起こった異変を優子に報告した。

だが、優子たちは仕事の都合ですぐには来られないようである。魔獣化事件についてあまり知識の無い飛鳥は、ただ途方に暮れるばかりであった。

とにかく比奈をこのままにしておくわけにもいかない。飛鳥は悩みに悩んだ末、比奈を光風町の亜紀の元へ連れて行くことにした。

飛鳥は、しゃがんで比奈に視線を合わせる。

「あのね比奈ちゃん。これからお母さんに会いに行こうか？」

飛鳥がそう提案すると、比奈は大きく頷いた。

「とは言ったものの…」

飛鳥は、ある重要なことに気づく。今から光風町に向かうと、電車の乗り換えなども含めて夕方近くになってしまう。下手をすると今日中に帰ってくることもできないかもしれないのだ。

今晚は実家に泊まるにしても、明日の学校をどうするか考えなくてはならない。

飛鳥がそんなことを悩んでいると、リウムがゆっくりと立ち上がる。そして、飛鳥の襟元に噛み付き、振り上げて背中に乗せた。

「早く…、行こ…」

リウムは、同じように比奈も背に乘せると、空中に闇の足場を生らせて上空へと駆け上がった。

「ちよつと、リウムちゃん！」

飛鳥は比奈を抱きかかえ、振り落とされまいとリウムの首筋にしがみつく。リウムは迷わず光風町の方角へ走り出した。

比奈に憑いて育ったリウムにとって、小林亜紀は母親も同然である。会いたい気持ちは、リウムも同じようだ。

リウムが空を走るように移動していると、天使のような姿で高速飛行するルウーが近づいてきた。

「あの…飛鳥さま。あまり、目立つような行動をされるのは…どうかと思うのですが」

ルウーは、困り顔で苦笑する。彼女は、ガーティスの脅威が去った今でも、影ながら飛鳥を護衛していたのだ。

「わたしに言わないでよーー！」

飛鳥は涙を浮かべながら抗議する。あきらかに飛鳥の意思ではなく、文句ならリウムに言ってほしいものであった。

第29話 正義の味方

如月家の庭には、真っ白な毛並みの小さなアクアマリンが寝転んでいた。お昼寝をしているように見えるが、これでも感覚を張り巡らせて、光風町全体の魔力の動きを監視しているのだ。

飛鳥の護衛役をリウムに奪われ、アクアはアリスに光風町の監視を命じられていた。

光風町でも魔獣化の脅威が完全に無くなったわけではないため、魔力の監視も重要な役割である。だが、その結果、飛鳥の護衛というショウの命令を破ることとなり、アクアの心は沈みっぱなしであった。

「はあ……、どうしてこんなことに……」

涙目でばやくアクアだったが、光風町に迫って来る強大な魔力に気づいて、慌てて家の屋根へと駆け登った。

「この魔力……、リウムさん？」

アクアがその方向を見ると、空に浮かぶ小さな黒い点がどんどん大きくなる。アクア予想通り、それは黒い魔獣リウムであった。どうやら、背中には飛鳥を乗せているようである。

「いったい何を考えているんだか……」

アクアは、目立ちすぎるその行動に呆れ返っていた。

女子生徒を助けて魔獣と戦うリウムの姿は全国に放送されている。優子から味方の魔獣と説明されたが、リウムに関しての情報はほとんど語られていない。そのため、黒き獣については様々な噂が飛び交い、スクープ記者たちにとって恰好的であった。

金緑石の樹神神社にいれば優子が宣言した取材拒否によって騒がれる心配はない。……が、リウムは敷地から出ただけではなく魔獣の姿で空を飛んでいる。これが騒ぎにならないはずはないのだ。

アクアがため息をついていると、リウムは地面に向かって降下し始めた。ちょうど繁華街がある位置である。この家にやって来ると

思っていたアクアは、慌ててその場所に走り出した。

リウムが突然降下を始めたことに、首にしがみ付いている飛鳥は驚きの声を上げた。

「どうしたのリウムちゃん！ 比奈ちゃんの家はもつと西の方だよ！」

こんな昼間から魔獣が現れたら、パニックが起こるのは目に見える。飛鳥は、血の気が引く思いでリウムに問いかけた。

落下しながら、リウムは考え込む。そして、少し間をおいて、信じられないことを呟いた。

「しんごうむし…、つかまえる…」

確かにリウムの視線の先には、スポーツカーが猛スピードで走り去ろうとしていた。

荒っぽい運転で、ほおっておけば人身事故を起こしかねない。しかし、問題はそこではなかった。

「って、リウムちゃん！ あんまり目立つちゃダメー！」

飛鳥は手を伸ばして口を引っ張り、リウムを止めようとする。だが、リウムはまったく言うことを聞こうとしない。

「いけー！」

比奈もノリノリでリウムの背中を叩く。それに反応して、リウムは暴走車の前に降り立った。

「があがああー！ー！」

リウムが大きく咆哮すると、暴走車は急ブレーキをかける。車体を横にしてリウムにぶつかる寸前で停止した。

運転していた青年は、殺気を込めて威嚇するリウムに最初はびつくりしていたが、それが今話題となっているリウムであることに気づくと、にやにやと笑いながら車から降りてきた。

「へえ、これが魔獣か」

青年は近づき、リウムをじっくり観察する。光風町の人間ではないのか、魔獣に脅える様子はない。

「しんごうむし…、だめ…」

リウムが注意すると、青年は腹を抱えて笑い出した。

「なんだ、てめえは警察か？ それに、対向車がいなかったら渡ってもいいんだよ」

この辺りは往来の激しい場所である。たとえ車が来なくても、どこから子どもが飛び出してくるかわからない。

「すぴど…、だしすぎ…」

リウムは更に注意する。そのことが、青年の神経を逆撫でした。

「ふざけんなよ、バケモノの分際で…」

青年は、懷から取り出したナイフをちらつかせる。刃物を見ても怯まないことに激怒した青年は、ナイフを逆手に持ちリウムに突き立てた。

刃物は身体に届くことはなく、その強大な魔力によって弾かれる。啞然とする青年…、異世界の住人に、常人の攻撃が通用するはずないのだ。

「…食べていい？」

リウムは後ろを振り返り、背中に乗っている飛鳥に確認する。突然なことに、飛鳥は思わず首を縦に振ってしまう。その瞬間、リウムは青年に飛びかかり、頭からかじり始めた。

ジタバタしながらなんとか逃れようとする青年だが、リウムの力は相当なもので牙が外れることはない。お座りをしながら青年をかじるリウムは、楽しいのかしっぱをバサバサと振っていた。

リウムから降りた飛鳥は、比奈と手を繋いでその光景に苦笑する。そこに、如月家から駆けつけた、仔犬型の光竜アクアマリンが現れた。

愕然とするアクア…、周囲にはかなりの野次馬が集まってきている。

「ちょっつと、何をやっているんですか！」

アクアは、飛鳥の胸に飛び込み、周りに聞こえないよう小声で囁く。

もちろん、そんなことを言われても、リウムが勝手に始めたことである。

「まゝ、リウムちゃんは勇者だから……」

飛鳥は、最近のリウムの行動を思い出した。

ガーティスとの戦いが終わり、リウムは飛鳥の警護と同時に金緑石地区の監視もしていた。そしてリウムは、いままでに店舗内に人質を取って立てこもる銀行強盗団を倒し、車に轢かれそうになった子どもを助けたり、さらにはケンカやタバコのポイ捨てなど凶悪犯罪から軽犯罪に至るまでありとあらゆる事件に首を突っ込みまわっていた。

魔獣の姿で行動しているため、目立たないはずがない。金緑石地区では、狂暴な魔獣であるが心優しく正義感の強いリウムのことを、黒き守護獣と呼んで敬っていた。

光風町の人々もそんな噂を耳にしているのか、リウムが青年をかじっていてもそれほど騒ぐことはなかった。むしろ、暴走車を停めてくれたリウムを、歓迎しているようである。

そのとき、飛鳥と手を繋いでいた比奈が、野次馬の中にある人物を見つけた。

「ママ！」

そこには、買い物の途中、偶然にも騒ぎに出くわした亜紀の姿があった。

膝をつき、駆けてくる比奈を抱きしめる亜紀。

「比奈……比奈！」

涙を流し、比奈をぎゅっと抱きしめた。無事を確かめるように比奈の顔を見つめる。額に憑いていたはずの魔石は、跡形も無く消えていた。

亜紀は、騒ぎの中心である魔獣リウムを、複雑な心境で見つめた。それは比奈が魔獣化した姿であり、亜紀に魔石を憑けた魔獣だったのだ。

リウムは亜紀の視線を感じ項垂れた。

かじられていた青年は、リウムの口から滑り落ちる。リウムのよだれでべちょべちょになった青年は、そのまま地面に倒れ込み、ひくひくと痙攣する。リウムは、青年が逃げないように、前足を背中に乗せた。

「ママ、あのね」

比奈は、亜紀の腕を引っ張り、リウムに近づく。

「ママ、りうむちゃんだよ」

母親に自慢するようにリウムを紹介した。

「リウム…？」

亜紀はリウムに手を伸ばし、頬のあたりを撫でる。

リウムは低い唸り声を上げながらもじっとしている。

「お…、お母さん…」

遠慮がちに呟いたその言葉に、亜紀ははっとした。

比奈が魔獣化して噛みついたとき、彼女は亜紀のことをお母さんと呼んだ。そして、先日のもある事件のときもお母さんと口になっている。

しかし、比奈は亜紀のことをママと呼んでいるのだ。

そのことから、リウムと比奈が同一ではなく、最初から別の人格であったと考えられる。しかも、リウムは亜紀のことを母親と思っているようだ。

当然であるが、亜紀は魔獣を産んだ覚えなどない。だが、比奈と同化していたためか、リウムを他人のように思えなかった。リウムに、比奈と同じような愛おしさを感じるのだ。

寂しそうにしているリウムに亜紀は優しく微笑み、首に腕を絡めて抱きしめた。

「リウムね、比奈の妹…ってことになるのかしら？」

しばらくそんなことを考えていると、亜紀は急に可笑しくなつて笑い始める。リウムの前足にしがみ付いた比奈も、つられて笑い出した。

「アクアちゃん、感動的なシーンだよ」

飛鳥は、アクアを抱きしめながら涙ぐむ。比奈を無事に母親に会わせられただけでなく、亜紀がリウムを受け入れてくれたことに飛鳥は感動していた。なんと、周りからは拍手のような音も聞こえてくるのではないか…。

そんな中、アクアだけがあることに注目していた。

「踏みつけている男性がいなければ…の話ですけどね…」

アクアは、呆れ顔でため息をついた。

存在自体を忘れられている青年は、リウムと比奈に踏み付けられて、激しく痙攣を起こしていた。

第30話 樹神飛鳥

リウムの騒動も落ち着き、飛鳥は一学期最後の登校をしていた。卒業式を終えれば、明日から夏休みである。

ぼくと窓の外を眺めながら、飛鳥はここ一ヶ月の出来事を思い出していた。現実味の感じられない事件の数々に、今でも夢を見ているような気がする。

優子たちSPINEELの訪問から始まった魔獣化事件、自分がこれほど巻き込まれるとは思ひもなかった。

事件は収まりつつあったが、大きな謎も残されている。それは、魔獣化事件の原因の一つと思われる、人間神の存在であった。

魔族ガーティスは飛鳥のことを転生した人間神だと言ったが、身体はどこにも紋章は無くただの勘違いと思われた。しかし、ガーティスとの最終決戦において飛鳥が発揮した力は、彼女がただの人間族ではないことを証明するものであった。

魔力で付けられた傷を、何の知識も無い飛鳥が瞬時に治して見せたのだ。これは、勇者として長年魔族と戦ってきたアリスにも出来ないことである。

その力が何であるのかわからないが、飛鳥には奇跡に近い力が備わっているようだ。もしかすると、ガーティスの言うように人間神の力なのかもしれない。

「う~~~~ん……」

飛鳥は頭を抱えて机にうつ伏せた。最近の飛鳥には、お馴染みの姿勢である。

「飛鳥、また悩んでるの？」

そんな姿を見て、一人の女子生徒が笑いながらやって来た。

「あ…、魔獣智子ちゃん♪」

それは、ガーティスに魔石を憑けられ飛鳥に襲いかかって来た、親友の智子であった。

即座に智子が飛鳥の頭を叩く。魔獣化しているときの記憶は無かったが、かなり気にしているようで顔が笑っていない。だが、すぐに笑顔となり、前の席に陣取った。

「ねえ、今日転入生が来るって知ってた？」

嬉しそうに、飛鳥の反応を窺う。

「転入生？ 明日から夏休みだよ……」

飛鳥は怪訝な顔をした。

白鳳学園は、幼等から大学までの一括教育を行なっている学園で、年度途中の転入には試験でかなりの成績を収めなければならない。この時期に転入してくるのだから、その転入生は優秀であることに間違いなさそうだ。

それにしても、わざわざ一学期最終日に転入してくることもないだろう。飛鳥は、転入生に少しだけ興味をもった。

チャイムが鳴り、ホームルームが始まった。

担任の紹介で、噂の転入生が入って来る。その姿を見て、クラス中にざわめきが起こった。

「これは……また……」

飛鳥も引きつった顔で苦笑した。

腰まであるぼさぼさな長髪を首筋で無造作に縛り、まるで漫画に出てきそうなぐりぐりメガネをかけている。そして、他校でもかっこいいと評判の男子制服を、だらしなく着こなしていた。

見るからにがり勉タイプで、男子の転入生と期待していた女子生徒たちは落胆して一斉にため息をついた。

すると、転入生が自己紹介を始める。

「如月翔です……。如月……と呼んでください」

そっけなく簡潔に呟く。担任も苦笑しながら他に何か無いのかを問いかけると、転入生は面倒臭そうに話を続けた。

「え、実家はこだまの樹で有名な光風町にあります。この金緑石では、樹神神社に居候させてもらうことになっています……」

その瞬間、クラス中が飛鳥を見た。

「はい？」

まさに寝耳に水である。飛鳥には、転入生が何を言っているのかさっぱりであった。そのとき、飛鳥はある重要なことに気づいた。

「如月…翔？」

その名前には覚えがあった。

「えっ、シヨウくんなのー！ー！」

飛鳥は立ち上がり絶叫した。そう…如月翔とは、あのシヨウなのだ。

美人でかつこよく全てにおいて完璧なシヨウが、なぜこんな情けない姿で現われたのか。なにより、どうして白鳳学園に転入してきたのか…、飛鳥は混乱して目を回してしまう。

「ねえ飛鳥、知り合いなの？」

斜め後ろの席から智子が小声で問いかけたが、飛鳥は直立姿勢で固まったまま動こうとしない。

ざわめきが大きくなり、教室は騒然となる。だが、話題の中心であるシヨウは、いたって平然としていた。

終業式も無事に終わり、飛鳥たちは帰宅の途に就いた。

樹神神社へと繋がる森の中、シヨウと飛鳥は並んで歩いている。

その間、シヨウは一言も喋ることがなく、気まずい空気が漂っていた。

チラチラとシヨウの様子を窺ってはため息をつく飛鳥。あの美人なシヨウと、同一人物とは思えないほどの変わりようである。

「ねえシヨウくん…、そのメガネって…」

飛鳥は、まず顔の半分を覆い隠すようなメガネについて質問した。
「これか？」

シヨウが右手をメガネに当てる。

「これは、朝の八時から夜の八時までは、外せないんだ」

訳のわからない説明に、飛鳥が愕然とする。しかも、シヨウの説

明はそれで終わりである。

飛鳥は気を取り直して次の質問に移る。

「どうして、うちの学校に転入してきたの？」

飛鳥は、遠慮気味に呟く。

シヨウが三年前から行方不明だったのはセリアから聞いていた。

人間界へ戻ってきたのなら、優子と同じ地元の光風高等学校へ編入すればいいはずである。わざわざ、金緑石の白鳳学園に編入してくるのは、どう考えてもおかしいのだ。

「お前の護衛……」

シヨウの答えは、飛鳥の想像通りであった。

「ガーティスは死んだが、おまえの存在は全ての聖界に知られてしまった。これまでに以上に狙われるだろうな……」

表情を全く変えずに、恐ろしいことをさらっと言って退ける。飛鳥の顔は蒼白となった。

「ね、狙われるって……、わたしただの人間なんだよ！」

思わず叫んでしまう飛鳥……。シヨウを見つめて次の言葉を待ったが、その答えが返ってくることはなかった。

さらに、微かにではあるがシヨウはにやりと微笑んだように見える。シヨウの性格は、少しも変わっていないようだ。

再びため息をつく飛鳥を見て、シヨウは笑い出してしまう。

「とにかく飛鳥は、剣と精霊術の修行をして、自分自身を護れるようにならないとな……」

そう言っつて、飛鳥の頭を軽く叩いた。

呆然と立ち尽くしてしまふ飛鳥。

「っつて、修行……！」

その間にも、シヨウはどんどん先に行く。

「ちよつと待つてよ……！」

飛鳥は、慌てて後を追いかけた。

長い石段を上がり、樹神社の境内に入ると、子どもたちが一ヶ

所に集まっていた。

その中心には、魔獣化したリウムが寝そべっている。リウムの噂を聞いた近所のちびっ子たちが、遊びに来ていたのだ。

本当のリウムは七歳ぐらいの少女なのだが、普段は成長過程である魔獣の姿をしている。

比奈の母親亜紀に受け入れられたリウムだったが、今でも金緑石の樹神神社で暮らしていた。亜紀と一緒に暮らすことを望んだが、街中に魔獣の姿をしたリウムを住まわすわけにもいかず、結局は樹神神社で預かっていた。

もちろんリウムには、飛鳥の護衛と金緑石地区の警護の任務がある。そんな理由から、リウムが金緑石を離れるわけにはいかなかった。

そして、日頃の活動によってすっかり人気者となってしまうたりウムに、今日も子どもたちが群がっているのだ。

不機嫌な唸り声を上げ魔獣独特の強面で睨むリウム……。だが、恐いもの知らずの子どもたちが怯むはずはない。背中に乗られ首にしがみ付かれ、耳やしっぽを引っ張られ……と、リウムはただ耐えるしかなかった。

「リウム、大変そうだな」

シヨウは、困り顔のリウムを見て苦笑する。

その姿に、リウムは愕然とした。

「マス……タ？」

子どもたちを引きずったままシヨウに近づき、確かめるように匂いを嗅いだ。

「……生きてる。どうして！」

そんな叫びに、シヨウのチョップが額に炸裂する。リウムは、シヨウが完全に死んだものと思っていた。

次の瞬間、リウムは魔獣化を解いて暗黒族の少女となった。集っていた子どもたちは、一斉に地面へ落下する。

「マスター」

リウムは、笑顔を見せてシヨウに飛びついた。シヨウに頭を撫でもらい、もの凄く嬉しそうである。

「シヨウくん、リウムちゃんが人型になれるって知ってたの？」

リウムがはじめて人型になったのは、ガーティスとの戦いときである。その場にいなかったシヨウが知っていたことに、飛鳥はかなり驚いた。

シヨウが左手を見せると、その掌には真つ赤な魔石が憑いている。

「この魔石はリウムのコピー。リウムとは繋がっているんだ」

シヨウは、リウムの頭を強めに撫でた。

「だから、リウムが勇者として取った行動も、ある程度知っているよ」

シヨウに褒められて、リウムはしっぱを振った。

子どもたちは、魔獣がしっぱと獣耳を持つ少女になったことに驚く。しかし、魔獣型の方が良かったとのがっかりする声が上がった。そんな声を聞いたリウムは一瞬嫌そうな顔をしたが、ちびっ子たちの期待を裏切ることができず、再び魔獣化する。すると、子どもたちは一斉に飛びついた。

子どもたちの、しっちゃんかめっちゃんかな大騒動が始まる。

飛鳥は頭痛を感じて頭を押さえた。リウムのこと、人間神のこと、更にはSPINELの問題も残っている。

これからも、飛鳥に平穏が訪れることはなさそうだった。

第30話 樹神飛鳥（後書き）

あとがき

え、読みにくい作品に最後までお付き合いいただき、ありがとうございました。はい、わかっております。できれば、一から書き直したいと…自分でも思っております。

飛鳥の話を書き始めたはずが、リウムが登場したころから変な方向へと進みはじめ、総合的にわけのわからない作品となってしまうました。

しかし、シヨウがあまり出てこない作品は、微妙に盛り上がりに欠けますね。次の「はじまりの時代」では、シヨウとアリスが必要以上に大活躍します。舞台も人間界から精霊界（天空界）へと移るので、Crystal Legend 本来の雰囲気に戻ります。ただ、とある戦争に巻き込まれるので、人（天空族）もたくさん死んでしまいますが…。

とにかく、「トルマリンの胎動」は、いかがだったでしょうか？ トルマリンとリウムの関係は、「はじまりの時代」でも続きます。また、シヨウとアリス出生の秘密なんかも判明しちゃったりします。是非とも、続けてご覧ください。

2008/04/07 Crystal クリスタル

「Crystal Legend 7 | 2 トルマリンの胎動」
2002/11/09 ~ 2003/03/18 連載作品

同一作者小説紹介

Crystal Legend シリーズ 「Crystal Legend 7 | 2 トルマリンの胎動」、
「Crystal

all Legend 7 | 3 〽はじまりの時代〽」、「Cry
stal Legend 7 | 4 〽もしかして怪談?〽」

超獣神グランゾル シリーズ 「超獣神グランゾル」、「鳳凰
編」

なんちゃらプラネット シリーズ 「なんちゃらプラネット」

美咲ちゃん シリーズ 「もしかして怪談?」

4コマ劇場 シリーズ 「桜のひみつ」、「ラズベリル ショ

ート劇場」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8842d/>

Crystal Legend 7_2 ~ トルマリンの胎動 ~

2010年10月8日14時18分発行